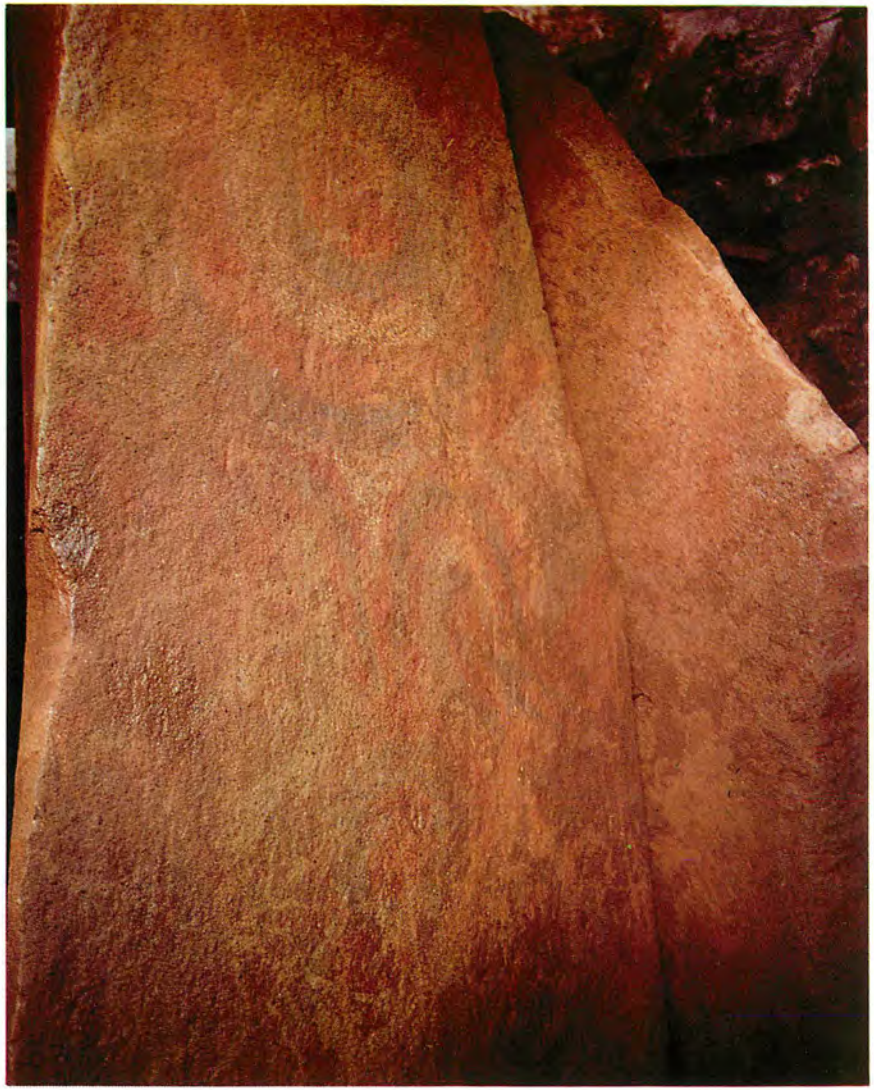
熊本県文化財調査報告　第41集

清水古墳群
野寺遺跡
林源衛門墓

1980
熊本県教育委員会

（榊晃弘氏提供）



（榊晃弘氏提供）

熊本県文化財調査報告　第41集

清水古墳群
野寺遺跡
林源衛門墓

1980
熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴ない、日本道路公団の委託により、昭和50年度から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した八代郡宮原町の「野寺遺跡」、「林源衛門墓」及び八代市の「清水古墳」に関するものであります。

野寺遺跡では江戸時代の仏教関係の祭祀遺構を、林源衛門墓では江戸時代の武士の墓とその出自を調査し、清水古墳では古墳時代後期の石室の調査を行い、とくに付近で明治時代に発掘された門前古墳の出土品についても集録することができました。

本書が、埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸せです。

発掘調査の実施にあたりましては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々からの御協力を賜りました。また宮内庁からは遺物写真の提供及び本書掲載の協力を得ました。

ここに心からお礼を申しあげます。

昭和55年３月31日

熊本県教育長　井　本　則　隆

例　　言

1. 本書は、熊本県教育委員会が、日本道路公団（福岡建設局）の委託を受けて実施した九州自動車道関係の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本書には、清水古墳群（八代市）、野寺遺跡（宮原町）、林源衛門墓(同町)に関する報告で、執筆者はそれぞれの文末に記した。
3. 本書の専門的視野から長崎大学内藤芳篤・分部哲秋、県立美術館花岡興輝氏から玉稿をいただき、掲載した。
4. 本書の図面等は各執筆者によるもので、整理については県収蔵庫で行い、遺物写真については白石巌氏の協力をうけた。
5. 清水古墳の項の門前古墳出土遺物写真については宮内庁書陵部、付論の横山古墳のカラー写真については榊晃弘氏から提供をうけた。
6. 本書の編集は各執筆者と協議のうえ、隈昭志が当たり、上野辰男、西町圭子、佐藤征子の協力をうけた。

Ⅰ 清 水 古 墳 群

本 文 目 次

第１章　序　　説……1
1. 遺跡の立地……1
2. 調査に至る経緯……2
3. 調査経過……4
第２章　遺跡の調査……7
1. 調査の方法……7
2. 土器溜……7
3. ピット群……13
4. 土器包含層……15
第３章　周辺の調査……17
1. 清水１号古墳……17
2. 清水１号古墳出土の人骨……22
3. 門前古墳の調査……29
4. 門前古墳発見の経緯……32
第４章　総　　括……40

挿 図 目 次

第１図　清水古墳群周辺の古墳群……1
第２図　遺跡周辺地形図……5
第３図　地形及び調査区配置図……6
第４図　土器溜実測図……8
第５図　土器溜出土土器実測図(1)……9
第６図　土器溜出土土器実測図(2)……10
第７図　土器溜出土土器実測図(3)……11
第８図　土器溜出土土器実測図(4)……12
第９図　ピット群全体図……13
第10図　ピット群出土土器実測図……14

第11図　調査区土層断面図……14
第12図　包含層出土土器実測図……15
第13図　清水１号古墳石室実測図……18
第14図　清水１号古墳石室プラン実測図……19
第15図　清水１号古墳出土遺物実測図……20
第16図　清水１号古墳出土遺物実測図……21
第17図　門前一号古墳地形実測図……30
第18図　門前二号古墳石棺拓影図……31

図　版　目　次

図版１　遺跡全景・トレンチ
図版２　ピット群全景・ピット群近景
図版３　第５ピット検出状況・第７ピット検出状況
図版４　土器溜・清水１号古墳
図版５　清水１号古墳・玄室内の遺物出土状況
図版６　清水1号古墳玄室内遺物出土状況
図版７　土器溜出土の須恵器
図版８　土器溜出土の須恵器
図版９　土器溜出土の須恵器
図版10　土器溜出土の須恵器
図版11　土器溜出土の須恵器・清水１号古墳出土の鉄器
図版12　清水１号古墳出土の耳飾・ふいご羽口
図版13　門前１号墳出土内行花文鏡（宮内庁提供）
図版14　門前１号墳出土獣首鏡・管玉・勾玉（宮内庁提供）
図版15　門前古墳装飾石材
図版16　清水１号古墳出土人骨 ①頭蓋冠 ②下顎骨上面 ③下顎骨前面
図版17　清水１号古墳出土人骨 ①上腕骨 ②大腿骨
図版18　清水１号古墳出土人骨 ③大腿骨 ④大腿骨

Ⅱ　野寺遺跡・林源衛門墓

本　文　目　次

第１章　序　　説……43
　1.　調査に至る経緯……43
　2.　遺跡の位置……44
第２章　野 寺 遺 跡……45
　1.　現状と調査の方針……45
　2.　調査日誌抄……45
　3.　発掘調査の記録……47
　　(1)　第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチの観察記録……47
　　(2)　第Ⅲトレンチ出土の焼土と遺物……50
　　(3)　表面採集遺物……53
　4.　まとめ……52
第３章　林源衛門墓……54
　1.　調査経過……54
　2.　調査前の状況……55
　3.　遺構検出の状況……55
　4.　遺構……56
　5.　遺物……57
　6.　小結……57
　7.　林源衛門尉について……58

遺跡挿図目次

第１図　野寺遺跡地形およびトレンチ配置図……46
第２図　第Ⅰ・Ⅱトレンチ断面図……48
第３図　第Ⅲトレンチ断面図……49
第４図　焼土の平面および断面図……50
第５図　木灰中出土の銅片……51

第６図　木灰中出土の鉄釘……51
第７図　木灰中出土の古銭拓影……51
第８図　表採遺物拓影……52
第９図　表採遺物……52
第10図　土層断面 ……53
第11図　遺跡分布図……60
第12図　林源衛門墓及び野寺遺跡地形図……61
第13図　林源衛門墓調査区全体図……62
第14図　林源衛門墓石組の現状及び土壙出土状況図……62
第15図　土壙出土遺物（拓本）……63
第16図　今寺四方仏実測図……64
第17図　早尾六地蔵実測図……65
第18図　早尾大日如来、河窪眼鏡橋実測図……66
第19図　四方仏、五輪塔実測図……67
第20図　五輪塔実測図……68
第21図　林源衛門板碑拓本（正面）……69
第22図　林源衛門板碑拓本（背面）……70
第23図　早尾六地蔵拓本……71
第24図　早尾六地蔵、今寺四方仏拓本 ……72
第25図　今寺四面仏拓本……73
第26図　早尾大日如来拓本……74
第27図　坊屋敷、山口四面仏拓本 ……75
第28図　坊屋敷四面仏拓本……76

図　版　目　次

図版19　野寺遺跡遠望
図版20　野寺遺跡発掘状況
図版21　野寺遺跡発掘状況
図版22　第Ⅱトレンチ検出の焼土
図版23　検出遺物
図版24　林源衛門墓近景
図版25　石組と板碑

図版26　土壙及び出土遺物
図版27　林源衛門墓周辺の塔碑
図版28　林源衛門墓周辺の塔碑
図版29　林源衛門墓周辺の塔碑
図版30　林源衛門墓周辺の塔碑
図版31　林源衛門墓周辺の塔碑
図版32　林源衛門墓周辺の塔碑
図版33　林源衛門墓周辺の観音
図版34　林源衛門墓周辺の観音
図版35　林源衛門墓周辺の観音
図版36　林源衛門墓周辺の観音
図版37　林源衛門墓周辺の観音
図版38　林源衛門墓周辺の神社
図版39　林源衛門墓周辺の古仏
図版40　林源衛門墓周辺の古仏

Ⅲ　付1. 関外目遺跡他

付2. 横　山　古　墳

挿　図　目　次

附2.　第１図　墳丘実測図 ……付９
　　第２図　石室実測図 ……付10

図　版　目　次

図版41　横山古墳景観
図版42　後円部発掘状況
図版43　石室及び羨道部
図版44　羨道部状況 1.
図版45　羨道部状況 2.
図版46　羨道部状況 3.

図版47　石室内遺物出土状況
図版48　古墳石室 1.
図版49　古墳石室 2.
図版50　古墳石室 3.
図版51　墳丘（土溜めと遺物出土状況）
図版52　石室・羨道全景
図版53　出土遺物（装身具）
図版54　鉄　鏃
図版55　鉄鏃・刀子及び刀装具
図版56　馬具 1（轡他）
図版57　馬具 2（くさり金具他）
図版58　馬具 3（留金具）
図版59　須恵器（高坏）
図版60　土師器と須恵器
図版61　須恵器（提瓶）
図版62　須恵器（坏）
図版63　石屋形撤去前の保存処置 1.
図版64　石屋形撤去前の保存処置 2.
図版65　古墳石材撤去作業 1.
図版66　古墳石材撤去作業 2.
図版67　古墳石材撤去作業 3.
図版68　古墳石材撤去作業 4.
図版69　基礎工事をした保存施設に石材を置く
図版70　石材撤去後の埋めもどしと道路建設
図版71　古墳石材撤去後の修復と石材移転先の覆屋
図版72　本坂北経塚・桑水宝塔及び桑水洞穴

I

清水古墳群

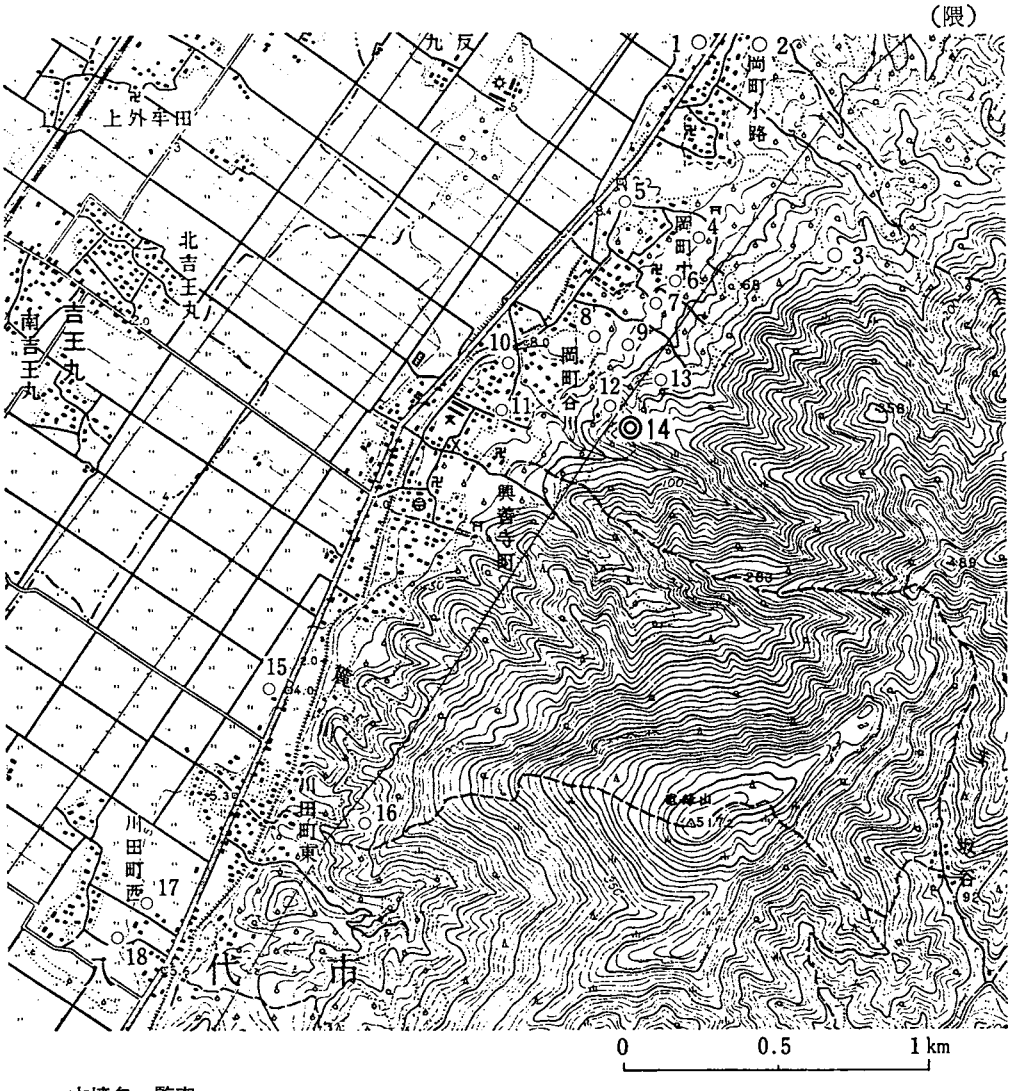
第Ⅰ章　序　　説

1.　遺跡の立地（第1図）

九州自動車道は松橋インターから八代平野とその東側に連なる山地との傾斜変換線にそって南下し、興善寺（八代市興善寺町）の南方で、国道3号と交叉し、八代インターに至る。

この傾斜変換線上には多くの遺跡がベルト状に立地している。

清水古墳群は、鞍ガ峯(標高358m)～竜峰山(同517.2m）のほぼ中間の裾部（同32m）に立地し、水田との比高差約27mである。一帯はミカン畑に造成され、地形等は著しく変容している。



古墳名一覧表

1. 岡城古墳　2. 境古墳群（1～4号）　3. 岩屋本古墳　4. 平原古墳群（1～4号）　5. 行西古墳群（1～4号）　6. 山口古墳群　7. 玉泉寺古墳群　8. 門前2号古墳　9. 門前1号古墳　10. 谷川古墳群（1～3号）　11. 如見3号古墳　12. 如見1号古墳　13　如見2号古墳　**14. 清水古墳群**　15. 車塚古墳　16. 川上古墳群（1～3号）　17. 岡塚2号古墳　18　岡塚1号古墳

第1図　清水古墳群周辺の古墳群

2. 調査に至る経緯

九州自動車道建設事業（松橋～八代間）に伴ない熊本県教育委員会では昭和45年度に、予定路線の分布調査を行い、清水古墳群など33カ所の確認をした。その後、昭和49年度に再踏査し、新たに年の神貝塚（下益城郡小川町）など8カ所を確認追加した。このうち、路線内に含まれた遺跡は別表のとおりである。

当清水古墳群の主体部は幸に路線から除外されたため、古墳の周溝部とみられる地域の調査を重点的に実施した。

調査は熊本県教育委員会が行い、調査組織は以下のとおりである。（隈）

調査の組織

調査責任者	文化課長 岩崎辰喜
	前文化課長 合志太助
調査総括	同文化財調査係長 隈昭志
	同課長補佐 田辺宗弘
	同前課長補佐 真弓袈裟勝
調査事務局	同管理係長 村上孝司
	同前管理係長 望野正雄
調査員	同学芸員 高木正文
	同嘱託 松村道博
	同嘱託 勢田廣行
調査資料整理	同主幹 上野辰男
	同嘱託 白石厳
	同嘱託 山城仁恵
調査の指導助言	国学院大学教授 乙益重隆
	長崎大学教授 内藤芳篤
	同助手 松下孝幸
	同助手 分部哲秋
調査協力者	長崎大学医学部解剖学第二教室
	八代市岡町谷川区

九州自動車道（松橋～八代）文化財一覧表

種　別	名　　称	所　　在　　地	時　　代
城　跡	竹崎城跡	下益城郡松橋町竹崎	鎌倉・戦国
古　墳	年の神古墳	〃　小川町北小野年の神	古墳
貝　塚	年の神貝塚	〃　〃　〃　〃	鎌倉
〃	中小野貝塚	〃　〃　中小野	縄文・古墳・歴史
古塔群	アケサン古塔碑群	〃　〃　南小野御手洗	歴史
〃	高塚五輪塔群	八代郡竜北町高塚	〃
横　穴	大瀬田横穴群	〃　〃　〃　大瀬田	古墳
〃	立神岩立Ｃ古墳	〃　宮原町下溝口	〃
〃	五ツ穴横穴群	〃　〃　立神岩立	〃
寺院跡	立神寺院跡（立神トドク遺跡）	〃　〃　立神	旧石器・縄文・歴史
窯　跡	平原瓦窯址群	〃　〃　平原	〃　〃　〃
古　墳	野寺古墳参考地	〃　〃　早尾	歴史
古塔群	林源衛門墓	〃　〃　〃	江戸
〃	オサキ墓地古塔碑群	〃　〃　椈	歴史
古　墳	境古墳群	八代市岡町小路字境	古墳
住居跡	境遺跡	〃　〃　岡小路字境	縄文・弥生・歴史
古　墳	平原古墳群（平原・野中遺跡）	〃　〃　岡中平原	古墳・歴史
歴　史	玉泉寺五輪塔・玉泉寺古墳	〃　〃　岡中	〃　〃
古　墳	清水古墳	〃　〃　谷川清水	古墳
寺院跡	興善寺跡（四郎丸・馬場・志水）	〃　興善寺町	奈良
古　墳	車塚古墳	八代市川田町川田	古墳
遺物散布地	川田遺跡	〃　〃	歴史
〃	片町遺跡（小筑遺跡）	〃　片町	〃

3. 調査経過（第2、3図）

昭和52年4月23日、調査地の状況を調べ、その後遺跡の踏査を実施した。また岡町谷川地区の区長宅を訪れ、作業員の手配等調査への協力を依頼した。

4月26日　遺跡は平坦化されたみかん畑になって、その樹木は一度伐採されていたが、用地買収後かなりの日数を費し、雑草が背丈位に伸びていたので伐採から始める。

4月30日　高速自動車道の基本杭ＳＴＡ152を基点として遺跡全体に５ｍの方眼を設定する。

5月９日　文化財収蔵庫より器材を搬入し本格的な発掘調査に入る。午後、宮原町、八代市地区での縦貫道内遺跡調査が数ケ所に及ぶため、文化課の各調査担当者、道路公団、清水建設相互に調査、工事の状況等について協議し、調査が円滑に実施できるようにする。以下その要点を記す。

1. パイロット道路を平原古墳群（八代市）の調査地から進入し、南北に進めたい。そのため調査区域内に幅10ｍの工事用道路を設けたいので、その部分の調査を急いでもらいたい旨道路公団より要望。

2. 文化課の各調査担当者は可能な限り協力するが、各々調査状況が異るので、工事用道路の工事開始の時期、場所等については調査担当者と協議し実施する。

3. 清水古墳群は調査開始したばかりであるので、終了の時期は３～４カ月後である。東側部分（山際）の調査を急ぎ、遺構の確認を早急に実施するよう回答。

5月10日　Ｇ－７、９Ｇ内に２×５ｍのトレンチを調査。表土から須恵器の破片を数点出土。Ｇ、Ｉラインを５ｍ毎に同様のトレンチを入れる。

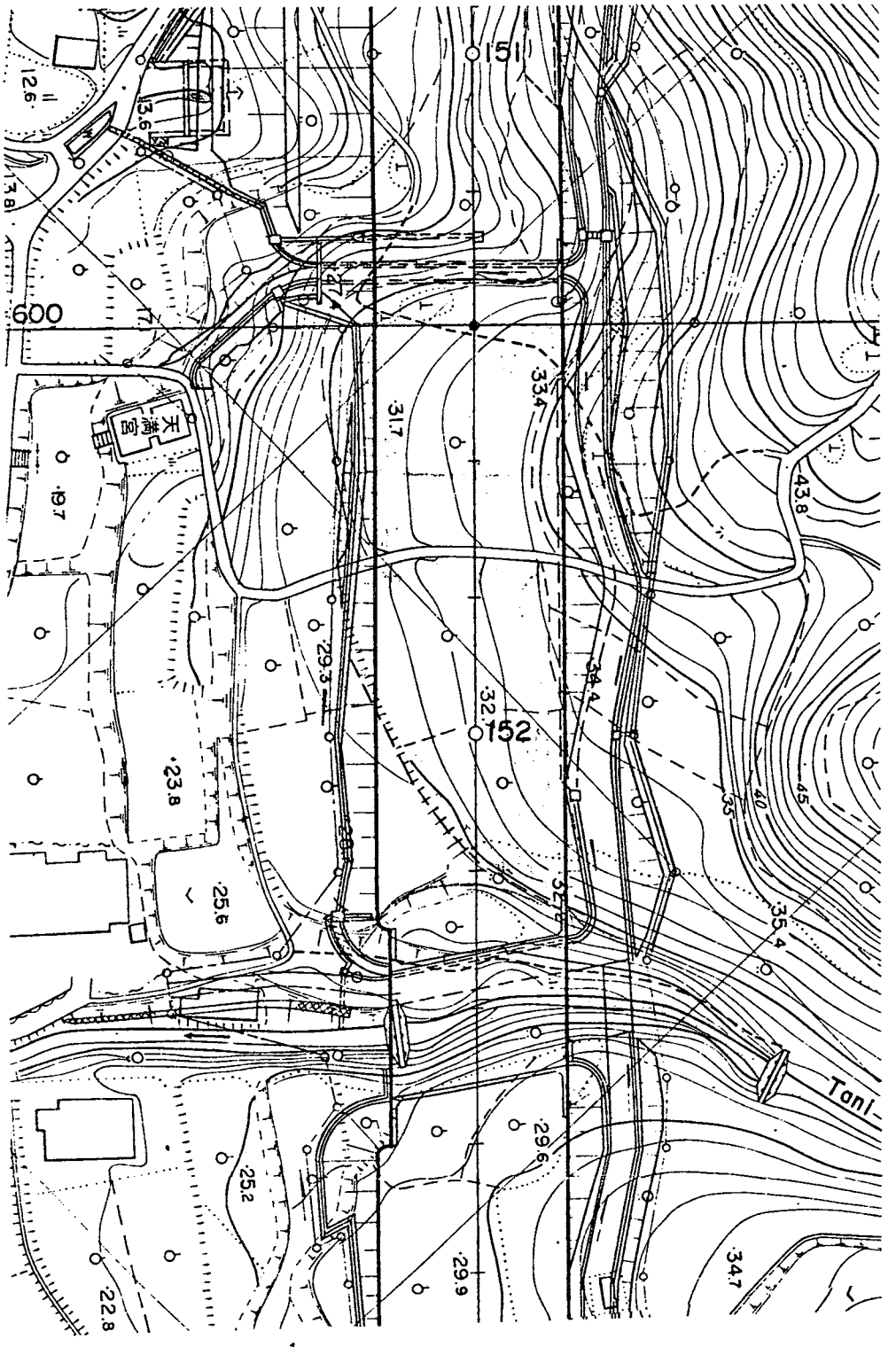
6月１日　Ｇ－１Ｇに径約50cmの柱穴状ピットを確認し、グリット全体の掘開を行い、４個を検出する。その中の一つはピット下面に敷石を有するものがあり、建物の柱穴の可能性が強まり、Ｇ－２も掘開する。

Ｇ－９Ｇ～Ｈ－９Ｇに東から西へ延びる落ち込みを確認。

6月27日　梅雨に入り調査できる日数が少なく、また八代地方特産のイ草の取り入れ期と重なり、作業員が思いのほか集まらなく、調査は遅々として進まない。

古墳石材と考えられる周辺を含め遺跡全体に２×５ｍのトレンチを入れ終る。その結果①古墳は存在しない。②Ｆ－７Ｇに須恵器の土器溜様遺構がある。③Ｇ、Ｈ－９Ｇの落ち込みは自然傾斜である。畑地開墾により平坦化されたものであり、須恵器、底部糸切り土師器の皿、さらに近世陶磁器も出土するが二次堆積であり、遺構ではないことが判明。④Ｇ－１、２Ｇにピットを確認。これはさらに拡がるものと思える。⑤今後の調査は土器溜とピット群に全力を注ぐ。

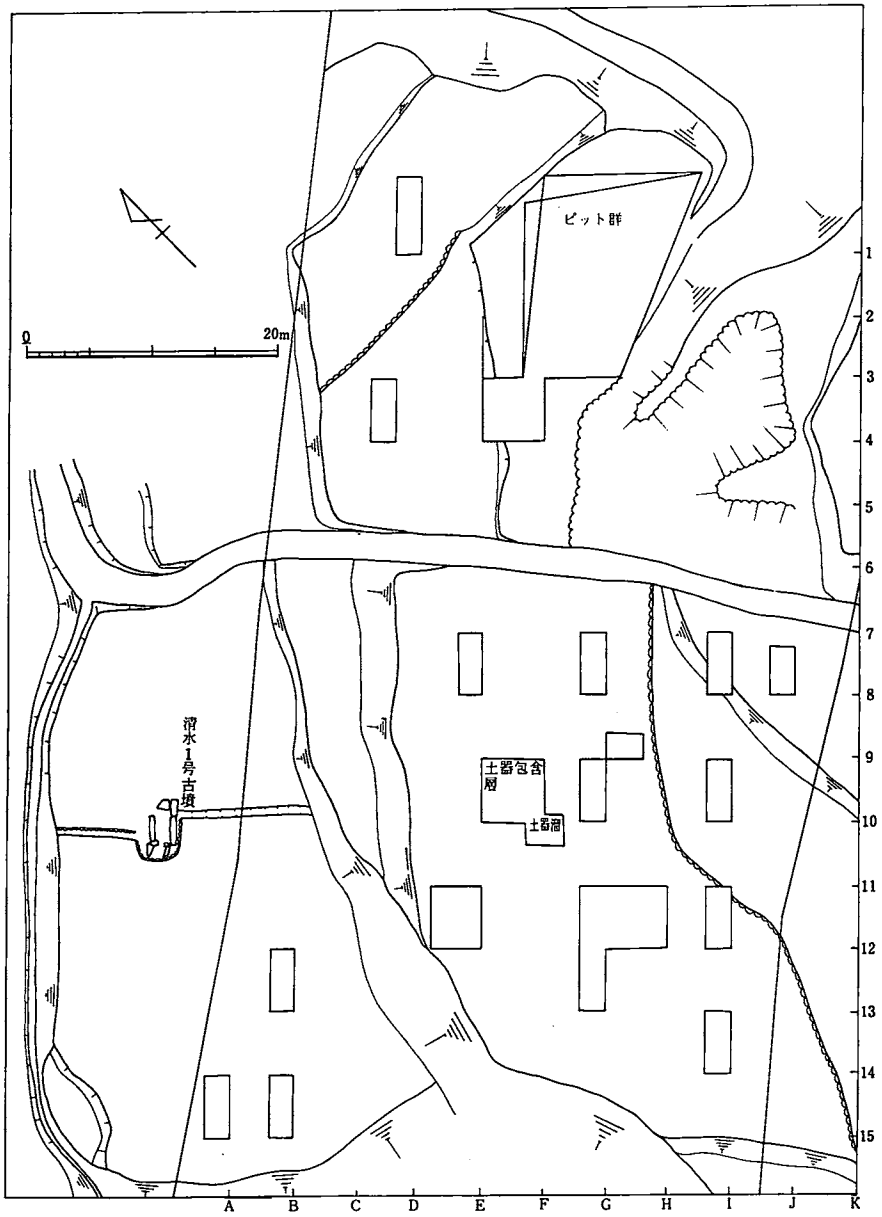
7月27日　ピット群が所在するＧ-１、２Ｇを拡張するが、大小のピット10数個を検出する。ピットは不統一で、建築物を想定できるような配置は示さない。時期は中近世である。土器溜



第2図　遺跡周辺地形図 $\frac{1}{1000}$

の範囲を確認するため周辺を拡張する。E－7区に須恵器、瓦質土器等の古墳時代～中近世の遺物包含層を検出。二次堆積であることが判明し、拡張は実施しない。各調査区を清掃し、写真撮影を行い実測に移る。

8月5日　実測を終り、調査を終了する。器材を文化財収蔵庫へ運ぶと共に岡町谷川の区長宅へ赴き、調査完了の報告をする。さらに作業員に遺跡の概要を説明し、文化財への理解を深め今後も助力してもらうようお願いする。　（松村）



第3図　地形及び調査区配置図

第2章　遺跡の調査

1. 調査の方法

竜峯山より西へ派生した山塊は大小の小丘陵を形成し、八代平野へと続く。現在は広大な平野でイ草の産地として知られているが、ほとんどは近世の干拓で、当時は丘陵裾に展開する狭少な耕地しか有しない地域である。藩政時代の道路である薩摩街道は標高約10m前後の丘陵裾部を通り、現在の集落もその道に添って展開している。清水古墳を含む岡谷川古墳群もこの集落内に展開し、約10基の円墳を数える。ほとんどがいわゆる「鬼の岩屋」と呼ばれるものである。遺跡は岡谷川集落を見下す標高20～30mの位置で、八代平野を一望でき、さらに宇土半島を望むことができる。

道路敷地内に古墳石材と考えられるものが3カ所に散在し、道路敷地外に周辺を削平されてはいるが横穴式古墳が一基存在していることから、道路敷地内にも墳丘を削り取られた古墳が存在している可能性が強くもたれた。また平坦面が2面存在することから、他の遺構の存在も考えられた。以上のことからグリッド法を用いて調査を実施した。縦貫道基本杭ＳＴＡ152を基点に北から東へ45°角度を振り、南北をＥライン、東西を11ラインとし、5mの方眼を設定する。各々東隅ラインの交点をグリッドの名称とし、たとえばE-11Gという呼称を用いた。

各々のグリッドを全部調査するには相当の時間を費すので、その中を2×5mの小トレンチを一ます飛びに入れ、遺構の確認を行い、遺構の存在した部分はさらに拡張することとした。

検出された遺構はF-9Gの南隅に土器溜、F～H～0～2Gに中近世ピット群、F-9Gの西側には土器包含層がある。（松村）

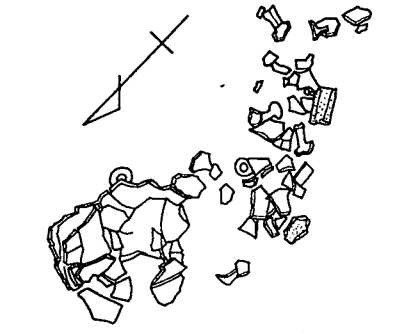
2. 土器溜（第4図）

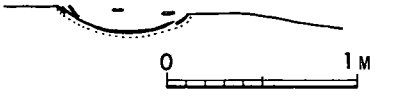
F-9Gの南隅からF-10Gの北隅にかけてほぼ南北に細長く確認された。遺構はⅢ層黄褐色土中に発見され、特別な掘り込みは認められなかった。包含層中の土器とも判断できるが、後に述べるように大甕、短頸壷、高坏等が多くしかも一括して出土するし、また他の時期の遺物を含まないので一応土器溜として取り扱いたい。

南北214cm、西南70cmを測り南北に細長く広がっている。北端に胴～底部を下にした大甕があり、その東に短頸壷の完形品、南に横転した高坏、壷がほぼ同一レベルに並ぶ。その周りには坏、甕の小破片、石が観察できる。さらに南には同様の須恵器が厚さ約30cmの土層中にまとまって出土している。

出土土器（第５～８図）

坏蓋（１～４）　すべてつまみを有するもので、口縁部内面に段を付すものとないものに大別できる。１はつまみ部を欠失する。体部と天井部の境界に浅い段をもつ。天井部はヘラ削り、他は横ナデ。４は扁平なつまみをもち、体部$\frac{2}{3}$はカキ目、体部と天井部の境界に段を有する。いずれも胎土は砂粒を含まず、良好で、焼成も良く、色調は灰白色ないし青灰色を呈する。





第４図　土器溜実測図

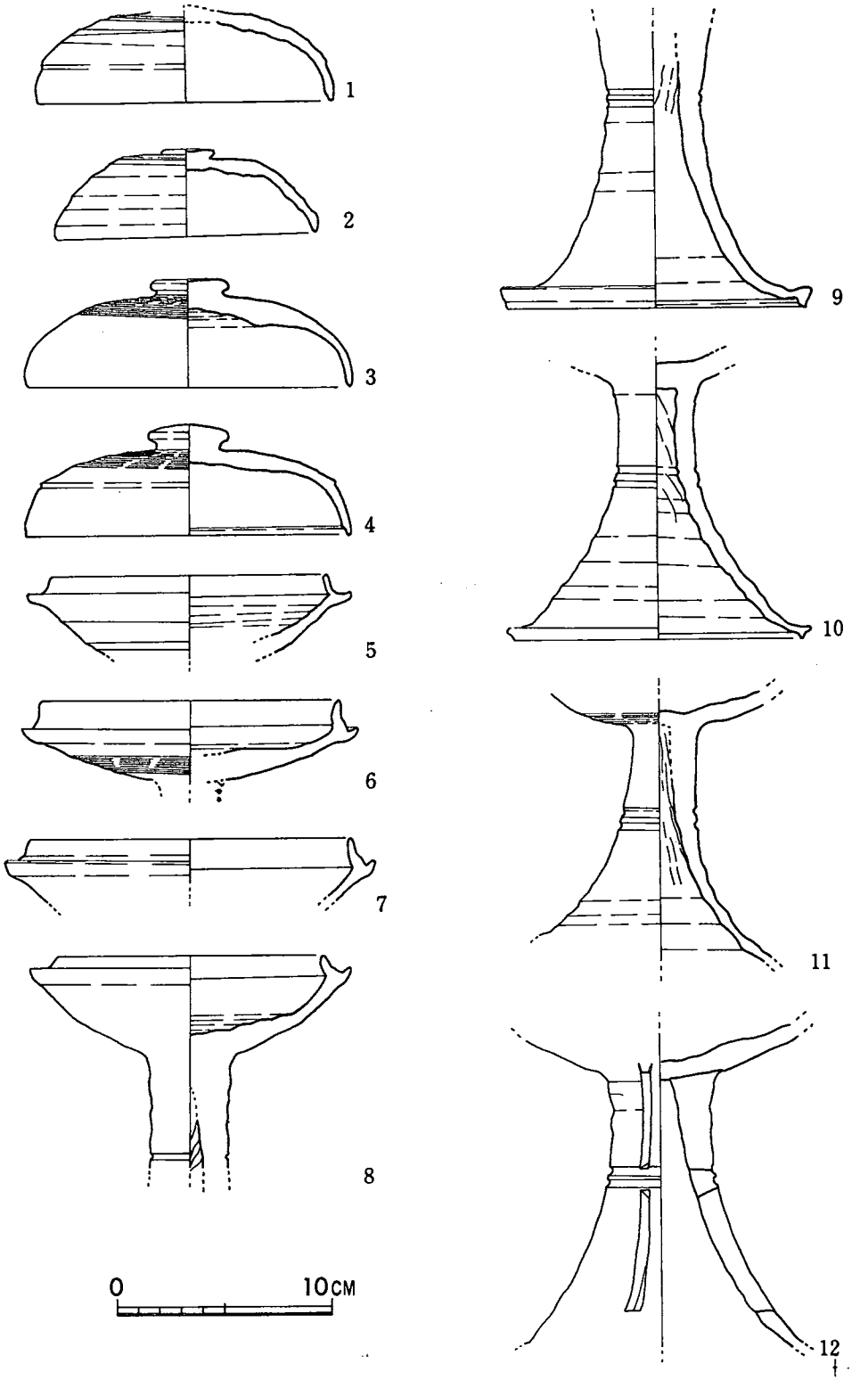
有蓋高坏（５～15）　口縁部は４点がある。５は坏部の立ちあがり0.9cmと低く、直接的に内傾し、端部は丸くおさまる。受部は内弯気味に外側へ短く開く。胎土・焼成が良く、色調灰白色。６～８は坏部の立ち上りはそのほぼ中央に屈曲部を有し、外反気味に広がり、端部は丸く尖る。６は坏部$\frac{2}{3}$にカキ目を施し、他はナデ。８は脚部に凹線をもち、内面にしぼり痕が残る。９～15は坏部下半～脚部の破片であるが、一応この中で説明したい。12は凹線を境界に上下に長方形の透孔をもつ。他には透孔は見られない。手法はともに類似し、脚上半部に二段の凹線をめぐらす。12の底部にはカキ目を加える。脚部は大きく開き、一坦綾を形成し、内弯しながらすぼまり、丸い端部となる。内側は垂直に立ち上り脚部へと続く。内面にはしぼり痕が認められる。

平瓶（16）　頸～胴部の破片で全体の形態は不明。胎土焼成は良好である。肩～胴部にかけて自然釉がかかり緑色を帯びる。内面には横ナデ時の綾線が明瞭に残る。

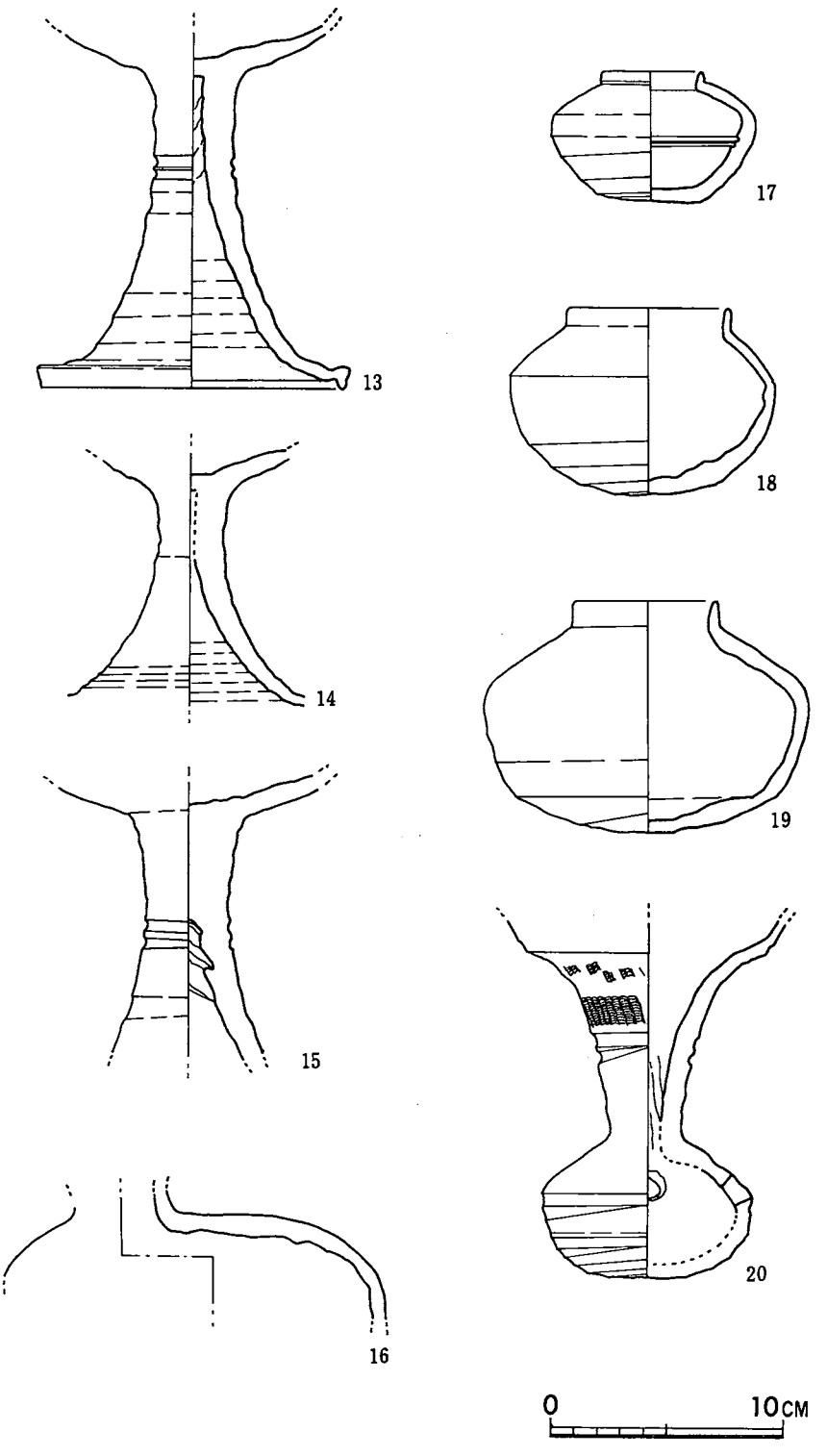
短頸壷（17～19）　17は口径4.5cm、器高5.6cm胴部上半に最大径があり8.8cmを測る。0.4cmの短い口頸部が垂直に立ち上り、丸い端部となる。口頸部と体部の境界には浅い沈線をめぐらす。体部下半から底部にかけてはヘラ削りを施す。底は平底であるが、いくぶんゆがみをもつ。18は口径7.1cm、高さ8.0cmを測る。胴部中央に最大径をもつ。肩部に部分的に浅い凹線をめぐらす19はさらに大きくなり、口径6.3cm、高さ10.0cm、胴部最大径14.1cmを測る。口頸部から胴部にかけての内面には稜をもたず丸くなっている。底部は丸底で、胴部下半～底部をヘラ削りを施し、その後軽くナデている。

甕（20）　口縁部を欠失する。体部中央に凹線をめぐらし、その下方はヘラ削りを施す。頸部のほぼ中央部に二条の凹線をめぐらす。その上には幅1.3cmの櫛歯文を配する。口頸基部は細く外反して伸び、屈曲して口縁部へと続く。

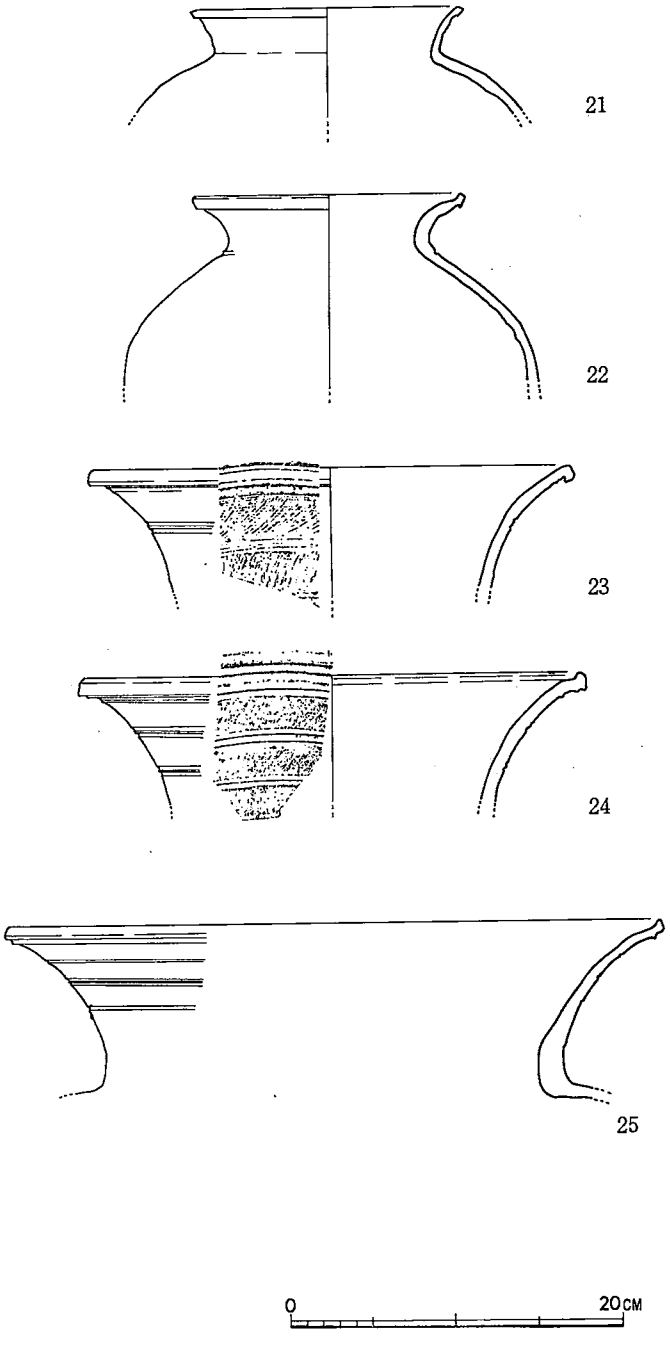
甕（21～27）中甕（21・22）と大甕（23～27）に大別できる。21は肩～口縁部にかけての破片である。球形の胴部に短かく外反する口頸部がつく。口唇部は肥厚し断面菱形となる。胴



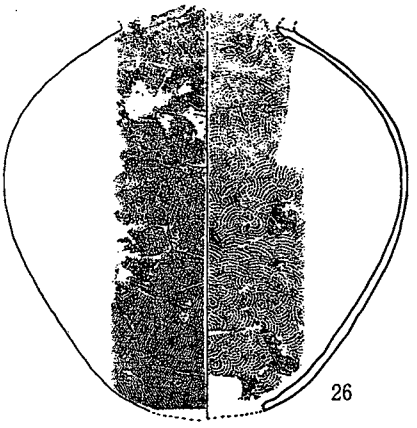
第5図　土器溜出土土器実測図(1)

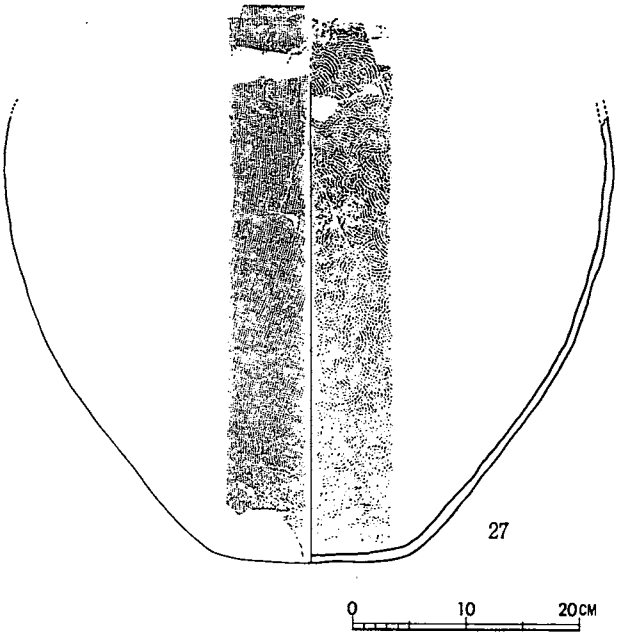


第6図　土器溜出土土器実測図(2)



第7図　土器溜出土土器実測図(3)





第8図　土器溜出土土器実測図(4)

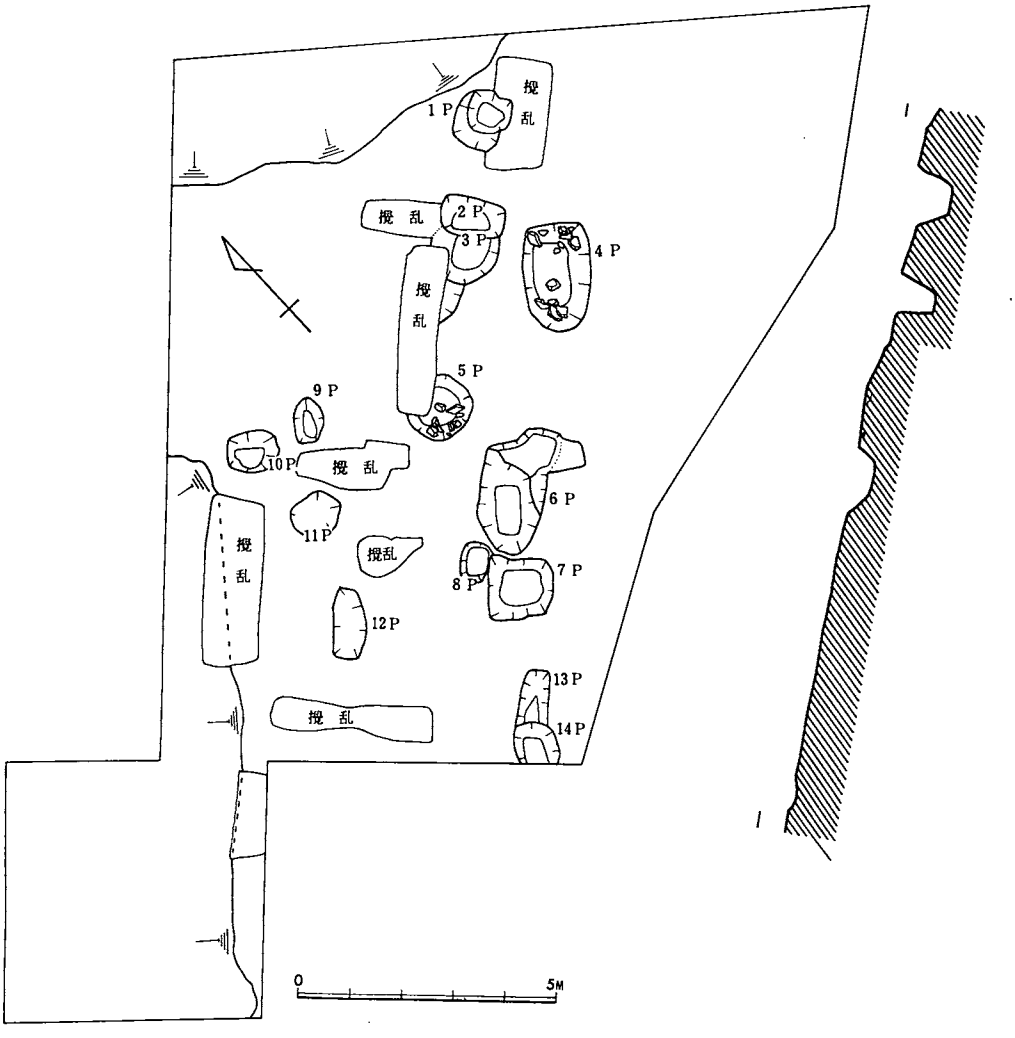
部にはクシ目が直行して走り、その上に自然釉がかかる。22も形態はほぼ同様であるが、口唇部がクサビ状を呈し、口唇部中央が丸くなる。内面青海波状文、外面カキ目を施す。23は大甕で頸部中央に二条の凹線をめぐらし、その上にヘラによる斜行沈線、下に細い波状文を施す。24は二条の沈線を二段にめぐらし、各々に櫛歯波状文、25は三段の凹線間にヘラ描羽状文を施し頸部の下端にヘラによる細いタッチの絵画的線刻が観察できる。25を除き焼成、胎土とも良好で、口頸部内側には自然釉が認められる。26は底部及び口頸部を欠失する。最大径を胴部上半にもつ大甕である。外面には平行タタキを交叉させ、内面には同心円の青海波状文を残す。27は胴部下半の破片である。最大径81.2cmを測るとくに大型品である。底部は丸底的な平底。器面調整は26と同様な手法を用いる。ともに焼成、胎土良好で、器壁は薄い。

（松村）

3. ピット群（第9図）

F～H～0～2Gの間に検出された。北東部から南西部にかけては、自然の傾斜をもち、南東部は稜線へ向い急峻な地形を有する。東北部から南西へ延る細長い平坦部にピットは設けられている。

ピットは根石を有するもの（4、5p）や方形ないし長方形のもの（1、2、7p）もみられる。1pは隅丸方形で二段の掘り込みをもつ。東半部は浅い覚乱を受け、上段のピットは検出できなかった。2pは隅丸長方形で端正な形態を呈する。円形皿状で浅い3pと重複する。4pは北東、南西部に礫をもつ、平面形が隅丸長方形のピットである。5pと同様に花崗岩、安山岩の角をもつ礫である。北東部は角張り、南西部は丸味をもつ。5pは北側を大きく撹乱



第9図 ピット群全体図

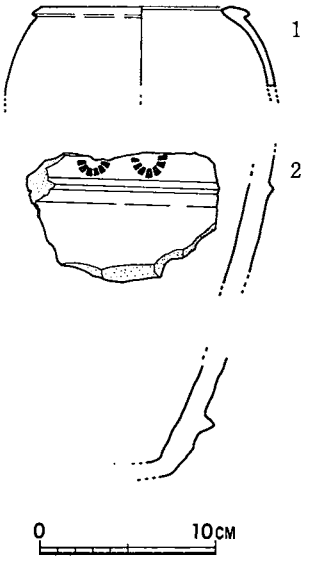
されているが、全容はほぼうかがえる。浅いピットで南側には５～20cm位の花崗岩礫が床面に密着して、約10個検出された。中心部には少なく縁に集っている。６ｐは東を撹乱し、および浅いピットを重複している。平面形は４ｐと同様であろう。深さは約74cmを測り、床面は長方形で端正な形状を呈する。７ｐはほぼ方形のピットであり、楕円形の８ｐと接する。

ピットは全体にまとまりがない。４ｐはその形状、規模から柱穴とは考え難い。また５ｐは根石もあり柱穴と考えられるが、対応するピットは確認できなく、必ずしも柱穴とは考えられない。

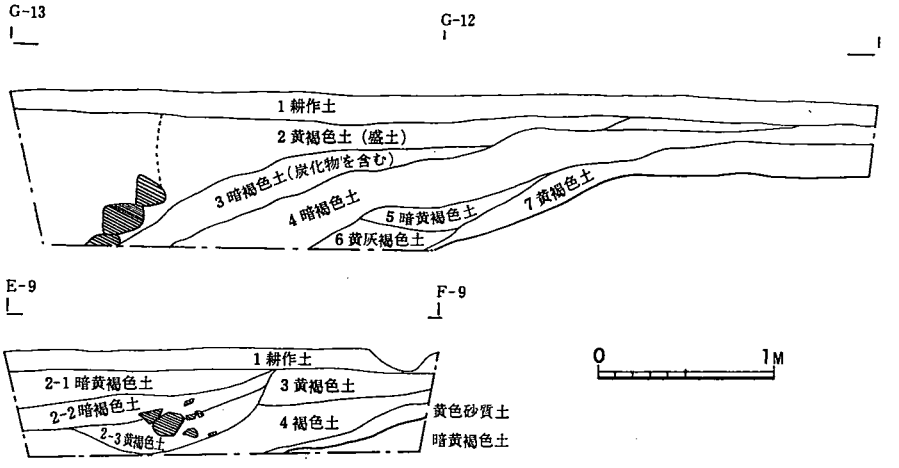
遺物は４、11ｐから出土している。

出土遺物（第10図）

１は近世陶器で11ｐ出土。色調は外面が茶褐色の薄い釉薬がかかり、内面は黒褐色、断面は灰白色を呈する。胎土は精選され、砂粒を含まない。口唇部は平坦で、両端が尖りレンズ状を示す。胴部の張りはさほど強くなく、筒状の長胴になるものと考えられる。２は７ｐ出土の瓦質土器である。二個体に割れているが同一個体と考えられる。色調は灰白～黒灰色を示し、胎土も良好である。焼成は良いが全体に軟質である。胴部に凸帯をめぐらし、その上方に菊花文のスタンプを刻む。二個の菊花文は大きさが異る。平底の底部近くにも一条の凸帯をめぐらせている。（松村）



第10図　ピット群出土土器実測図

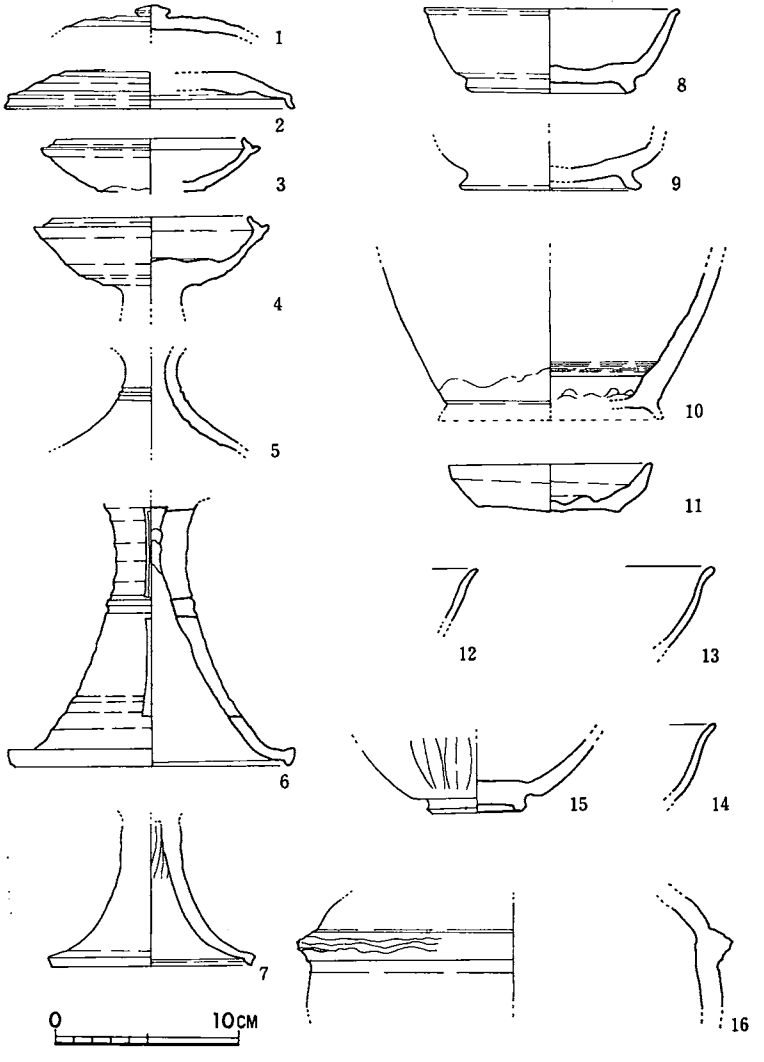


第11図　調査区土層断面図

4. 土器包含層（第11図）

Ｆ９－Ｇにおいて検出された。土層はⅠ層が耕作土、Ⅱ層が包含層となる。包含層は三層に細分される。Ⅱ－２層からⅡ－３層にかけて拳大ないし人頭大の花崗岩、安山岩を多く混在している。図ではⅡ－３層が大きく窪んでいるが、部分によっては平坦、あるいは自然地形にそって北西へ傾斜している。出土遺物は古墳時代の須恵器が主体で、一部中近世の陶磁器を含む。以下、各出土遺物について述べる。

出土土器（第12図）



第12図　包含層出土土器実測図

坏蓋（1～2）　1は天井部だけの破片である。扁平な凝宝珠形のつまみを有する。天井部全体にヘラ削りが施される。内面横ナデ。2は天井部と体部の境界に明瞭な段を有する。天井部の中心近くはヘラ削りを施し、他の部分は横ナデ。

坏（3）　底部を欠失する小型品である。立ち上がりは低く内傾し端部は丸くおさまる。受部は短く外に開き丸くなる。底部はヘラ切り離し後の成形が不十分で、縁に粘土がはみだした状態である。

高坏（4～7）　坏部から脚の一部が残存する。立ち上りは0.6cmを測る低いもので、内傾する。底部との境界は不明瞭で丸くなる。内外面とも横ナデ。6はほぼ中央部に二条の凹線をめぐらし、それを界に上下二段の透孔を有する。脚端近くで稜をもち端部へ向って内傾する。

高台坏（8、9）　8は復原口径14.0cm、高さ4.6cmを測る。底部と体部の堺はわずかに稜線を残し、体部、口縁部は外傾し立ち上る。口唇部は外反し端部は丸くおさまる。高台は外側に短く張る。9は底部の破片。高台は細く外側へ開き端部は丸くおさまる。

壷（10）　胴部～底部の破片である。細い高台が外へ開く。底部は薄い。内面には底部と胴部の境界に指頭跡が残り、その上にはカキ目を施す。胎土には石英、長石粒を多く含む。焼成良く、色調青灰色。

皿（11）　底部に糸切り痕をもつ。底部から外反しながら開く体部の中央から上に屈曲部をもち、さらに強く立ち上り、端部は尖る。体部内面も中央部で屈曲し、凹凸の著しい底部となる。

青・白磁（12～15）　12は口秀白磁である。体部は外へ開きながら立ち上り、口縁部で強く外反し、口縁端部は角をもつ。13～15は青磁。13は胎土の色調は青灰色、釉は薄い草色を呈する。口縁部は丸くおさまる。14は外側にしのぎ蓮弁をもつ体～底部の破片である。高台はほぼ垂直に伸び、畳付部は両端からヘラで削られ尖る。胎土は精選された灰白色で、釉は深草色を呈する。15は内弯しながら開く胴部が口縁下で強く外反する青磁の破片である。口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。胎土は灰白色を呈し、釉色は淡い水色で、全体に細いひびわれ貫入が入る。

土鍋（16）　胴部中央にツバをめぐらし、それを境界に下半は煤が厚く付着する。ツバの部分は稜部が破砕し、上半部は内傾する。内外面とも丁寧な横ナデを施す。胎土には小石・砂粒を多く含む。色調は黒褐～褐色を呈する。　（松村）

第3章　周辺の調査

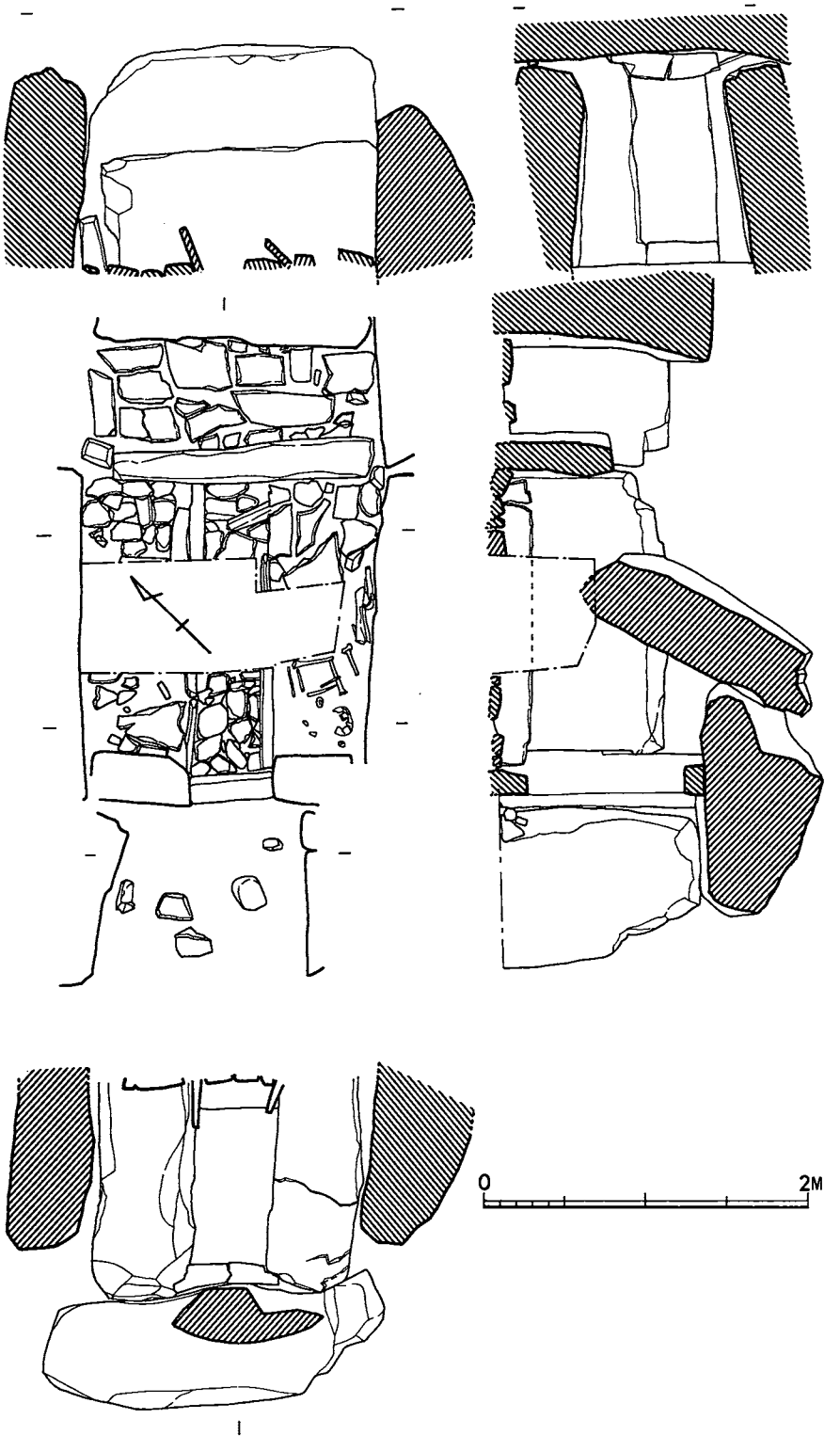
1．清水1号古墳

九州縦貫自動車道路の両側に隣接してある。墳丘は密柑園造成により削平されて平坦になり、現在畑地に石室の石組みだけが残存しており、保存状態は比較的悪い。石室は土石で充満し、天井石の一枚が落ち込んでいた。このような状態で、すぐにでも石室が崩壊するかもしれなかったので、とりあえず石室内の清掃と実測を実施した。以下その概要を述べたい。

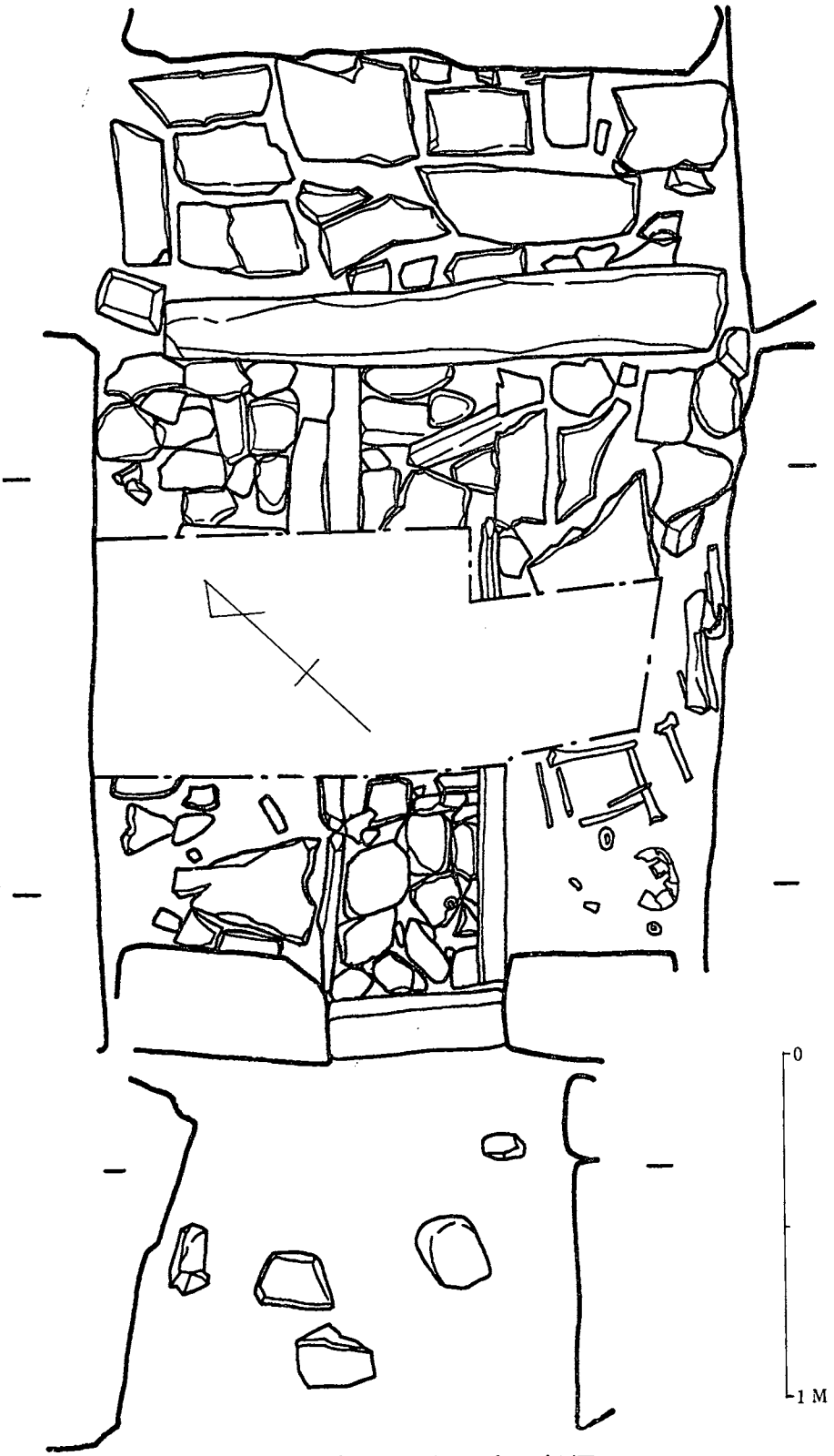
古墳の現状　石室は「鬼ノ岩屋式」と通称されるもので単室、両袖の横穴式石室で、安山岩石英岩、および阿蘇凝灰岩を用材としている。天井石は二枚だけが残有しているのみで他は失われている。それも羨道部の一石だけが本来の姿を保ち、一石は石室に落ち込む。さらに左側壁の奥も取り除かれていた。

石室の構造（第13、14図）　奥壁、側壁および袖石は40～80cmの厚い板状の長方形の石材を用いる。側壁の構築は、大きな板石を単に据えるだけで、その間に細工は施さない。石室は長方形を呈し、大きさは長さ264cm、最大幅190cmを測り、内部を石障により「コ」の字形に区分している。奥石障は砂岩を用い主軸と直交し、奥壁から50～70cmの位置にある。厚さ17～24cm、幅162cm、高さ63cmの板状石と幅15cm、高さ55cmの小型の方柱状の石を二枚組み合わせている。主軸と平行になる左右の石障は緑色片岩の板状石を使用している。中央部が未調査で不明であるが、二枚一組で構築されているものと考えられる。約120cm前後の長いものと、約45cmの短いものを左右逆に用いている。右石障は側壁から60cmの位置にある。奥石障に近い石障は二枚に割れ、内側に大きく傾いている。長い石障より15cm外側にあり、お互いに離れている。長い石障はほぼ垂直に立っており高さ26cmを測る。端部は袖石と接する。左右障は側壁から56～62cmの位置にあり、短い方が袖石に接する。二枚の石はほぼ一直線になり、相互の石がほぼ接する。奥に近い長い方がわずかに外傾し、羨道に近い短い方は内傾する。床石より地中深く埋っており、おそらく床石よりも先に石障が築かれたものと考えられる。床面には板状で大小の緑色片岩を一面に敷きつめ、ほぼ平坦であるが、奥の屍床部だけは他の部分より5～10cm高くなる。右袖石はわずかに内傾し、表面の剝離が著しい。上端部は角を打ち欠き、眉石の打ち欠かれた面との接合を良好にしている。左袖石は仕切石と接する部分をほぼ直角に調整し、L字形にしている。上端部は右と同様に打ち欠いて調整をしている。眉石は中央部で折れ、弓状を呈し、両端の下部を加工し、L字状にして袖石との組み合わせを円滑にしている。羨道は各々一枚石であり、右は直線、左は外側に開く。

遺物の出土状況　石室が開口していたので内部には新しい遺物も検出されたが、床面は良好な状態を示し、右屍床部からは人骨がかなり多く出土した。頭骨が右隅から一個体、その北側



第13図　清水１号古墳石室実測図

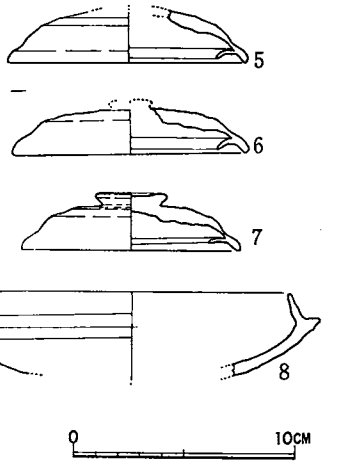


第14図　清水１号古墳石室プラン実測図

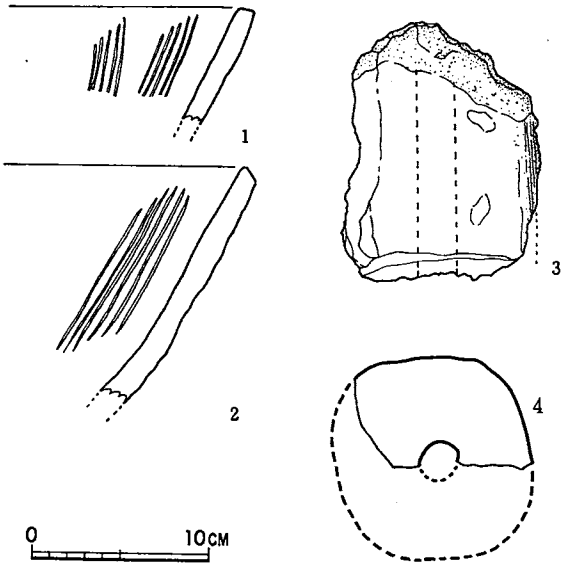
に上・下肢骨が折り重なって検出され、さらに側壁のほぼ中央に接して下顎骨、その下に肢骨が重なって出土している。これらは床面より約5～10cm高い位置で出土し、本来の位置を保ってはいない。石室の覆土および各屍床部からも人骨の小破片が散見できる。金環も頭骨の横（2個）、支切石部、左屍床部奥、奥屍床部の右隅から床面に接して各々1個（その他1計6個）出土している。鉄器は右屍床部の人骨に混って轡、鉄鏃、留金具、奥石障から刀子、刀があり、奥屍床部からは須恵器が一点出土している。

出土遺物（第15、16図）

土器（第15図）　出土土器のほとんどは覆土および追葬時のもので構築時当初のものは見られない。1、2は瓦質の摺鉢である。内面に5～6条の沈線を中心に向かって刻む。焼土は良好で胎土に小石粒を含む。5～7は須恵器の坏蓋で、身受けを有する一群である。かえりは薄く、内側へ大きく弯曲し、口縁部より上になる。天井部はヘラ削りを施し、以外は横ナデ調整をしている。6は胎土に5㎜前後の小石を多く含む。7は中央部が凹む扁平なつまみを有する。8は立ち上りが1.2cmあり内傾する。体部はヘラ削り後横ナデ、他の部分と内面にナデを施す。口径14.3cmを測る。6は床面、他は覆土から出土。

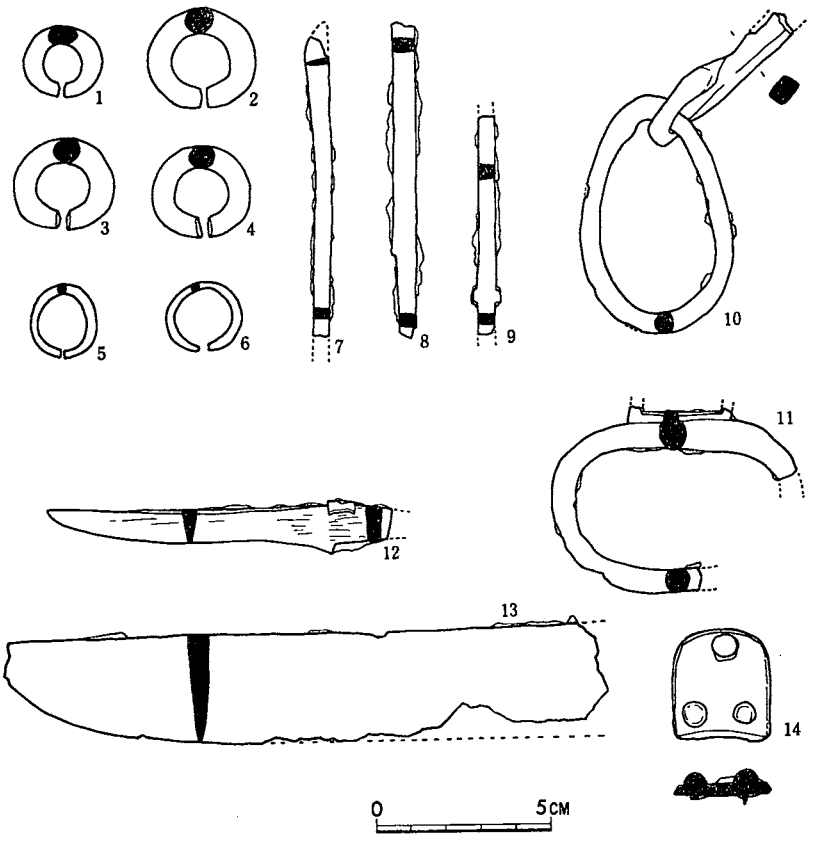


石製品（第15図3、4）　阿蘇凝灰岩製のふいごの羽口である。約$\frac{1}{8}$の破片で、先端と右側が本来の姿を保つ。径13cmほどの円筒形を呈するものであろう。先端部は斜めになり、強い火熱を受け、ガラス化している。内側に2.1cmの円孔を穿つ。器面は風化が著しく、成形は不明である。覆土からの出土。



第15図　清水1号古墳出土遺物実測図

耳環（第16図1～6）　1（右



第16図　清水１号古墳出土遺物実測図

屍床)、 4（玄室墓道）は銅地金張で断面形は円ないし楕円、3は銅地銀張である。2は錆化が著しいが3と同様であろう。5・6は細形の耳環である。5は銀地、6は金銅地でいずれも金張りと思われる。

鉄鏃（7～9）　7は尖根鏃で身の断面がクサビ形を呈する片刃箭式である。篦被部の断面は長方形を呈する。 9は篦被部および茎部を残した破片で棘状突起をもつ。9は右石障部、7、8は奥石障部から出土。

轡（10・11）　10は変形した鉄環に棒状の引手金具がついたものである。引手金具は環状部と接する部分が狭くなる。11は一部欠失するが扁円形で断面円形の鉄環に長方形と推定される面繋止の金具が一体に造られたものである。右石障部出土。

刀子（12）　茎部の端部を欠失する。全長9.7cm、刀身7.9cm、棟厚0.4cm。背は稍反りを有し、刃先は尖る。全体に木質が付着する。茎と身の境は0.3cmの段をもち柄を固定する鉄環が回る。

鉄刀（13）　現存長17.1cmを測る身の破片である。先端を欠失する。棟厚は0.6cm、断面クサビ形を呈する。奥石障部出土。

飾金具（14）　鉄地金渡金の金具である。上端が内弯する扁平な長方形状の板に3カ所鋲を打つ。鋲の頭部は半球形で先端はするどく尖る。断面は右側が中央部に稜線をもち、他は下面が広がる台形様を呈す。幅2.8cm、長さ3.2cm、厚さ0.3cmを測る。全体に錆化がはげしい。

（松村）

清水1号古墳出土の人骨について

内藤　芳篤、分部　哲秋*

はじめに

清水古墳の1号墳から人骨が出土したが、これらは別項に記載されているように、考古学的所見より古墳時代後期に属するものである。人骨は主として右石障部から発掘されたが、左石障あるいは奥石障部からも骨格の一部が見いだされた。全般に石室内はかなりひどく撹乱され、人骨は散乱し、埋葬時の葬位は不明である。また骨の保存状態も良くないので、その形質を知ることは難しいが、著者らはできる丈個体別の分類につとめ、性別および年令の推定を試みたので、その結果を報告したい。

資料および所見

(1) 右石障人骨

1. 頭蓋骨

頭蓋冠　前頭骨、両側頭頂骨、後頭骨および両側側頭骨の錐体がそれぞれ遊離して部分的に残っていた。

接合復原することができないので、頭型を知ることは不可能であるが、観察したところでは、骨壁はやや厚く、残存している縫合部（冠状縫合、矢状縫合の一部）には内板においても癒着は見られない。眉間から眉上弓にかけての隆起はなく、扁平であり、外後頭隆起の突出も認められない。また両側の錐体も比較的小さい。

下顎骨　下顎体および左側の下顎角から下顎枝の一部が残っていた。

下顎骨全体として余り大きくないが、長さに比して幅径が広いもののようである。下顎体の高さも低く、厚さも薄い。歯槽部の骨萎縮は全く見られない。オドガイ孔は両側共に第2小臼歯（P_2）の下で骨体中央に存在している。

* 長崎大学医学部解剖学第二教室。

計測できた項目について数値を挙げると共に古墳時代人（城、1938）および中部九州(肥後)人（松元、1956）女性の計測値を対比してみると、表1に示すとおりである。

清水古墳人の計測値は古墳人女性のそれに近似したものであるが、上記したように下顎体の高さは低い。また下顎角幅は古墳人、現代人両群の女性よりも多少大きい。

表1 下顎骨の計測値（mm）

♀	清水古墳人	古墳人 (n) M	現代中部九州人 (n) M
69 オトガイ高	30	(9) 31. 4	(15) 34. 90
69(2) 下顎体高	24	(10) 30. 6	(18) 31. 39
69(3) 下顎体厚	12	(13) 12. 2	
66 下顎角幅	100 (推定)	(3) 94. 7	(24) 96. 25

歯　下顎歯7本が残っていたが、これらを歯式で示すと次のとおりである。

$\overline{M_3M_2M_1P_2P_1C}$ // | //C○○○○○ { ○歯槽閉存 / 不　明

歯は比較的小さく、咬耗度は Broca の1度～2度、右側第3大臼歯（M_3）は完全に萌出してはいるが、ほとんど磨耗の痕は見られない。なお風習的抜歯を思わせる所見は認められない。

以上のことがらから頭蓋骨については、女性・壮年骨と考えられる。

2. 上腕骨

右側の骨体下部（58m）

左側の骨体上部（178mm）

両側の残存していた骨体は骨質および大きさから同一個体と推定されるものである。観察したところでは、三角筋粗面などは不明であるが、やや扁平の傾向が認められる。

中央位を推定して計測した値を古墳人および現代西北九州人（八木、1970）の男性値と対比してみると、表2に示すとおりである。

清水古墳人は古墳人男性に近似しているが、扁平性が多少強い。また現代人男性よりは小さ

表2 上腕骨の計測値（mm）

♂	清水古墳人	古墳人 (n) M	現代西北九州人 (n) M
5 中央最大径	(ℓ) 23	(13) 22. 4	(73) 23. 08
6 中央最小径	(ℓ) 17	(13) 17. 4	(73) 17. 60
6/5 断面示数	(ℓ) 73. 91	(13) 77. 6	(73) 76. 27
7 最小周	(r) 60 (ℓ) 61	(9) 59. 3 (14) 60. 2	(72) 65. 53 (73) 64. 66
7(a) 中央周	(ℓ) 67		(73) 67. 75

く、扁平性も強い。

計測値から見て上腕骨は男性例と考えてよいであろう。年令は不明である。

3. 大腿骨

大腿骨の骨体が9個残っていたが、このうちの2個は同一骨体の一部分ずつであり、結局8個と考えてよい。これらを骨質および大きさより個体別に分けると次のとおりであり、4個体分の大腿骨であると推定される。

①右側の骨体中央部（248㎜）

左側の骨体中央部（244㎜）

②右側の骨体上半部（218㎜）

左側骨の上半部（66㎜）および下半部（114㎜）の一部ずつ

③右側の骨体中央部（235㎜）

左側の骨体中央部（215㎜）

④右側の骨体上部（181㎜）

左側の骨体上部（243㎜）

①残存している部分の形状がやや歪んでいるが、両側共に骨体は太く頑丈である。粗線の発達は良好であるが、柱状形成は見られない。

②骨体の大きさは中等度、粗線の発達は良好であるが、柱状形成は認められない。

③骨体の大きさは中等度、柱状形成の像は明確でないが粗線の発達は良好である。

④骨体の大きさは明かに細く、右側の小転子も小さく、上骨体部にやや扁平性が見られるようである。左側では表面の剝離がひどいが、全体として彎曲しているもののようである。両側共に粗線の発連も弱く、勿論柱状形成の像も見られない。

以上4個体の大腿骨骨体は、表3および表4に示すとおり計測値の上からも①②③は男性、④は女性と推定され、これらと古墳人および現代西北九州人（栄田、1967）の計測値を対比してみた。

清水古墳人の男性大腿骨は、①はかなり大きいが、②および③は古墳人、現代人と大きい差は見られない。中央の断面では②の示数値が多少大きく、また上骨体の断面でも示数値が小さく、扁平の傾向を表わしている。

女性大腿骨では、古墳人および現代人に比較して大きさはほとんど同じであるが、上骨体部において断面示数が小さく、扁平の傾向が認められる。

以上のとおり、大腿骨の骨体は4個体分の両側が残っていたが、計測値の上からも3個体は男性、他の1個体は女性と考えて差し支えないであろう。年令は不明。また形質は古墳人、現代人に比して大きさでは大差ないが、上骨体部の扁平性がやや強いものと考えられる。

表3 大 腿 骨 の 計 測 値

♂	清水古墳人 ①	清水古墳人 ②	清水古墳人 ③	古墳人 (n)	古墳人 M	現代西北九州人 (n)	現代西北九州人 M
6 中央矢状径	r 32 ℓ 32	28	26 26	(28) (22)	27.1 27.2	(52) (52)	27.79 27.75
7 中央横径	r 30 ℓ 29	24	25 26	(29) (22)	26.6 26.8	(52) (52)	25.81 26.27
6/7 中央断面示数	r 106.67 ℓ 110.34	116.67	104.00 100.00	(27) (22)	102.3 101.8	(52) (52)	108.04 106.04
8 中央周	r 97 ℓ 95	85	83 83	(27) (21)	85.4 85.9	(52) (52)	83.46 84.06
9 上骨体横径	r ℓ	32 32		(25) (20)	28.9 29.0	(52) (52)	28.21 28.94
10 上骨体矢状径	r ℓ	25 24		(22) (17)	28.5 28.4	(52) (52)	27.02 26.42
10/9 上骨体断面示数	r ℓ	78.13 75.00		(22) (17)	98.6 98.1	(52) (52)	96.54 91.96

表4 大 腿 骨 の 計 測 値 (㎜)

♀	清水古墳人 ④	古墳人 (n)	古墳人 M	現代西北九州人 (n)	現代西北九州人 M
6 中央矢状径	r 24 ℓ 24	(19) (23)	24.2 24.5	(30) (29)	24.23 24.79
7 中央横径	r 24 ℓ 26	(18) (24)	23.7 24.7	(30) (29)	22.93 23.83
6/7 中央断面示数	r 100.00 ℓ 92.31	(18) (23)	101.9 100.0	(30) (29)	106.07 104.43
8 中央周	r 74 ℓ 79	(17) (23)	77.5 78.1	(30) (29)	73.13 75.28
9 上骨体横径	r 29	(11)	26.9	(30)	24.67
10 上骨体矢状径	r 23	(10)	26.2	(30)	24.67
10/9 上骨体断面示数	r 79.31	(8)	98.8	(30)	100.74

4. 脛 骨

脛骨では骨体4個が残っていた。

①右側の骨体上部（172㎜）

②右側の骨体下部（123㎜）

③左側の骨体上部（122㎜）

④左側の骨体下部（126㎜）

①は比較的大きく、扁平であるが、後面の稜形成は明確でない。男性例と推定されるものである。

②は明かに小さく、扁平性も弱く、女性と推定される。

③は保存不良で性別等の推定はできない。

④も③と別個体であることは明かであるが、性別等の推定は難しく、①あるいは②と同一個体か否かも不明である。

また①②③④共に計測には不適である。

5. 腓 骨

腓骨の骨体2個（96㎜、67㎜）が残っており、同一骨体のものと思われる。かなり細く、溝状形成も見られない。女性を思わせるものがあるが、詳細は不明である。年令は勿論解らない。

6. その他

四肢骨の骨片多数が残っているが、何れも保存状態は悪い。右側橈骨の骨体2個は明かに細いが、その他の骨片は詳細不明である。

(2) 左石障人骨

1. 頭蓋骨

頭蓋骨のうちでは右側の側頭骨錐体が残っていた。保存状態は不良である。

錐体は比較的大きい。乳様突起の一部および外耳口附近が残っていたが、形状は不明である。

2. 脛 骨

左側の骨体上部（250㎜）が残っていた。骨体は大きく、骨間縁は鋭い。扁平の傾向が見られるが、後面の稜形成は明確でない。

推定中央位における計測値を古墳人および現代西北九州人（久松、1969）の男性計測値と対比してみると表5に示すとおりである。

清水古墳人の脛骨は古墳人および現代人に比して、中央最大径が僅かに大きく、逆に横径が小さいので、従って断面示数は小さい値を示し、扁平性が強いことを表わしている。

表5 脛 骨 の 計 測 値

♂	清水古墳人	古墳人 (n)	古墳人 M	現代西北九州人 (n)	現代西北九州人 M
8 中央最大径	ℓ 30	(17)	28.9	(72)	28.55
9 中央横径	ℓ 20	(16)	21.4	(72)	21.54
9/8 断面示数	ℓ 66.67	(16)	74.3	(72)	75.62

以上のとおり左石障部から見いだされた人骨はきわめて少く詳細不明であるが、脛骨の形状からは男性例と推定される。年令は不明である。

(3) 奥石障人骨

四肢骨の骨片が出土しているが、分類は難しく、詳細は不明である。

(4) その他の人骨（撹乱部）

石室内の撹乱された部分からかなり多くの四肢骨片が出土している。この中には明かに同一個体のものと推定される両側大腿骨の骨体部なども見られるが、そのほとんどは詳細不明である。またこれらの人骨が、上記した左右石障あるいは奥石障人骨と同一個体であるか否かも不明である。

要　　約

清水古墳の１号墳から出土した人骨について個体数、性別、年令および形質に関して以上述べたことがらを要約すると次のとおりである。

(1) 個体数、性別、年令

1. 右石障部

大腿骨：男性３体、女性１体

脛　骨：男性１体、女性１体、不明２体

頭蓋骨：女性１体

上腕骨：男性１体

腓　骨：女性１体

右石障部から出土した人骨のうち大腿骨を基準に考えると、男性３体、女性１体、合計４体が確認されているが、脛骨の４体、頭蓋骨の１体、上腕骨の１体および腓骨の１体が大腿骨と同一個体か否かは確定できない。

年令については頭蓋骨（頭蓋冠、下顎骨）が壮年と推定される他は不明である。

2. 左石障部

脛　骨：男性１体

頭蓋骨：性別不明。

年令は脛骨、頭蓋骨共に不明である。

3. 奥石障部

四肢骨片：体数、性別、年令不明。

4. その他（撹乱部）

大腿骨：性別不明１体、年令不明。

四肢骨片：体数、性別、年令不明。

以上、清水古墳１号墳の中から出土した人骨で、個体別に確認されたものとしては、右石障部から男性３体、女性１体、左石障部から男性１体、またこれらに属さないもので撹乱部から出土した性別不明の１体である。奥石障部からも詳細不明の人骨が出土しており、石室内に埋葬されていた体数は当然これより多いものである。

(2) 形　質

保存状態が悪く、清水古墳人の形質を詳細に知ることはできないが、城（1938）の主として西日本の各地から集められた古墳人骨および松元（1956)、八木（1970)、栄田（1967)、久松（1969）等の現代人骨の成績と比較してみると、大きさにおいては明かな差を認め得ないが、下肢骨の扁平性に関しては、大腿骨上骨体部および脛骨において現代人よりは勿論、城の古墳人よりも強い傾向を表わしている。

（擱筆するに当り、本研究の機会を与えていただいた熊本県教育庁文化課当局に感謝の意を表します。）

文　献

1) 城　一郎、1938: 古墳時代日本人人骨の人類学的研究。人類学輯報、第1輯：1-333。
2) 松元実義、1956：現代中部九州（肥後）人頭骨の人類学的研究。熊本医誌、30(8)1-46。
3) 八木　治、1970：西北九州人上腕骨の人類学的研究。長崎医誌、45(1)：22-33。
4) 栄田和行、1967：西北九州人大腿骨の人類学的研究。長崎医誌、42(4)：313-324。
5) 久松　巌、1969：西北九州人脛骨の人類学的研究。長崎医誌、44 (11・12)：718-728。

3. 門前古墳の調査（第17図）

明治17年、村上氏宅の裏手から石棺が出土しその中から鏡、管玉等が出土し、当時県から国へ提出され、現在宮内庁書陵部に保管されている。この石棺の地点から北東へ約12～3mの位置に円墳が所在し、その両裾に円文のある石棺材が発見され、現在岡谷川公民館の前に保存されている。清水古墳との関連から墳丘の実測・石棺材の拓影を実施したので、その報告を行いたい。なお調査は昭和54年2月25日～3月2日に行った。

前方後円墳（門前一号墳）

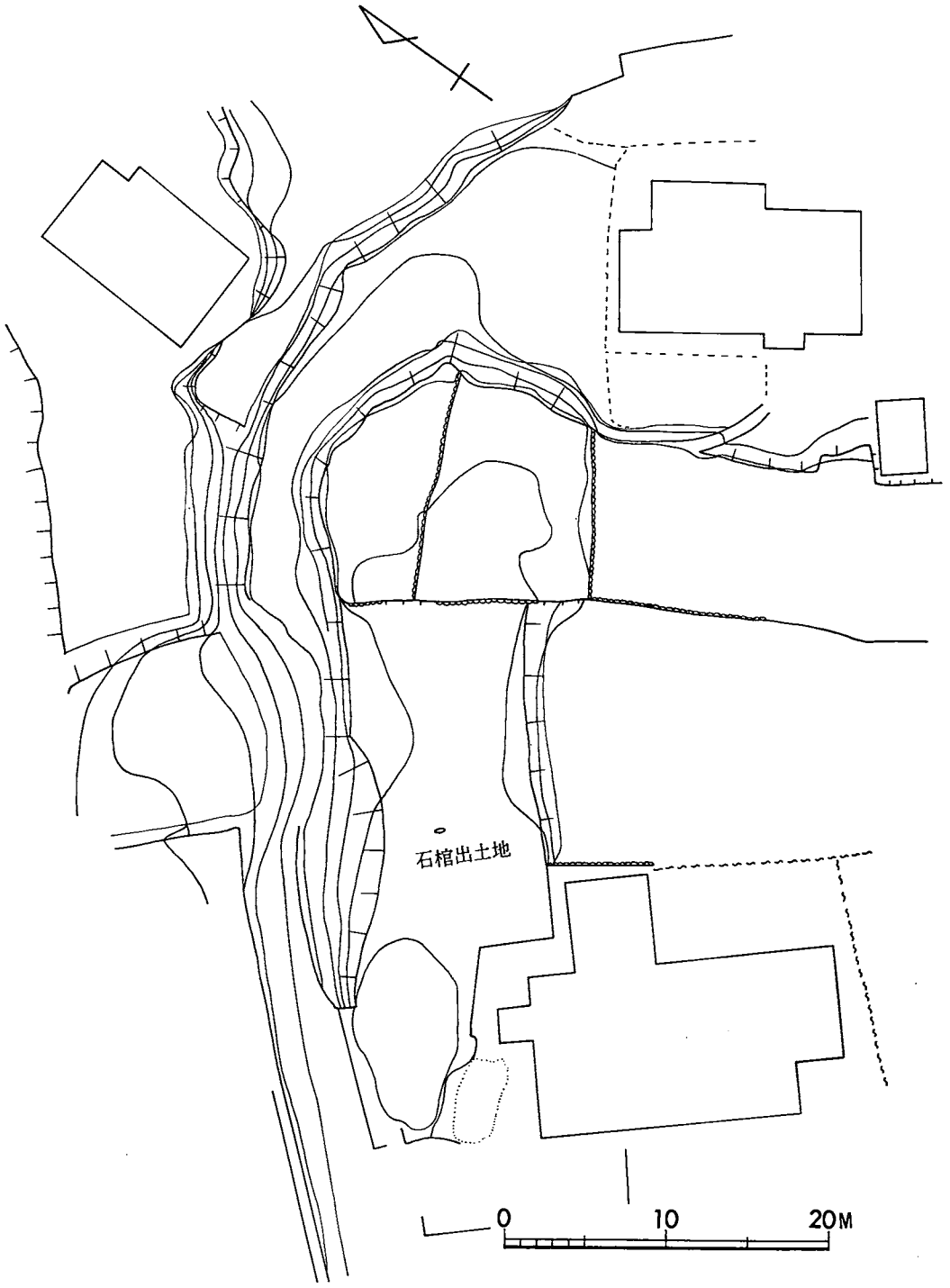
周囲は蜜柑園として造成され、旧地形が大きく変貌し、さらに発掘調査を実施したわけではないので明確な形状、規模は不明であるが、現状の地形及び測量図では円墳から石棺にかけてわずかではあるが他の部分より高くなっており前方後円墳と考える方が妥当であると思われる。これまで円墳とされていたが、ここでは一応前方後円墳として取扱いたい。先に述べた清水古墳の西約200mの位置にあり、集落の中にある。標高約10～11mを測り、山際の東から西へ階段状地形の先端に占地する。主軸は南西から北東方向をとる。後円部は上面部を平坦にしており、西から北東部にかけては旧地形を良く保ち、比高差約2mを測る。北東から南にかけては段差がゆるやかになり、その差は0.57mを測る。平坦面の縁を標高11.5mのコンターが走り、裾は10.0mのコンターが囲続する。後円径約20m、高さ2.3mを測る。

後円部と前方部の境界は段差をもち石垣が築かれている。前方部右縁は本来の姿を大きく変え、主軸と平行に走る段で区別される。中央部がわずかに高まり、西側は自然の傾斜面が大きく展開し、墳丘裾との境界は不明瞭である。南西の端は現在庭木を植え、土盛をしており、旧状を大きく損う。現状で全長25m、前方部幅13m、長さ18m、高さ1.2m、後円部径20m、高さ2.3mの規模である。

周囲の地形を観察すると、北東から南西へ段丘状に低くなっているが、前方部の部分だけが、他の部分より一段高くなっているのは不自然である。またこの前方部とする地点からは鏡3点が石棺から単独に出土したことにも無理があり、円墳部と石棺部を同一の古墳と考えた方がより自然であろう。

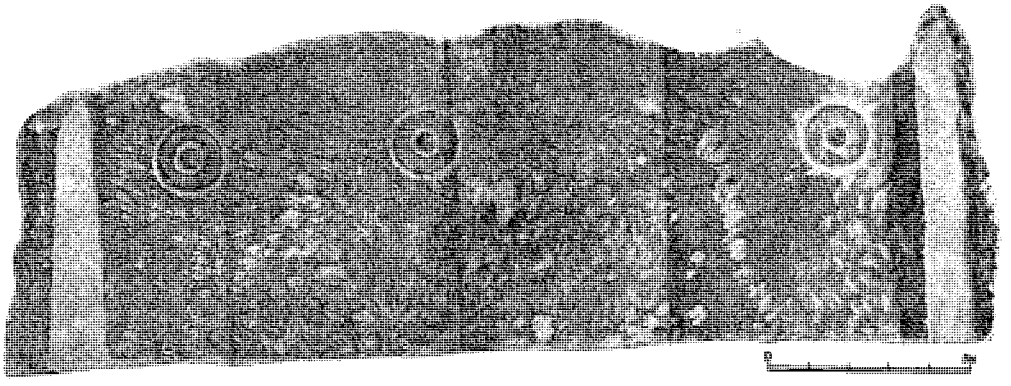
石棺材（門前二号墳・第18図）

現在側壁の一枚だけが岡谷川公民館の前に移転保存されている。円文を有する装飾古墳の石材である。門前一号墳の後円部西裾から数枚出土したと伝えられ、現在その地点には自然石を立て祀ってある。石棺材としたがあるいは石障の可能性もある。表面の一部が剝離し全体に凹凸がある。石材は砂岩で厚さ約7.4cm、幅247.3cm、高さ91.4cmを測り、上端が少し山形になり、両側端には棺材を合せる10～11cmの浅い抉りが認められる。壁面の中央より上に陰刻の同心円文三個がみられ、円文は二重で内側は径約8.0cm、幅1.0～1.5cm、外側は経約19cm、幅1.0～1.5cmの円文であり、横一列に三個が並び、その間隔は各々59.0cm、92.1cmを測る。



第17図　門前一号墳地形実測図

装飾古墳の中で、このような円文だけを文様とする古墳は八代市の田川内、五反田、オワリ宮古墳等の八代海沿岸に 展開する古墳の特徴である。 田川内古墳はその南限で 石屋形を有する。コの字形の石障をもちその石障に円文のレリーフを配する。石室の形態、出土遺物から6世紀前半の古墳と考えられるオワリ宮古墳はコの字形石障で同様の円文を描く。出土遺物は知られていないが、板石小口積等の石室形態から6世紀の中頃と考えられる。以上のことから、門前二号墳も6世紀代の所産として把握されよう。 （松村）



第18図　門前二号墳石棺拓影図

4. 門前古墳発見の経緯

清水古墳の西約200ｍに存在する門前一号墳（前方後円墳）については松村報文に述べられているが、この古墳の発掘・遺物発見に関する文書について、熊本県庁の「古墳発顕記録」から引用して紹介したい。

明治政府は、明治４年（1871）「古器旧物保存方」を布告し古器物保護の対策を講じ、さらに同７年太政官達「古墳発見ノ節届出方」を出して、古墳に限定した遺跡の発掘規制と不時発見の届出制、同13年（1880）宮内省布達「人民私有地内古墳発見ノ節届出方」を出して、不時発見の届出義務を定めている。

この様な情勢のなかで、八代郡岡谷村（現、八代市岡町大字岡谷川字門前）楠田直平氏宅において、17年（1884）２月27日石棺が発掘された。同年８月６日付けで、次のように取調べるよう命じられている。

十七年八月六日

古墳発掘之儀ニ付八代郡役所へ御達案左ニ相伺候

第　番外号

其所轄八代郡岡中村民有地ニ於テ古墳ヲ発キ石槨中ニ相納メ有之候鏡剱曲玉等取出シ候哉ニ相聞ヘ右ハ別格取調之筋有之候ニ付該石槨内物品等散逸ノ恐モ有之候ハバ其地警察署ヘ通牒厳重ノ取締相付ケ尚十三年當广甲第二百五号及十六年諭第四四号達ノ旨ニ據リ至急取調可差出此旨相達候事

年月日　　長官

これに対して八代葦北郡長から８月21日付けで、発見者楠田直平の届出及び預り証を付して次のとおり報告があった。

発掘セシ古墳取締之義ニ付答達

所轄八代郡岡中村民有地ニ於テ古墳ヲ発キ石槨中ニ相納メ有之候鏡剣曲玉等取出候儀ニ付取締リ本月六日付當外ヲ以御達之趣敬承郡書記出張実地為取調候處右ハ所轄八代郡岡谷川村民有地内ニ於テ発掘候趣別紙発掘人届書之通ニテ石槨及び刀剣ハ元ノ通リ取埋メ其上ヲ長七尺横三尺高三尺小石ヲ以厳重築立有之容易ニ再掘ノ恐無之旨復命致シ候ニ付既ニ取出居候鏡三面管玉三本預リ澄相添此段及御答達候也

八代葦北郡長財津志満記代理

明治十七年八月廿一日

八代葦北郡書院　松田　明定　回

熊本県令富岡敬明殿

宅地内ニテ石櫃掘出物品御届

一曲玉三本　但管

一鏡・弐ツ　差渡三寸八歩

一同・壱ツ　同　三寸四歩

但力子ノ様聊違イ居不申候其儘取揚預居申候

一剣　四本

一刀　弐本

是ハ腐折レ居中候ニ付元ノ侭埋置候

一曲玉弐拾本位

是ハ見物人共拾取持帰リ有之ト相考申候

一石櫃長壱間巾弐尺五寸位

但櫃中ハ四方蓋共朱附居申候

一上ハ臼　壱ツ差渡五寸紋付

但是ハ石櫃ヨリ二間程間ヲ経掘出シ引茶臼之様ニ相見ヘ申候ニ付其儘差置候

右者本年二月廿七日私有宅地ノ内裏手芋作致度唐鍬ヲ以地深ク打方致候處豈図哉石槨ニ掘當リ候ニ付蓋ヲ発見繕候処前記之物品石槨ノ中ニ朱詰之形チニテ入居申候尤口碑流傳等モ可有之哉見調候得共為付記写モ相見不申則所左地名幷近傍字等別紙絵図ヲ製シ相副此段御届上申候也

八代郡岡谷川村千百五拾四番地

明治十七年八月九日　楠田　直平　印

右戸長

松島　一　印

熊本県令富岡　敬明殿

預り証

一曲玉　三本

一鏡　三面

右者本年三月古墳発見ノ際石槨内ニ有之候物品ノ内右ノ品々預リ置申候也

八代郡岡谷川村千弐百五十四番地

楠田　直平　印

明治十七年八月九日

この報告にもとずいて、県職員が現地に出張して調査する必要が生じ、10月15日に出張伺いがあった。

十七年十月十五日

八代郡岡中村ニ於テ発顕シタル古墳之儀曲玉古墳等有之且今般磯田正敬ヨリ内務卿ニ呈シタル書面及征西将軍壊良親王御由緒之地ナルヲ以テ考レバ貴顕之古墳ト確認就而ハ豫テ宮内省御達モ有之御上申相成ベキ義ニ付実査トシテ地部ノ両名出張被命度相伺候也

八等属　内藤　正由

測量係雇　松山　卧猪

そのときの10月22日現地調査の復命では、遺物の種類、内容などが発見者の口述をもとに詳細に述べられるとともに、遺物を持ち去った件について厳重に対処していることが窮われる。

十七年十一月一日

復命書

去ル廿二日命ヲ奉シテ八代郡岡谷川村楠田直平宅地内ニ於テ本年二月廿七日発掘セシ石棺幷片野川村古代ノ墳墓及高植弥次両村無格神社日置村専教寺柿迫村釈迦院実査仕候要領左ニ列挙供高覧候

岡谷川村石棺ニ係ル件

発掘セシ石棺ノ儀ハ去ル八月八日付ノ御達ニ依リ所轄郡役所ヨリ書記ヲ派遣シ取片付候由ニテ棺上ニハ小石ヲ以テ覆ヒ有之候偖棺中ヨリ取出シタル侭トテ戸主直平預リ居候物品左ノ如シ

甲一鏡三面質銅表面黄金色ヲ帯ブ且緑青錆所々ニ黙着ス思フニ棺中ヨリ取出シタル後多少磨磋翫弄セシモノニテ表裏共ニ其痕跡アリ故ニ埋伏中ノ模様ハ詳ニシ難シ

乙一曲玉壱本透明水昌質ニシテ青色ヲ帯ブ

丙一直玉十六本石透明蠟石質ニシテ濃青色ヲ帯ブ

丁一朱壱色赤色較々減耗セリ

戊一小石五個鑛属ニ類シテ光澤アリ

棺中ヨリ取出シタル後故ノ如ク埋置シタル物品左ノ如ク埋置シタル物品左ノ如シ但該棺再発掘スルニ非サレバ模様格好素ヨリ知ルニ由ナシ只戸主直平ノ口供ヲ記取セシノミ

一、尖辨形の剣三本

一、刀弐本

右発掘仝時石棺ヲ距ル弐間計ノ所ヨリ掘出セシ物品左ノ如シ

一、茶臼断片壱個

一、煙管壱本

以上二品ハ石棺同時ノモノニアラザルベク認ム只録シテ参考ニ供スルノミ

尚甲乙丙丁戊ノ五品中発掘セシ際散逸セシ事モ有之候得共今般実査ノ段ニ臨ミ集纏候ニ付

及テ戸主直平ニ預ケ置候　偖該石棺発掘セシ次第ノ取調候得ハ去ル二月廿九日芋作ノ為メ尾背ノ餘地開拓候際不図石棺ニ掘リ當リ試ニ木桿ヲ以テ石蓋ヲ発キシニ中ニ朱砂アリ始テ亡者ヲ殯斂セシ所ナリト知リ周章直ニ同村光厳寺ニ赴キ回向相頼候處住職藤井範則忽チ其請ニ応ジ且適宇土郡網津村ヨリ説教ノ為メ罷越居候客僧ヲ伴ヒ直平方ニ赴キ見ルニ最早其節ハ従観堵ノ如ク何分棺前ニ近寄リ難ク依テ屋内ニ霊壇ヲ設ケ誦経候由藤井範則ノ申立　右ハ元来戸主直平ノ厚意ニ出テシヲ以テ別ニ咎ムベキ様モ無之候得共該両名ノ僧各朱及直玉若干本持去リ候趣夙ニ発覚致シ尚此外見物者ノ内或ハ持去リ候向モ有之乎今日ニ至リ捜索ニ由ナリ良シ仮令有之ニセヨ其何物タルヲ解セザル愚民ノ所為ニ候得バ深ク究治スル訳ニモ至リ申間敷只其侭不問ニ措キ難キハ該両僧ニテ一ハ一寺、住職相勤一ハ勧懲ヲ在トル身ニシテ斯ノ如キ所業相働キ候段実以言語道断ノ次第ニ有之尤物品ハ郡役所ヘ照会夫々返還為致候得共未ダ心術ノ程無覚束自然ハ尚黙取候哉モ難計候ニ付手続書徴上方来会郡書記及戸長ヘ相示シ置候

以上のような調査にもとずいて、12月3日付けで県令から宮内卿へ次のような上申が行われた。

明治十七年十二月三日決

宮内卿へ上申案

石棺発掘ノ儀ニ付上申

當県下八代郡岡谷川村字門前千弐百五拾四番地平民楠田直平ナル者本年二月廿七日宅地内正北隅荒蕪ノ地ヲ開拓候節不図石棺ニ掘リ當リ同人ニハ當当未其何物タルヲ辨セズ卒爾ニ木桿ヲ以テ棺蓋ヲ発キ見候得ハ朱詰ニテ乃チ埋斂地ナリト心付キ僧ニ請テ追福ヲ営マン為メ出テ同村光厳寺ニ罷越候内該雇夫等棺中ヲ摘（カ）キ鏡剣曲玉等取出シ居候ニ付剣類ハ故ノ如ク相収メ鏡曲玉等ハ其儘ニ預置候段届出候ニ付吏員ヲ派遣シ実査為致候處果シテ届出ノ通尤石棺ハ暴露ノ恐レ有之候ニ付発掘ノ後土石ヲ掩ヒ埋収為致置候依テ別紙実地検考書幷絵図面相添此段上申候也

年月日　　代理官

宮内卿當

別紙

実地検考書

一、棺中ニハ必ズ亡者ノ骨骼アルベシ其証ハ棺中ヨリ物品取出ノ際歯壱本出テタルヨシ尤初之ヲ発リニ當リ棺内ヲ捜盡セシ訳ニ無之只朱砂、上層ニ露出セシモノヲ摘挙セシ迄ニ過ギザレバ猶多少ノ物品及骨骼等砂中ニ相埋リ居可申歟

何人ヲ埋殮シ且ツ煙埋幾手ヲ経タルカ標識モナク又口碑ニ流傳セシコトモナケレバ徴知スルニ由ナシ乍去侑観察ヲ下ストキハ棺ノ製方等全ク石工ノ手ニ成リ候モノニテ近世ニ属スベキモノト想像被致候尚参考ノ為メ地主直平ノ家系ヲ尋ルニ祖先以来此所ニ住シ同村内ニアッ

テハ頗ル古家ノ由併シ是レゾト申ス記録モナク僅カニ光厳寺備付ノ過去帳アルマデニテ右に依リ取調候得ハ今ヲ去百三十六年即寛文三年以降相傳候儀ハ判明致シ又該石棺ニ南接シテ地盤壱尺許高ク且ツ礒确ナル所(面積三坪許)ニ墓標ト覚シキ天然石三四本有之文字多クハ磨滅シテ読ミ難シ但其内壱本ハ文字ヤヽ分明即チ中央ニ南無阿彌陀佛左右ニ文禄十丑六月十〇(不明)日明尚ト記シ有之地主ノ説ク所ニテハ則是レ祖先ノ墓地ナリト果シテ然ラバ世系殆弐百年上ニ遡ルヲ得ヘシ然レ共該石棺ニ由緒アルヤ否(ハヤ)未タ判明シ難シ一當八代郡中ニハ古代ノ構造ニ係ル石窟ノ類所々ニ有之就中該石棺所在ノ村ヨリ南方二里許ノ内殊ニ多シ今其一端ヲ挙クルニ岡谷川村及び岡中村ノ両村中ニテ現ニ弐拾五ケ所(中図)ヲ検出セリ其製大率大盤石ヲ縦横ニ構架セシモノニテ間ニハ雑草蔓延セシ丘墓アリヌハ脚石ハ全ク土中ニ堙没シテ僅ニ頂石面ヲ露スモノアリ口碑流傳ニ據ルニ或ハ神世ノ墳墓ト云ヒ或ハ太古穴居ノ跡ト云ヒ素ヨリ一定ノ説ナシ尤人家ニ離隔セルモノハ大低蘿苔纏綿窟中土砂充実セルヲ以テ実ニ鴻古ノ石墓タルヲ想見スルニ足ルベキモ其人家ニ近接セルモノハ多クハ窟中空虚ニシテ形様ノ尋常ナラサルヲ驚クノ外又差タル趣ヲ見ス然レトモ其構造ニ至リテハ元来同一種ノモノニシテ其空虚ナルモノハ蓋シ後世掘鑿シテ斯ク趣ヲ変セシモノカ征西大将軍懐良親王ノ御墓地モ近年其南隣宮地村ニテ検出セリ是亦土地ノ風境ナラサルヲ徴スル適例ナリ

一、棺中ヨリ取出シタル侭地主相預リ居候物品

鏡三面　曲玉壱本　管玉十六本

一、同上取出シタル後故ノ如ク歛メタル物品

尖辨形、劔三本　　刀弐本

石棺発掘ノ義ニ付上申

當県下八代郡岡谷川村字門前千弐百五十四番地平民楠田直平ナル者本年二月二十七日宅地内正北隅荒蕪ノ地ヲ開拓候節不図石棺ニ掘リ當リ同人ニハ當時未其何物タルヲ辨セズ卒爾ニ木桿ヲ以テ棺蓋ヲ発キ見候得者朱詰ニテ乃チ埋歛地ナリト心付僧ニ請テ追福ヲ営マシ為メ出テ同村光厳寺ニ罷越候内該雇夫等棺中ヲ捞キ鏡剣曲玉等取出シ居候ニ付剣類ハ故ノ如ク相歛メ鏡曲玉等ハ其侭預置候段届出候ニ付吏員ヲ派遣シ実査致候處果シテ届出ノ通尤石棺ハ暴露ノ恐レ有之候ニ付発掘ノ後土石ヲ掩ヒ埋歛為致置候依テ別紙実地検考書幷絵図面相添此段上申候也

明治十七年十二月三日

熊本県令　富岡　敬明

宮内卿伯爵伊藤博文殿

これに対して18年12月28日付けで、宮内大臣から遺物を差し出すよう通知があった。

書面古墳ノ儀ハ取調ノ上追テ何分可相達尤発見古器物其侭差置有之候ヘバ當省ヘ差出可申等

但運搬費ハ更ニ請求スベシ

明治十八年十二月二十八日 宮内大臣之印

ただちに翌19年1月29日、遺物が差し出された。

目　録

一、鏡　三　面

一、管玉拾六本

一、小石五　個

右之通リニ候也

熊本県肥後国八代郡岡谷川村平民

楠田　直平　印

明治十九年一月廿九日

明治拾年二月廿七日決

宮内大臣江御上申案

第三一号

古器物進達ニ付上申

當県下八代郡岡谷川村ニ於テ古器物之儀ニ付一昨十七年十二月三日ヲ以テ上申候處御指令之旨ニ依リ該器物別紙目録通通達会　ニ付シ進達候也

年月日　代理官

當

一、鏡　三面

一、曲玉　壱本

一、管玉　拾六本

一、埋歛ニ供シタル朱

右四種箱入

同省諸陵頭江御照会案

本日第三一号ヲ以テ差出シ候古器物運搬費別紙ノ通ニ付以下渡相成候様御取計相成度此段及

御照会候也

年月日　　書記官

當

追テ鏡三面共発掘之後持主ニ於テ磨研セシ由ニテ為メニ古色ヲ失ヒ居候此段ト尚御参考ニ必要ト存候尖辨形之劔三本刀弐本発見後故ノ如ク埋歛候由ニ付差出不申此段申添候也

19年6月22日付けで差し出された遺物を宮内省に献納するよう宮内省から県令あて照会があり、これに基いて県から郡長あて指導するよう文書が発送された。

六月廿二日陵発第四九〇号

本年二月二十七日付第三十一号ヲ以テ御上申相成候御県下肥後国八代郡岡谷川村ニ於テ発見古器物之義右ハ御陵墓取調中ト申候テモ其期限豫定致兼候事故此際発掘人ヨリ當省へ献納等致度志願モ候ハヾ相當之手當方詮議振モ可有之候ニ付其邊内々御含ヲ以テ御取調越有之度此段及御照会候也

明治十九年六月廿二日　　諸陵頭　香川　敬三

熊本県令　富岡敬明殿

明治十九年七月六日

八代列郡長江照会案

御所轄八代郡岡谷川村楠田直平宅地内ニ於テ発見セシ古器物之儀去ル二月　日ヲ以テ御　達相成候處右ハ其筋ニ於テ取調之為メ留置相成度趣然ルニ取調中ト申候テモ其期限モ不相分候間此際発掘人ヨリ献納候方可然ニ付此旨本人ニ御示諭該品目録ヲ添へ県令當テ献納願書差出候様御取計有之度内々及御照会候也

7月13日には発見者から県令あてに、目録をそえて献納願が提出され、7月31日付けで、宮内省へ報告された。

石槨中ヨリ発見セシ器物献納願

八代郡岡谷川村私所有地内ニ於テ古墳掘出シ石槨中ヨリ発見セシ器物本年二月県廣エ差出置候處今般献納致度候間御収納被成下候ハヾ難有奉存候則別紙目録相添此段奉願候也

八代郡岡谷川村千弐百五拾二番地

明治十九年七月十三日　　楠田　直平　㊞

右戸長　宇佐美為徳　㊞

熊本県令富岡　敬明殿

目　録

一、鏡　　三面

一、曲玉　壱個

一、管玉　拾六個

一、朱　　壱包

右献納候也

明治十九年七月十三日

八代郡岡谷川村

楠田　直平　印

明治十九年八月七日

八代列郡役所江照会案

御所轄八代郡岡谷川村平民楠田直平宅内内石棺中ヨリ曽テ発見セシ鏡三面曲玉壱本管玉拾六本今般宮内省ニテ取調可相成　ニ付該器物至急當庁江送致候様御取計相成度此段及御照会候也

年月日　　課名

當

明治十九年七月三十一日

諸陵頭江御返事案

去月廿二日付陵発第四九〇号ヲ以テ以　日ニ進達セシ古器物之儀ニ付御照会之趣了承乃チ該所有主ヨリ献納致度　別紙之通願出候ニ付及御回候條可然御取計相成度此段及御答候也

年月日　　長　官

當

献納された遺物に対して宮内省から金八円が下賜された。

十一月十二日陵発　第番外

十九年十月十八日受

熊本県

其県下肥後国八代郡岡谷川村ニ於テ発掘古器物発掘人楠田直平ヨリ献納願之趣奇特之儀ニ付聞届依リ手當トシテ金八圓ヲ本人へ下賜ス

明治十九年十月十二日

宮内大臣伯爵　伊藤　博文　印

明治十九年十一月二十日

八代葦北郡役所

其所轄八代郡岡谷郷ニ於テ発掘古器物発掘人楠田直平ヨリ献納願ノ趣奇特ノ義ニ付聞届依

テ手當トシテ宮内省ヨリ金八円下賜アリ此旨本人へ達スベシ

年月日　　知事

現在これらの遺物は宮内庁書陵部に保管されている。なお、宮内庁の御好意により遺物の写真を提供いただいた。　　（隈）

第4章　総　　括

清水古墳群は鞍が峯と竜峰山のほぼ中間の裾部に立地する古墳群で、昭和52年4月～8月に清水古墳群の発掘調査を、また、関連調査を54年2月に実施したものである。従来、この一帯には10数基の円墳と1基の前方後円墳（門前一号墳）の存在が知られていた。九州自動車道はこれら古墳群の東側を通ることになり、みかん畑造成等により消滅したと推定される区域について調査した。

消滅したと推定される区域内には、3カ所に古墳の石材と思われるものがあり、道路敷に接して横穴式石室墳（清水1号古墳）がある。この区域での調査の結果、以下のことがわかった。検出した遺構は土器溜・土器包含層及び中近世のピット群の3カ所である。

土器溜ではF 9～F 10にかけて弧状に同一レベルから須恵器の大甕・短頸壷・高坏・蓋・坏などが検出された。古墳時代の同一時期のもので、他に混入した遺物はない。弧状に並んで出土している状況から最近の調査例に基づいて判断すると、あるいは消滅した古墳の周溝底である可能性が考えられる。周溝であると仮定した場合、弧の状態から判断して、小規模な古墳であったと推測される。

土器包含層では、前述の土器溜に近接して一層上位の層に自然地形にそって傾斜した包含層が認められ、古墳時代の須恵器を主体に、白磁・青磁・土鍋等が出土した。

ピット群は、調査地の北端の平坦部で14個を検出した。ピットの形状は隅丸方形・長方形・円形・長円形を呈し、深さはみかん畑造成等により削平されたためか、比較的浅い。中にはピット内から角礫等が検出（4 P・5 P）されており、柱の周りを固めたものかとも考えられるが、断定はできない。ピットの出土状況から建物の配置を推察することはできない。また、ピット内の出土遺物（11 P出土近世陶器、7 P出土瓦質土器）から近世の建物に関連する遺構と考えられる。

清水1号古墳は道路敷に東接し盛土も消失しており、天井石の一部が転落した半壊状態の古墳である。

石室のプランは長方形の単室で羨道をもつ。石室内には板石でもって三区の屍床が設けられ、いわゆる肥後タイプの「コ」の字屍床の石室といえる。床面は三屍床・墓道とも緑色片岩の板石を敷きつめ、羨門では認められない。

とくに奥石障は他の石障よりも厚く、しかも墓道面より約70cmも高い。この石障の長さは両側壁間の幅の分だけはないため、左端には別に方柱状の板石をもって補っている。奥石障と手前の石障との高さが大差ない例が多いなかで、これほど高い石を使用していることは、本来石

棺あるいは石屋形的性格の伝統を保持したものかもしれない。

石室の壁面は二枚の巨石をもって左右に建て、その奥にさらに一枚ずつを建てて側壁とし、奥の二枚と奥壁、前述の奥石障が奥屍床を構成している。

石室の前部には袖石を建て、その上に眉石を架し、さらにその上部に羨道から石室にかけて一枚の天井石を載せている。この天井石に一部載った中央の天井石が石室内に転落しているが、さらに少なくともあと一枚の天井石があったと推定できる。

玄室と羨道間の袖石の床面には調整された界石が設けられ、羨門部を構成している。

清水1号古墳の出土遺物には、人骨・副葬品及び後世の遺物がある。

人骨は右屍床内の床面上5～10cmのところから検出されているが、撹乱が著しい。長崎大学内藤芳篤・分部哲秋氏の報文（第3章2）によれば、右石障部から男性3体、女性1体、合計4体、左石障部から男性1体、奥石障部、その他の撹乱部から性別不明の1体が確認されており、数回の追葬が行われたことがうかがわれる。また、保存状態がきわめて悪いため、形質を詳細に知ることはできないが、西日本の各地から検出された古墳人骨と現代人骨を比較した場合、大きさにおいては明らかな差は認められないが、下肢骨の扁平性に関しては、大腿骨上骨体部および脛骨においては現代人よりは強い傾向を表わしているという結果が報告されている。

須恵器は床面から出土したものはなく、浮いた状態で検出した。かなり時期が認められるので、追葬時のものも含まれていると考えられる。そのほか、金属器として耳環6個（右屍床出土の1個以外は浮いた状態）、鉄鏃（右石障・奥石障）、轡（右石障）、刀子、鉄刀（奥石障）、留金具などが出土している。

清水1号古墳の時期は的確に時期を比定できる資料が少ないが、出土遺物などから推察して六世紀後半から七世紀前半頃と考えられよう。（隈）

Ⅱ

野寺遺跡
林源衛門墓

第1章　序　　説

1．調査に至る経緯

九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線（松橋～八代）建設計画に伴ない、熊本県教育委員会では昭和46年度に国庫補助を受けて、計画地内の幅 200ｍの 範囲について 文化財分布 調査を 実施し、松橋～八代間に33カ所をチェックした。

その時点では、野寺古墳参考地・林源衛門墓の二遺跡については不明であった。その後、路線が決定された段階で、宮原町教育委員会の協力を得て現地踏査を行い、二遺跡が路線内に含まれることを確認して、調査対象として登録した。

当初、昭和51年度調査予定で準備にかかったが、用地交渉が難航したため、日本道路公団の杉本一宏（工務課長）、土持懿臣（八代工事長）、有村武（同）の三氏及び文化課限昭志が再三地権者へ調査の協力を求めた。しかしなかなか妥協点がつかめず、結局発掘調査に入ったのは昭和53年度後半であった。

調査途中で、野寺古墳参考地は古墳でないことが判明したため、野寺遺跡として調査した。

発掘調査は熊本県教育庁文化課が実施し、調査組織は下記のとおりである。　　（限）

調　査　組　織

調査責任者	岩崎　辰喜	文化課長
調　査　総　括	限　　昭志	文化財調査係長
調査員（野寺）	村井　眞輝	技師
〃　（林）	桑原　憲彰	技師
〃　（林）	勢田　廣行	嘱託
〃　（林）	松村　道博	嘱託
整　　理	上野　辰男	主幹
	山城　仁恵	嘱託
調査事務局	田辺　宗弘	課長補佐
	真弓袈裟勝	前課長補佐
	村上　孝司	管理係長
	望野　正雄	前管理係長
陶磁器調査	馬場　　強	長崎県立美術博物館専門員

文　献　調　査　　花岡　興輝　熊本県立美術館美術専門員
　　森下　　功　熊本市文化財保護委員
協　　力　　宮原町教育委員会

2．遺跡の位置（第11図）

野寺遺跡及び林源衛門墓は熊本県八代郡宮原町早尾に存在する。この地域は標高517.2ｍの竜峯山の北にのびる山裾部にあたる。早尾集落を東に進むと観音堂があり、この堂の北方、独立丘陵の頂上（標高47.6ｍ）が野寺遺跡である。周辺はミカン畑に開かれ、野寺遺跡そのものは雑木林となっていた。

野寺遺跡のすぐ南には深い谷が流れ、その対岸の独立丘陵の頂上（標高58.5ｍ）が林源衛門墓である。

集落から急な踏み分け道を頂上に向って登っていくと、雑木林の薄暗いなかに、ヤマモモの木があり、その周りに石がこいをした石碑群があり、その南側に接して現代墓地が続く、歴代墓地として神聖な区域であった。

周辺には坊屋敷・今寺などの地名が残っているほか、四方仏・五輪塔・六地蔵・板碑群が数多く遺存している。　　（限）

第2章　野寺遺跡調査記録

1．現状と調査の方針

調査対象となっている丘陵は宮の原早尾の集落と今寺の集落の中間に位置し、林源衛門の墓のある丘陵と谷を一つ隔てた東側に当たる。

地元の人々は本調査対象の丘陵を「坊主山」、林源衛門の墓のある丘陵を「ゲンノタッチョ」と呼んでいる。両丘陵とも現在は開墾が進み、陽光の当たる所となっているが、ほんの数年前までは木々に覆われた淋しい所であり、「火の玉が出る所」と言って白昼でも大変恐れる人もいたという。また、西南の役（明治10年）において氷川をはさんで激戦が行われた時、当地に本陣（官軍？）が置かれたと地元の古老は伝える。

調査地の頂部を遠望すると丸くなっており円墳のように見えるが、基盤は花崗岩の風化した土で、浸食を受けやすい地形であるので断言はできない。現地に立ってみると古墳時代の遺物の散布や墳丘と思われる封土は見られない。しかし、地元の郷土史家の多くは古墳の可能性があると言っているので発掘することにした。

以上のようなことを踏まえて、次のような調査方針を定めた。

①丘陵上の草木の除去を行う。

②丘陵部の地形測量をする。

③頂部に十字に交差するトレンチを設定し、遺構の有無を確認する。

④遺構の存在の可能性がある場合は調査を続行する。

⑤周辺調査は時間が許されるならば林源衛門の調査班と合同で実施する。

（村井）

2．調 査 日 誌 抄

昭和53年12月４日から昭和54年１月17日まで調査を実施した。調査員は村井真輝１名だけである。調査地周辺は縦貫道建設の工事が急速に進み、日ごとに地形が変化するので、調査作業員の事故防止に心がけた。

12月14日　丘陵頂上部に塩・米・酒を奉げ作業の安全を祈る。作業員にこれからの調査の段取りと作業上の安全確認について指示する。その後、雑木の伐採および焼却作業をする。

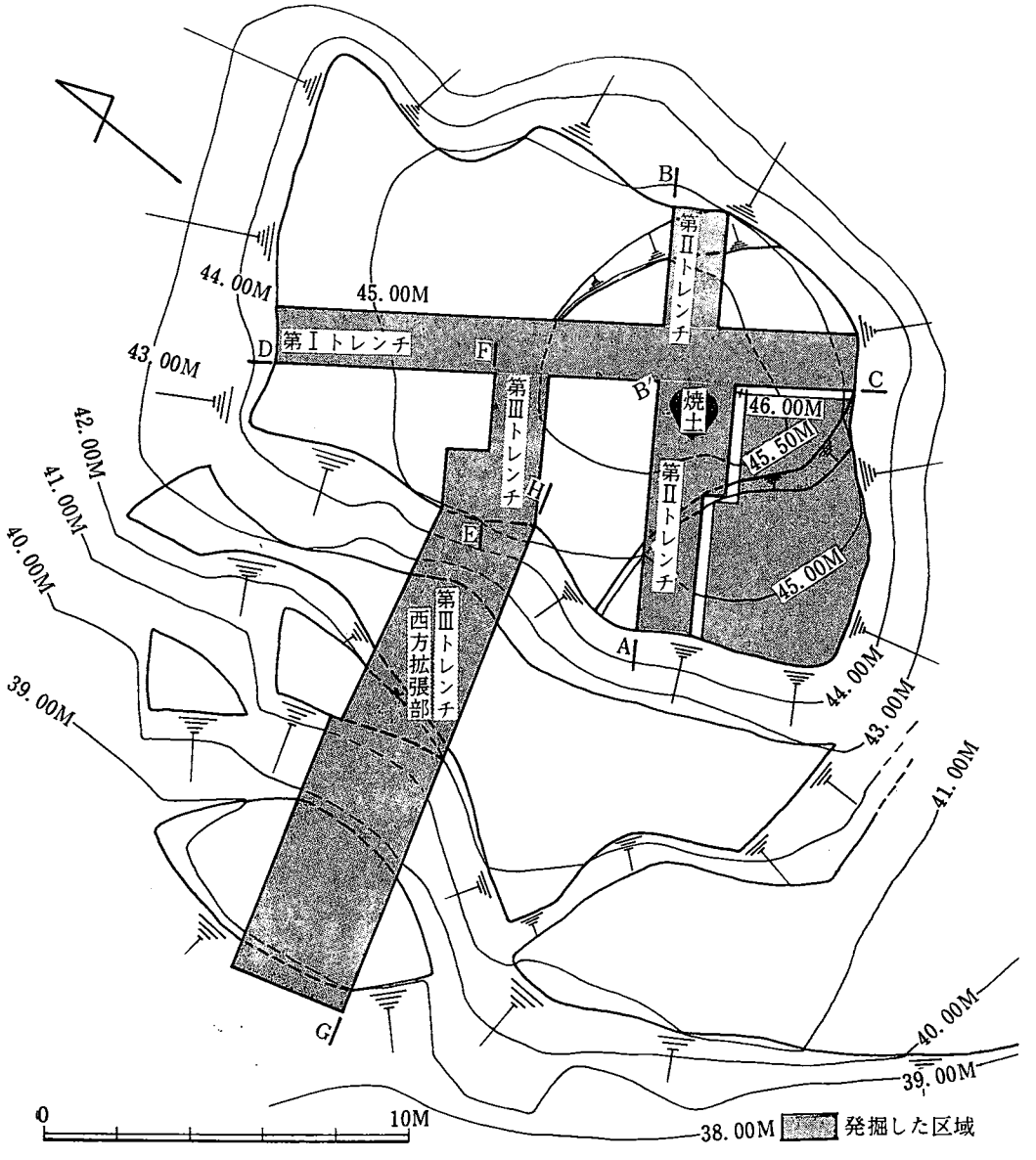
12月15日　第Ｉトレンチ設定、発掘を開始する。

12月18日　第Ⅱトレンチ中に焼土を検出する。焼土中に木炭のつまった穴があり、中より銅片（何かの金具と思われる）を発見する。

12月20日　木炭のつまった穴から古銭（寛永通宝）が出土する。この穴の実測（1/10）を行う。

12月22日　炭素を含む部分があるので、第Ⅲトレンチを拡張する（後にこの炭素は自然の働きによって生じたものとわかる）。地形測量を開始する。

12月27日　第Ⅲトレンチの拡張部の発掘作業を中断して作業小屋の清掃作業を行う。



第1図　野寺遺跡地形およびトレンチ配置図

12月28日～1月7日　年末・年始の休暇のため発掘作業を休む。

1月8日　第Ⅲトレンチを西方に思い切って拡大し、発掘を行い、炭素の分布を追い求める。

1月15日　第Ⅲトレンチ拡大部において追い続けてきた炭素は阿蘇凝灰岩が噴出した時、その下になった木々が炭化したものと考えられる。

1月17日　発掘器材の手入れ、およびあとかたづけをして、調査を終了する。

検出した遺構は木炭のつまった焼土のみであり、検出した遺物は木炭中から採集した銅片と古銭、および表面採集の青磁片・磁器片等であった。（村井）

3．発掘調査の記録

(1)第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲトレンチの観察記録（第1・2・3図）

∘第Ⅰトレンチ

長さ16m幅1.5mのトレンチを丘陵頂部に設定する。断面の状態は表土（10cm）の下に花崗岩の風化した土がある。第Ⅲトレンチと交差する付近の表土下に撹乱層が見られるのは、頂部を少し削平して蜜柑園を開墾した時、低い方に埋土した土と思われる。第Ⅱトレンチと交差する付近には花崗岩の風化した土が焼けていることがわかった。

∘第Ⅱトレンチ

長さ11.5m、幅1.5mのトレンチを第Ⅰトレンチに直交するように設定した。トレンチ中より焼土（中に木炭がつまっている）が検出されたので長さ3m、幅0.6m拡幅した。表土（10cm）下は花崗岩の風化した土であるが、東西の低い方には開墾した時広げたと思われる埋土が見られる。

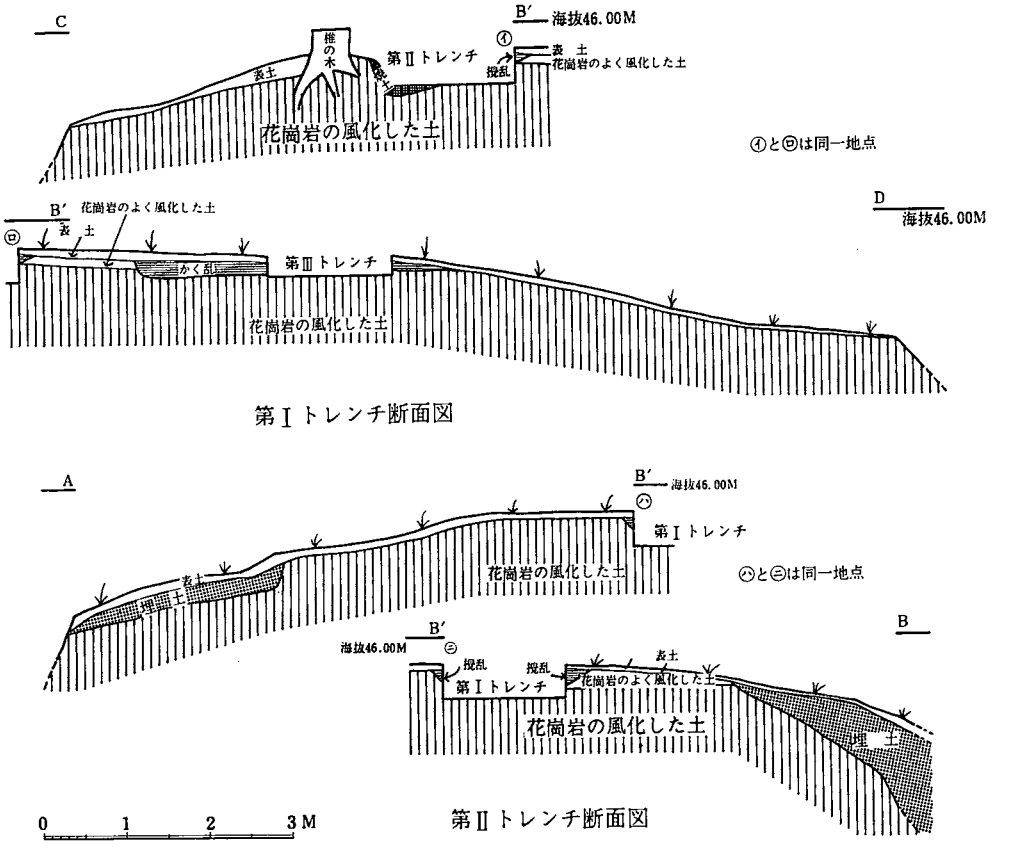
第Ⅰトレンチと交差する付近には少し撹乱部が見える。この撹乱は蜜柑の幼木を植えた穴と思われる。また花崗岩のよく風化した土が表土下にある。

∘第Ⅲトレンチ

長さ4m、幅1.5mのトレンチを設定する。表土（10cm）下に埋土（14～40cm）があり、その下は花崗岩の風化した土になっている。この花崗岩の風化した土の上面には、炭素を含む部分が見られる。この炭素の分布状態を調べるため第Ⅲトレンチを西方に拡張した。

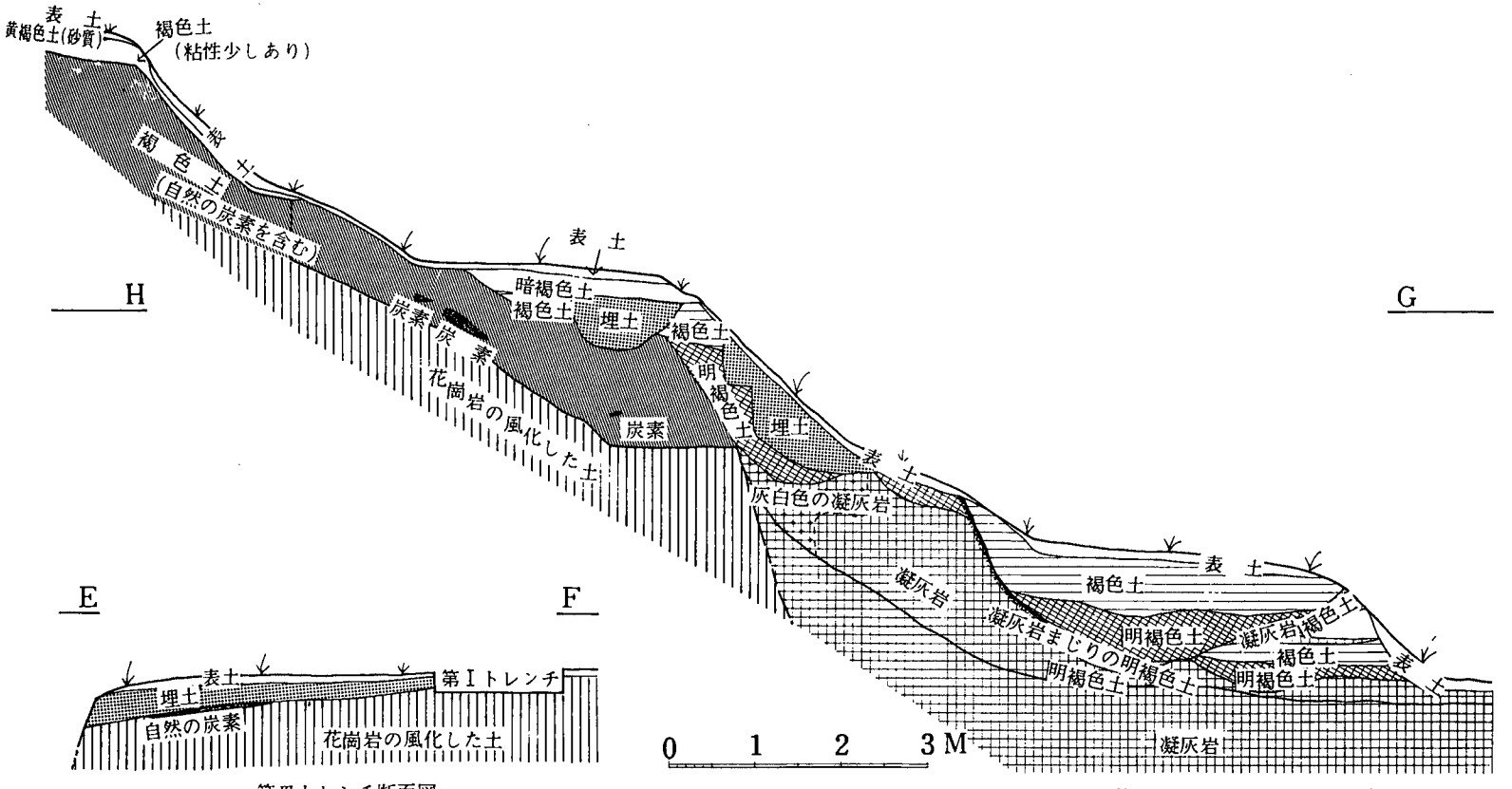
∘第Ⅲトレンチ西方拡張区

長さ14m、幅3.2mほど第Ⅲトレンチを炭素の分布に従って拡張する。このトレンチは丘陵の頂部付近から中腹部にかけて設定したので落差が約7mある。



第2図　第Ⅰ・Ⅱトレンチ断面図

トレンチの壁面の観察から土層の層序は表土、褐色土（明褐色～暗褐色）、凝灰岩、褐色土（炭素を含む）、花崗岩の風化した土の順になっている。炭素を含む褐色土は土層の状態から、花崗岩の強く風化した土が二次的に堆積した土と思われる。この層中からは何ら遺物は検出されず、人為的な作用を受けた様子もない。このことから炭化物は自然の作用によって生じたものと考えられる。近隣の花崗岩に凝灰岩が不整合に乗っている様子が見える露頭にも類似の炭素が多量に見い出されていることから、凝灰岩が噴出した時に木々が炭化したものと考えることも可能であろう。



第Ⅲトレンチ断面図

第Ⅲトレンチ西方拡張区断面図

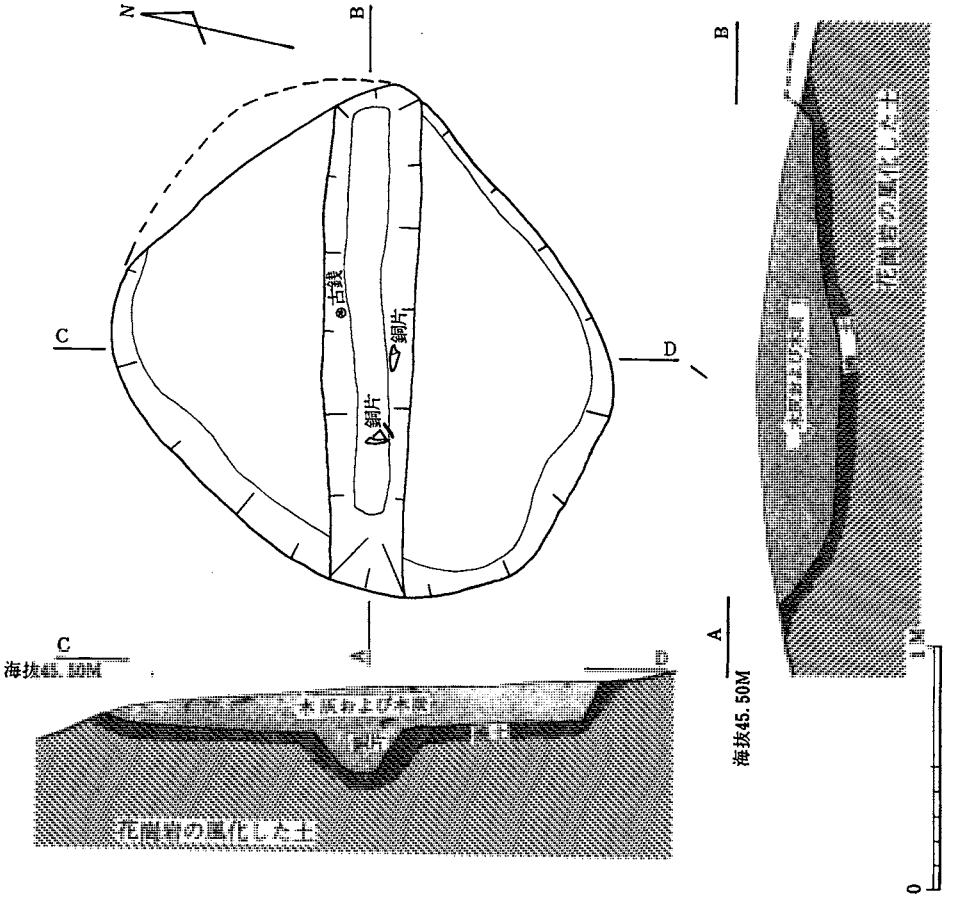
第3図　第Ⅲトレンチ断面図

⑵第Ⅲトレンチ出土の焼土と遺物（第４・５・６・７図）

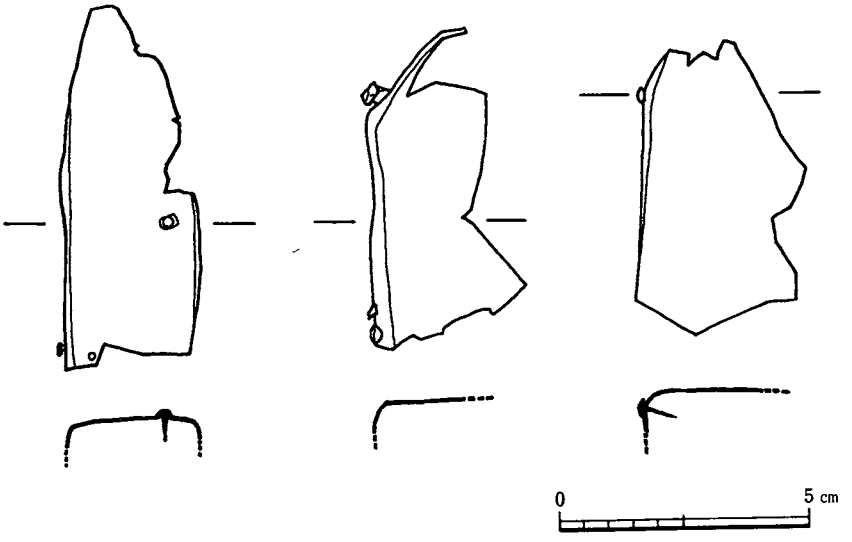
丘陵の最頂部付近で第Ⅰトレンチと第Ⅱトレンチが交差するように両トレンチを設定したところ、交差点近くの第Ⅱトレンチの表土下から焼土を検出した。

焼土の形は隅丸の長方形の盆状を呈し、縦1.30ｍ（復原1.4ｍ）、横1.15ｍ、深さ0.12ｍを測る。対角に幅0.25ｍ、深さ0.12ｍの１本の溝が存在する。焼土の盆状の凹地には木灰と木炭が中央部が少し小高くなるように充満していた。木灰と木炭の間から鉄釘が打ち込まれた銅片と古銭（寛永通宝）が出土し、これらは床面からは浮いていた。

木炭は軟い木質の木と堅い木質の木から成っている。接合して３個体に復原した銅片（第５図）は同一個体と思われる。銅片の両面はＬ字形に折り曲げられいてる。幅2.5～３㎝、長さ6.0～7.5㎝、肉厚約0.5㎜を測り、３～４㎝間隔で長さ１㎝前後の鉄釘が打たれていた。鉄釘



第４図　焼土の平面および断面図

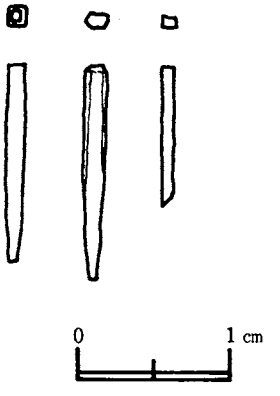


第5図 木灰中出土の鋼片

（第6図）の断面は1.1～1.5㎜の方形をなし、長さは0.9～1.4cmを測る。銅片の形状と鉄釘の打ち方から何かの隅金具と思われる。刀の鞘の金具かとも考えたが、釘の長さを考慮すると可能性は薄らぐ。

古銭（第7図）の外径は24㎜を測り、中央部には一辺が6㎜の方形の穴があいている。表には「寛永□□」の文字が見えるので寛永通宝と思われる。

以上述べたような遺構の形態、遺物の出土状態、および「坊主山」という呼び名から推測すると、江戸時代頃の何かの祭祀遺構と考えることが可能であろう。



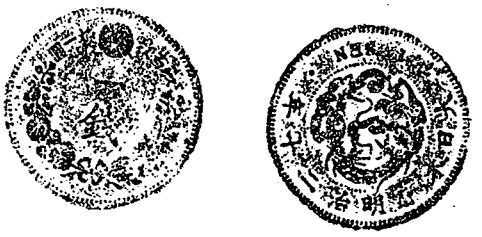
第6図 木灰中出土の鉄釘

第7図 木灰中出土の古銭拓影

(3)表面採集遺物

一銭銅貨（第８図）、白磁（第９図１）、磁器（第９図２）を採集した。

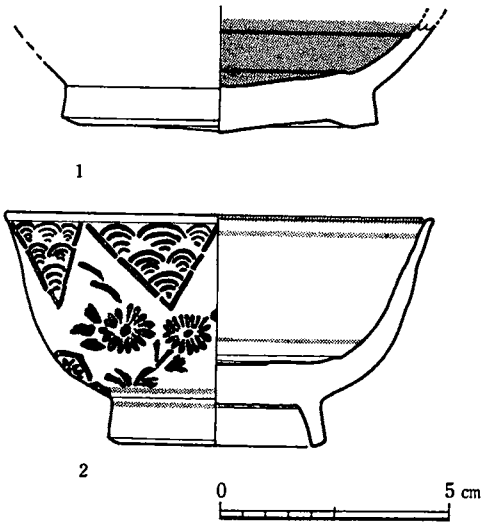
一銭銅貨は第Ⅲトレンチ設定地の崖面から表採したもので、明治20年の刻印がある。



第８図　表採遺物拓影

白磁は当調査地と林源衛門の墓との間の川床から採集した埦の底部である。現存の器高は2.4cm、高台の径6.9cmを測る。高台は削り出しによって作られており、内側には１本の沈線がある。口縁は玉縁を持つ福建省産の宋代の白磁と推測される。

磁器は当調査地の頂部付近から採集した。器の外面には、青海波状文と菊花を染付してある。内面の口縁に２本、底近くの立ち上がり部に１本の線を染付している。見込みには重ね焼きの跡があり、釉薬が蛇目状にかかっていない部分がある。器高5.0cm、復原した口縁の径9.5cm、高台の径4.8cm、高台の高さ1.0cmを測る。印判手の有田焼と思われるので明治以後の器であろう。



第９図　表　採　遺　物

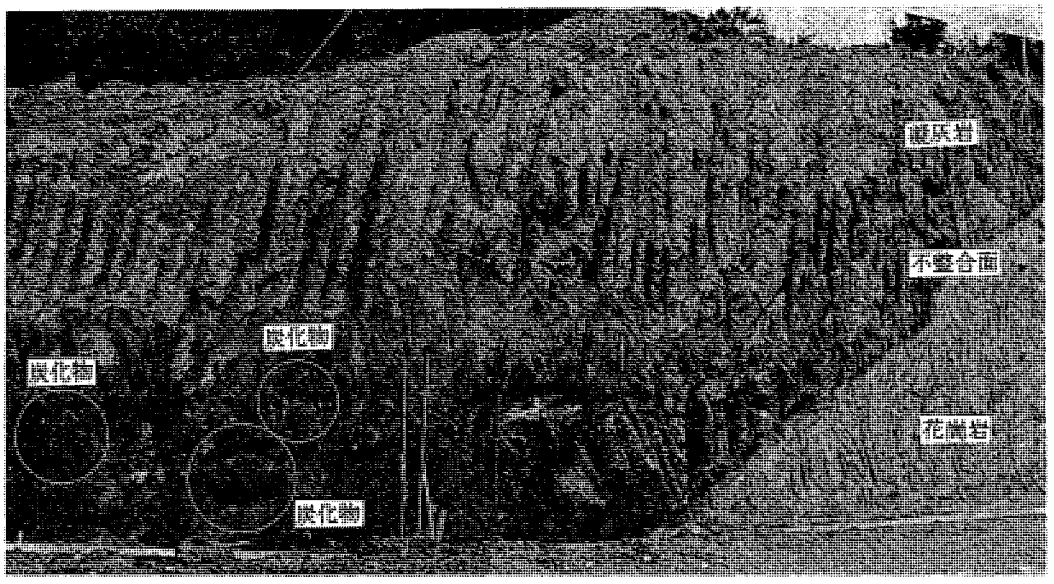
（村井）

4．ま　と　め

第１図に示した区域を発掘したが、第Ⅱトレンチから検出した盆状の焼土以外に何の遺構も検出されなかったので、当地は古墳でないことがわかった。

焼土については前述したように、木灰中から検出した古銭（寛永□□），遺構の立地と形態・呼称（坊主山）から考えて、江戸時代に祭祀が行われた遺構と思われる。ところで林源衛門墓がある丘陵の南にあたるもう１つの丘陵は「コロリバカ」と呼ばれており、江戸時代の後半頃の墓石が存在することや、「火の玉が出る所」と恐れられる点を考え合わせると祭祀が行われたことは充分にうなずける。

（村井）



第10図　土　層　断　面

第3章　林源衛門墓

1. 調査経過

本遺跡の南側には4基の現代墓があり、人骨を他の場所に移すため、文化課技師桑原憲彰、村井真輝の立ち合いのもとに調査が行われ、頂上の平坦部が部分的にカットされている状況がわかった。また本遺跡は当初は古墳参考地と予測されていたが、この推察は現代墓調査の断面観察の結果により古墳の可能性はないということが判明した。このような経過に基づき昭和54年1月19日より、器材、実測用具等を野寺遺跡より受け継ぎ本調査を開始した。林源衛門の板碑は3mの方形の石組により取り囲まれている状態にあり、その状況の平面実測（S1/20）を開始した。一方基壇の西側に付属遺構の有無を確認するため2×4mのトレンチ（1T）を設定し表土剝ぎを開始する。

1月23日、林源衛門板碑の東側に2×4mのトレンチ（2T）を設定し掘開する。一方昨日設定した1Tの清掃にかかる。頂上の平坦部は地山まで20m前後であり付属遺構の存在する可能性は薄い。

1月24日　1T、2Tを南側に拡張する。

1月26日　板碑、方形の石組等の平面、断面図が終了した後方、基壇の縁石（方形の石組）を撤去し、基壇内に十字のセクションベルトを残し調査を開始する。しかし基壇内のほぼ中央部には径1m弱のやまももの大木が生えており著しく調査に支障をきたす。

2月上旬　基壇内の墓壙の有無の確認調査を行う。しかし、やまももの木の根が四方八方に延び、その処理に時間を費やし調査は思いどおりに進行しなかった。

2月6日　林源衛門の墓壙確認調査と平行して、文化課技師大田幸博が周辺関連遺跡の調査として草場城の調査を開始し、また文化課嘱託白石巌により周辺関連遺跡（五輪塔・四面仏・六地蔵等）の写真撮影の調査が開始された。

2月7日　林源衛門の墓壙確認調査。南側の墓壙確認の調査は木の根の処理で時間を費やし、しかも中央部は木の根のためほとんど調査不可能な状態であった。前日に引きつづき白石巌は写真撮影の調査を行った。文化課係長隈昭志の踏査。

2月8日　墓壙確認調査と平行し、大田が草場城、および周辺の聞き取り調査を行う。白石の周辺遺跡に関する写真撮影調査はほぼ終了する。

2月13日　調査地区だけ残され周囲より土取りが開始され、ブルとトラックの騒音の中で調査を進める。

2月14日　中央にセクションベルトを残し、4ケ所ともほぼ均一レベルまで（地山；花崗岩霧

爛土）掘り下げ、セクションの清掃と東側、西側壁面に互いに対応する状態でサブ・トレンチの設定を行った。その結果南西側の断面、平面で土壙状の落ちこみラインを検出した。しかし、その全体のプランは中央のやまももの木のため検出不可能であった。

2月15日　板碑北側に付属遺構の有無を調査するため3T（1.5×4.0m）の設定を行う。これと平行して土層を分層し、セクション図（S1/20）の作成に当る。

2月16日　土壙の全体のプラン検出に努めたがやまももの木のため不可能であった。しかし、板碑と土壙の関係は、板碑は土壙のプラン・ライン上に乗っている状態であった。この土壙が林源衛門に伴う墓壙か否かは今後の調査に委ねられた。

2月19日　中央の十字のセクションベルトを排除する。

2月20日　中央のやまももの木を造園業者が徹去するため下部遺構に傷つけないように作業させる。徹去作業は半日かかり午後よりプラン検出を行った。

2月21日　土壙の掘りこみ。土壙内より7枚の寛永通宝が検出される。土壙の写真撮影。

2月22日　土壙のプラン・セクション実測（S1/20）を行う。

3月初旬　林源衛門に関する関連調査、早尾、山口、今寺、坊屋敷、油谷の五輪塔、四面仏、六地蔵の実測調査（S⅕）

3月8～13日　関係調査で実測した五輪塔、四面仏、六地蔵等の梵字、仏等を県文化財収蔵庫の山城仁恵、岩崎さゆり、新改孝子が拓本取りを行った。

3月15日　河窪の眼鏡橋の実測（S1/20）、プレハブを撤去し、器材、遺物等を県文化財収蔵庫に運搬する。以降、図面等の整理作業は昭和54年4月より実施し、遺物の拓本、拓本の整理作業については熊本県文化財収蔵庫の作業員により遂行された。　（桑原、勢田）

2．調査前の状況

林源衛門の板碑が位置する頂上の平坦部の規模は約東西8m、南北10mである。林源衛門の板碑の周囲は30cm角を呈する凝灰岩質の長方形の角材で約3.40mの方形状に石囲が組まれていた。その石組の中央にはやまももの大木が茂り、林源衛門の板碑は中央部よりやや北側に位置し、板碑の先端部は折れ東側に倒れた状態であった。また板碑の北側には五輪塔の火輪石、地輪石が、一方南側には地輪石、長方形状を呈する板石が散点する状態であった。さらに、林源衛門墓の西側から南側にかけて数基の近世墓が造営され、この丘陵は聖なる墓地としての性格を保っていたものと思われる。　（勢田）

3．遺構検出の状況

調査以前の状況を実測したのち、中央にセクションベルトを残し墓壙有無の調査を実施した。まず周囲の方形の石組を取りはずした結果、その石組の下には角材を固定するため現代の

瓦片を多数敷きつめている状況であった。また方形の石組の中央部には径１ｍ程のやまももの大木が生え、木の根の処理に時間を費やした。また中央部は調査が遅れ最後まで調査の進行に支障をきたした。このような状況で調査が進行し、表土より約20cm程掘り下げた状態で土壙らしき落ちこみを西側のセクションとプランにおいて検出した。しかしその土壙の全体のプランは中央のやまももの木を徹去しなければ検出できない状況にあった。そのため造園業者にやまももの木を下部の遺構が傷つかないように撤去する作業を行わせた。その結果、土壙の東南側に部分的に傷を負ったが、土壙の全体のプランを検出するに至った。　　（勢田）

4．遺　　構

基本的な層序は非常に単純な層位関係を示す。すなわちⅠ層：表土、Ⅱ層：暗黄色土、Ⅲ層：花崗岩霧爛土（地山）である。しかし部分的、とくに東側には花崗岩霧爛土の上層にⅠ層・赤褐色粘質土が確認される箇所もある。またⅠ層：表土は板碑の付近が頂上レベルを有し、板碑付近を中心に東西、南北の石組の方向にかけて10～20cm程下がっている。土壙の切りこみは表土直下のⅡ層よりⅢ層にかけて（暗黄色土～花崗岩霧爛土）に切りこまれている状況で検出した。土壙内の埋土は一層のみで暗黄色土に花崗岩霧爛土をブロック状に含む層である。土壙の形状は東西；84cm、南北；104cmを測り長方形を呈する。 土壙の主軸はほぼ北方向をさす。土壙の底部はフラットであり、上場よりほぼ垂直に掘下げ、土壙の深さは約 112cm を測る。土壙内よりの出土遺物は土壙のほぼ中央・深さ約56cm程（Ⅱ層上面よりの高さ）で７枚の寛永通宝が一括して出土したのみで他には遺物は検出されなかった。

周囲の方形石組と土壙の位置関係は、土壙が方形石組の北寄りに位置している。また土壙と板碑、五輪塔（火輪、地輪石）等の位置関係について観察すれば第14図が示すとおりである。すなわち横断面を見れば板碑は土壙の掘り方ラインより20cm程外側に出るような状況を呈しており、板碑の底はわずかに土壙の埋土内にかかっている状態を呈している。一方縦断面を見れば土壙の掘り方の真上には中央に板碑、左右には地輪石が確認される。地輪石は表土中に存し板碑はわずかに北側に傾斜している状況を呈していた。折れた板碑を復原すれば長さ161.5cm、幅70.7cmで台形状を呈する。板碑の石質は安山岩であり正面に

「生国豊前俗名林源衛門尉信政」

「施主大庭平八郎信展」

背面に

「南無妙法蓮華経」

萬治二己亥

本覚院道源霊

正月廿三日

の銘が彫り印されている。　　（勢田）

5．遺　　物

土壙内より７枚の寛永通宝が検出された（第５図参照）。１は径24㎜、厚さ1.1㎜を測り、中央部に一辺　６㎜の方形の孔を有する。寛永通宝表面「通」の箇所は腐蝕を受け、また裏面も全体的に腐蝕が進んでおり、歪が生じている。２は径24㎜、厚さ1.1㎜を測る。中央部に一辺７㎜の方形の孔を有する。部分的に腐蝕しているが残存状況は比較的良好である。３は径24.8㎜、厚さ1.2㎜を測る。中央部に一辺5.8㎜の方形の孔を有する。部分的に腐蝕しているが残存状況は良好である。４は径24㎜、厚さ1.3㎜を測る。中央部には一辺6.3㎜の方形の孔を有する。寛永通宝下方が部分的に欠損し、残存状況も悪い。５は径24.9㎜、厚さ1.3㎜を測る。中央部に一辺5.4㎜の方形の孔を有する。比較的風化、腐蝕も少なく残存状況は良好である。６は径23.8㎜、厚さ1.1㎜を測る。中央部に一辺　6㎜の方形の孔を有する。部分的に腐蝕はしているが残存状況は良好である。７は径23.9㎜、厚さ1.1㎜を測る。中央部の方形孔の復原径は5.3㎜を測る。銭の上部は欠損し、全体的に風化が進み残存状況は悪い。　　（勢田）

6．小　　結

調査の結果判明したことおよび、その問題点を列挙して小結としたい。

①　板碑の周囲の方形の石組は板碑年代より新しい現代の石組である。すなわち、方形の石組の下方には現代の瓦が敷かれており板碑の「万治二年」という年号には一致しない。

②　五輪塔の火輪１石、地輪５石が存在するがそれらは他の場所から運搬してきた可能性が強い。すなわち、五輪塔の部分石（火・地輪石）のみ存在し、五輪の完形品が認められない。しかもすべて遺構面より浮いている状況で検出されている。しかし、東側に存する一石の地輪石はやまももの木の根に巻きこまれている状況で検出されている。やまももの木の樹齢は判別し難いが、その幹回りは１ｍを測り、100年前後経過しているものと推測される。その根に巻きこまれている地輪石は他の地輪石に比して比較的古く位置づけることができよう。

③　板碑付近は表土がわずかに高まっている痕跡を残し、従来はマウンドを有していたものと推測できる。第14図で判るように板碑付近は方形石組がある表土より約20㎝程高くなっている。このことは，土層の分析の結果盛土は検出されなかったが、盛土が流れた可能性があり、本来はマウンドを有していたのではなかろうか。

④　板碑の下より土壙（墓壙）が検出され、板碑は供養塔の可能性はなくなった。長方形の土壙内より７枚の寛永通宝が検出された。出土遺物は前述の寛永通宝のみで骨片、釘等は検出されなかった。しかし土壙と板碑の位置関係などから想定して「墓壙」と判断される。また、埋葬形式は木棺と想定されるが、墓壙内より釘等は検出されず断定はできない。

以上調査による所見を述べたが林源衛門に関する具体性は、考古学的アプローチのみではそのヴェールを脱ぐことは不可能である。そのためには文献、民俗学等によりその実態が把握されることを期待する。（桑原、勢田）

7. 林源衛門尉について

九州自動車道の予定線上に位置する墓地として、県文化課の緊急調査の対象となった八代郡宮原町大字早尾の山中に数基ある墓碑のうちの一基が、林源右衛門尉の墓碑である。

それは背面の中央に「南無妙法蓮華経」と刻まれた宝塔で、下面には「万治弐巳亥年正月弐拾三日」「本覚院道源霊」「生国豊前　林源右衛門尉信政」、正面に「施主大庭平八郎信辰」とある。なお、信辰の辰は、磨耗しているので、あるいは展とも考えられる。

林・大庭ともに名乗りに「信」の字を付けているので、親子あるいは兄弟である可能性が強いが、これを確める資料はない。

戒名に「本覚院」と院号があり、苗字を名乗っているので、士分・牢人および一領一疋・地侍のいずれかの階級に属していたと考えられるところから、細川忠利・光尚・綱利三代の間に作成された『侍帳』、細川家の史料の集成であるところの『部分（ぶわけ）御旧記』、松井家の家臣名薄である『御家人帳』、その他の史料についても調査を行ったが、両名とも検出することができなかった。

永青文庫蔵の家臣の『先祖附』の「は」の部には、林を名乗る十一家が収められているが、そのいずれにも源右衛門の称する者は見出せなかった。

現在、該集落には、林を名乗る家はない。この地は、近世には八代郡種山手永に属するところから、在御家人（郷士）の同苗字を調査した結果、早尾村にはみられないが、隣接する岡小路村（現八代市岡町小路）に林を名乗る家があった。

寛政九年（1797）6月の『種山手永御家人中先祖附』に、林儀三次の先祖附が収められている。それは次のとおりである。

井樋方助役
一領一疋岡小路村居住
林　儀三次

一、私先祖、丹後国之者にて、御当家（細川家）江御奉公仕、御鉄炮小頭相勤居申候処、至極不勝手と御座候ニ付、御奉公難相勤、無拠（よんどころなく）御暇奉願、八代郡岡小路村江蟄居仕居候処、元禄十一年寅五月、其節之御郡奉行堀田七右衛門殿、飯田安兵衛殿御在勤之内、八代郡江四人之地侍被召抱候節、私曽祖父林喜介と申者代、地侍ニ被召出、下川権内と申地侍之跡、高田手永新無田村ニ有之候御赦免開田七反六歩被為　拝領相勤居申候処、老極仕、御断申上候ニ付、喜助悴林又助と申者、享保八年、親跡地斗

ニ被　召出、御赦免開、直ニ被為　拝領候、又助儀、寛保三年三月、名を林喜助と相改、宝暦九年迄、三十七年相勤、同年十月病死仕候。（以下略）

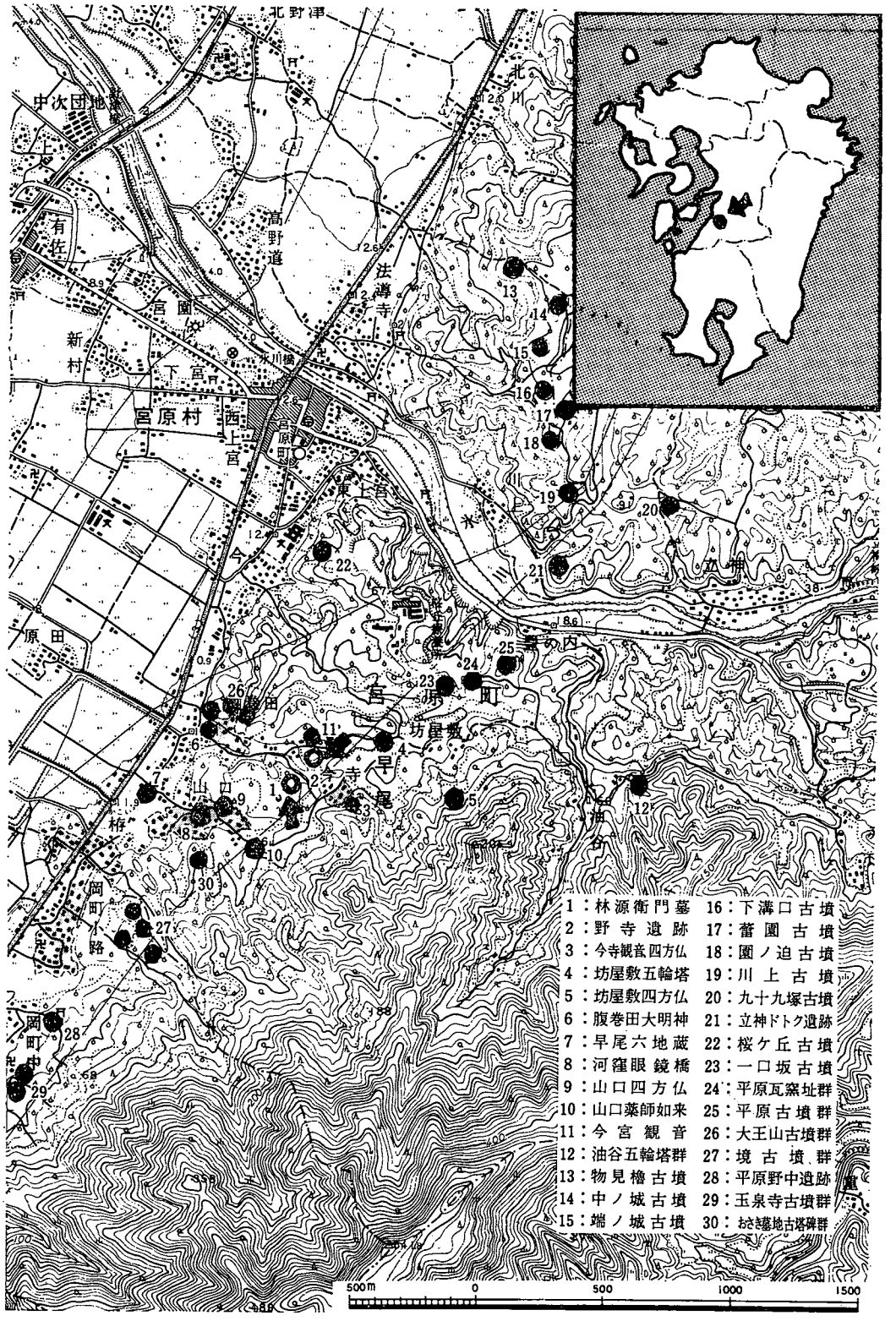
この先祖附に見える鉄炮小頭を勤めた人の名前は明らかでないが、先祖の某は丹後国の生れで、細川氏が丹後から豊前移封のとき随伴し、その子が豊前国に於て出生し、細川忠利の肥後移封に際し、肥後に移り、鉄炮小頭を勤め、のち早尾村に隠棲し、この地で歿した、と推定すると、この人が林源右衛門尉であったのではあるまいか、その子孫が岡小路村に移り、代々該地に居住したと考えられる。なお、岡小路の裏山の中腹にある林家の墓地にある石塔婆は、宝暦八年（1758）以降のもので、それまでの墓碑が存在しないことを考えると、岡小路村に居住した林家の先祖の墓碑である可能性が濃厚である。

林家はさきの『先祖附』にもあるように、林喜介が元禄十一年（1698）5月に八代郡地侍に召し出されて以来、2代喜助、3代喜藤次は、安永七年（1778）12月、一領一疋に進席、4代儀三次、5代喜藤太、6代岩雄と相続し、岩雄は嘉永五年（1852）に砂川尻新地が築造されたのち東綱道村（現八代郡竜北町）に移住した。

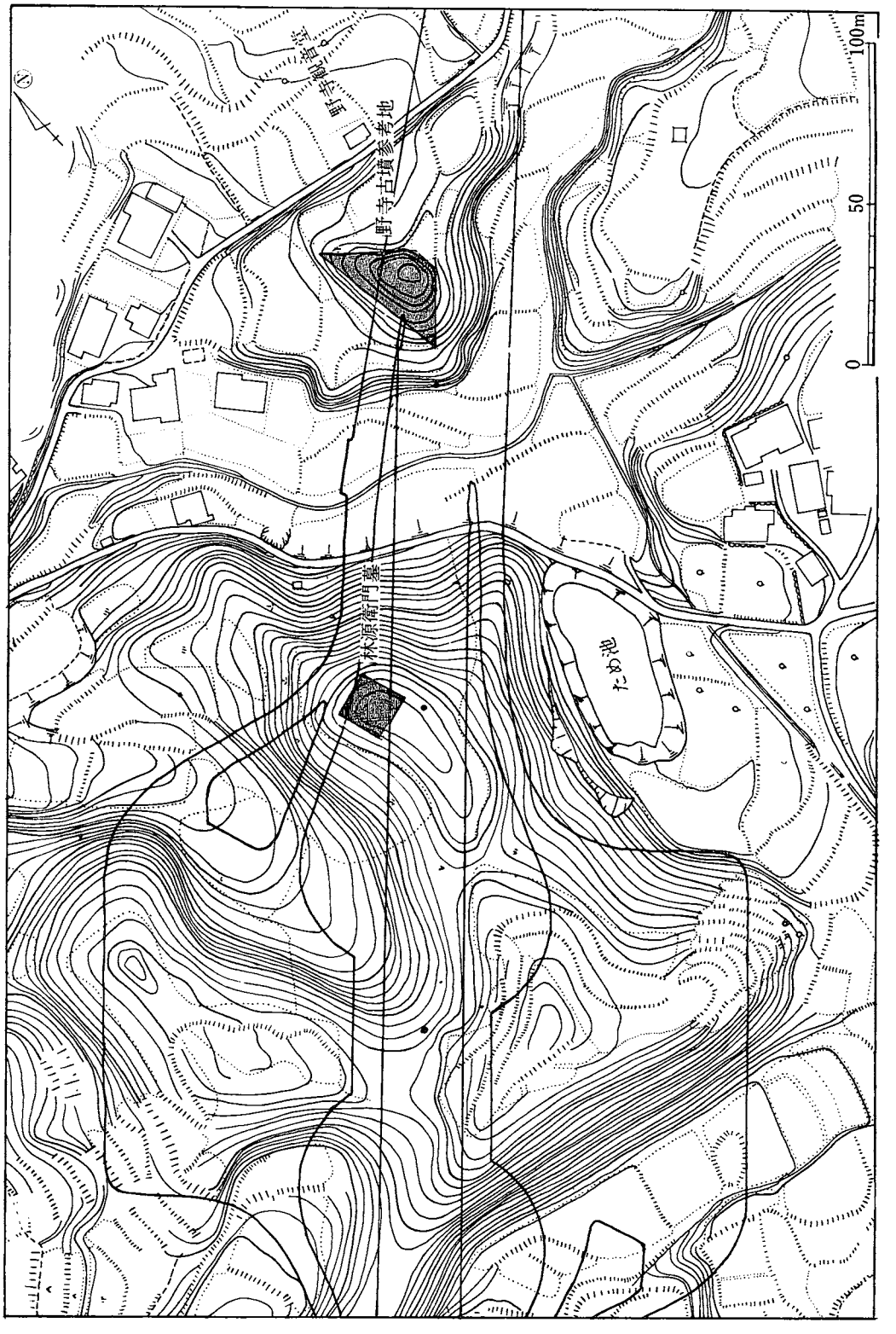
なお、林源右衛門尉の墓は宝塔であるので、日蓮宗との関係は当然と考えられるが、日蓮宗では、戒名のうち一字に日を付けるしきたりがあり、この戒名には日が付けられていないので、日蓮宗の信徒と断定するには若干問題があると考えられる。

〔附記〕　この文中で、宝塔というのは、本妙寺に照会し、日蓮宗の題目のある墓碑を指すとの御教示を得たので、とくに用いた。

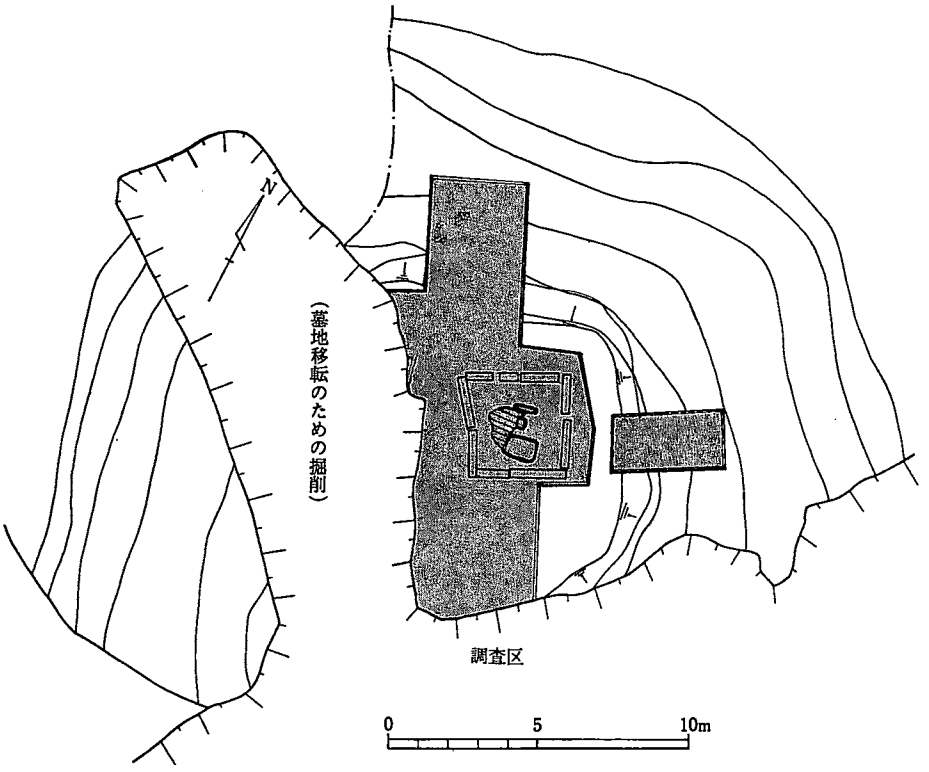
また、引用した『先祖附』は、八代市岡町平野家の所蔵史料である。　（花岡興輝）



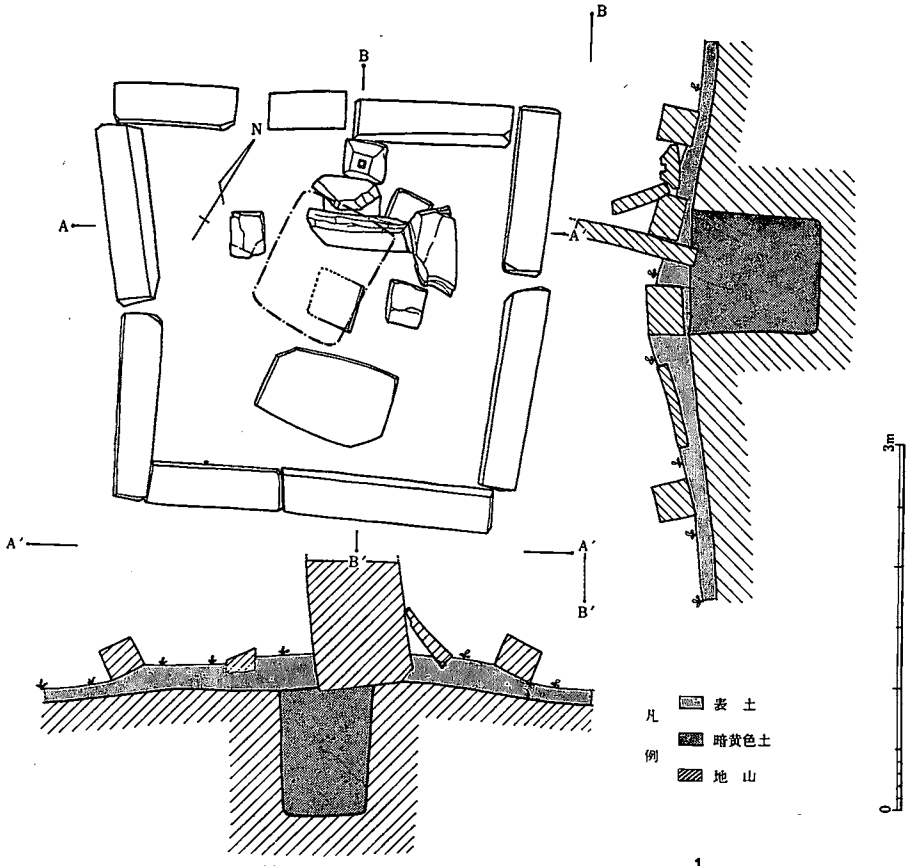
第11図 遺跡分布図 $\frac{1}{25,000}$



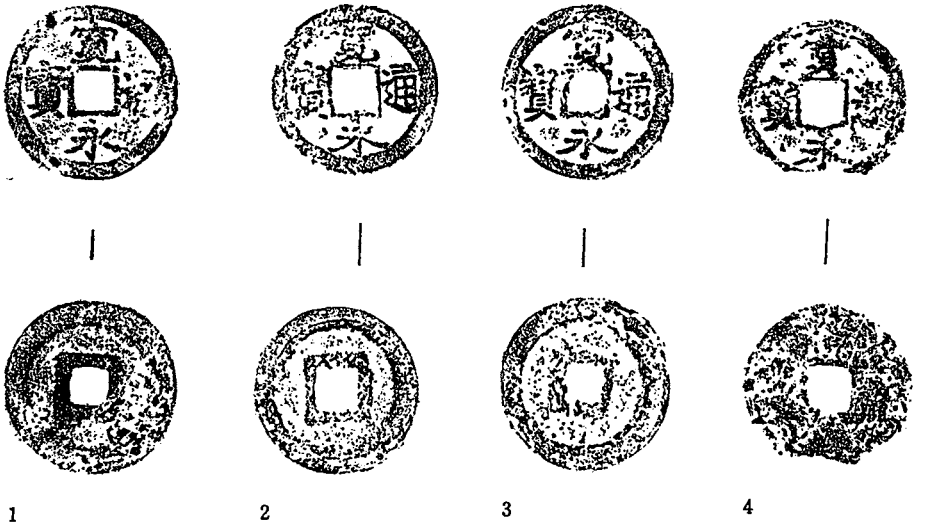
第12図　林源衛門墓及び野寺遺跡地形図―$\frac{1}{1,000}$―

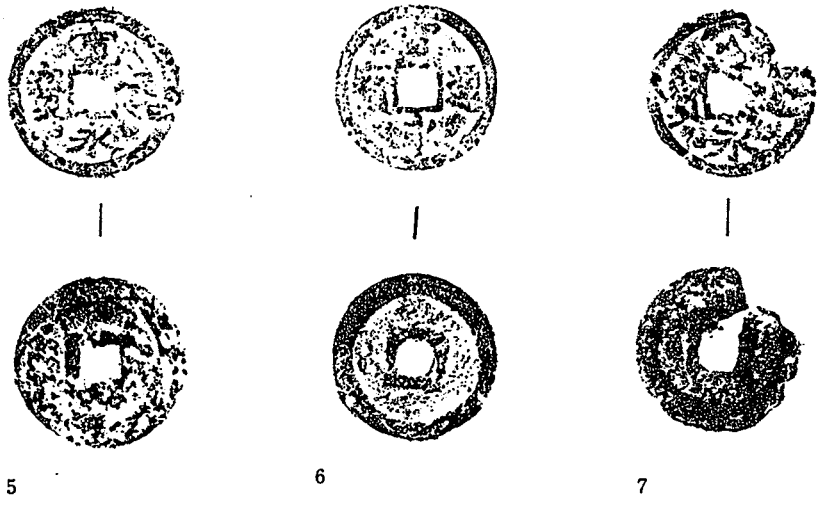


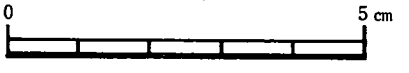
第13図　林源衛門墓調査区全体図 1/100



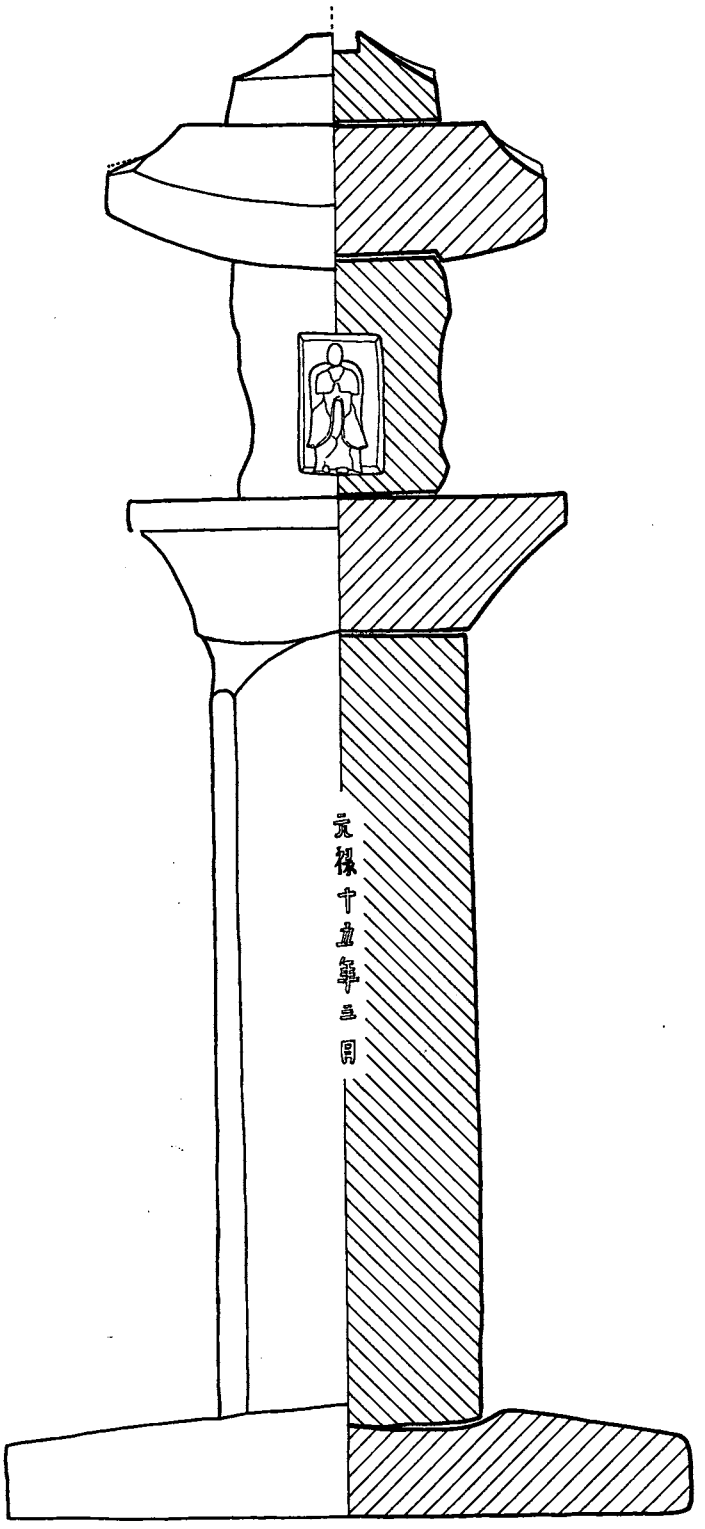
第14図　林源衛門墓石組の現状及び土壙出土状況図 1/20



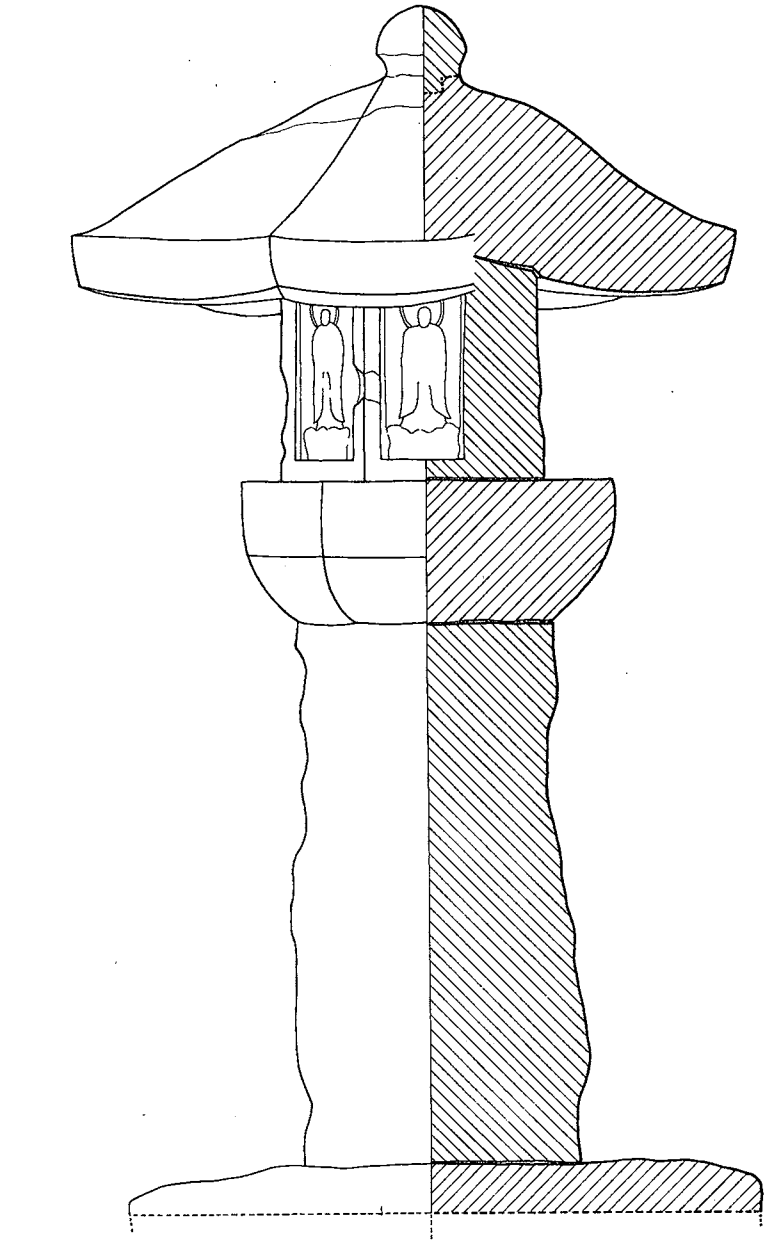




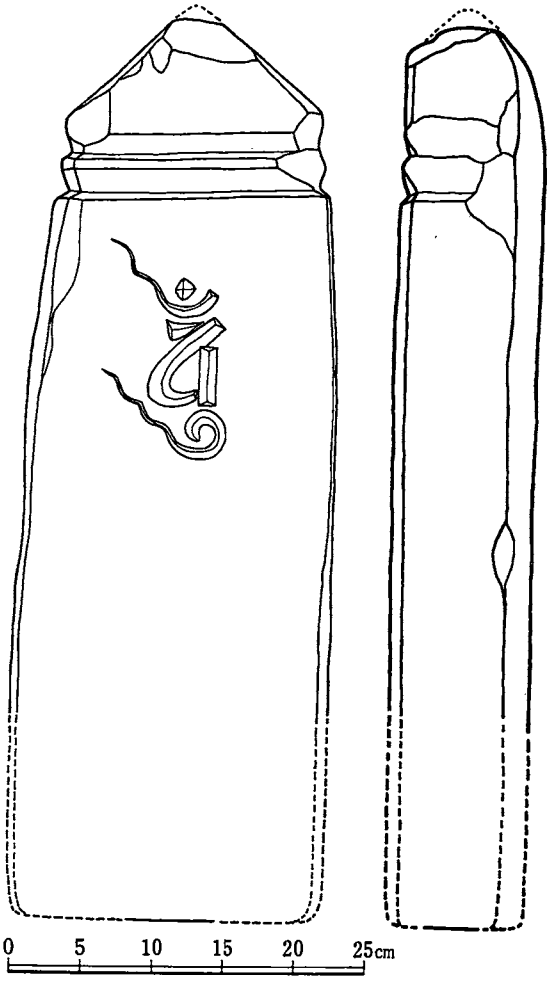
第15図　土　壙　出　土　遺　物（拓本）

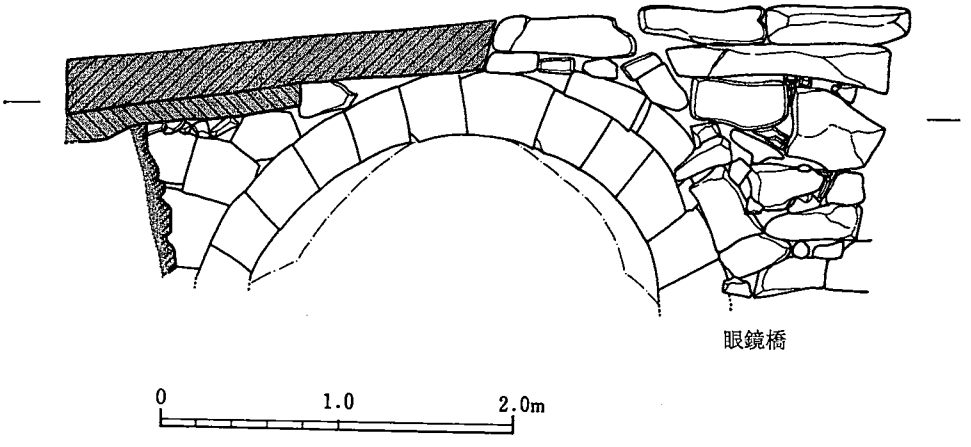


第16図 今 寺 四 方 仏 実 測 図

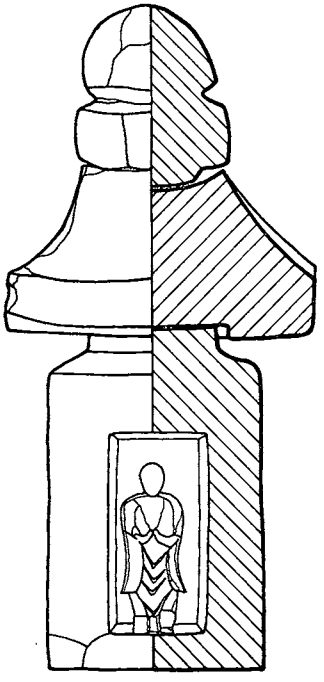


第17図　早尾六地蔵実測図

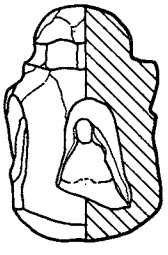




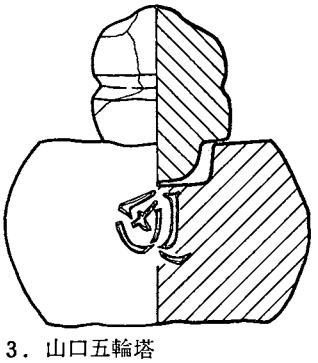
第18図　早尾大日如来、河窪眼鏡橋実測図



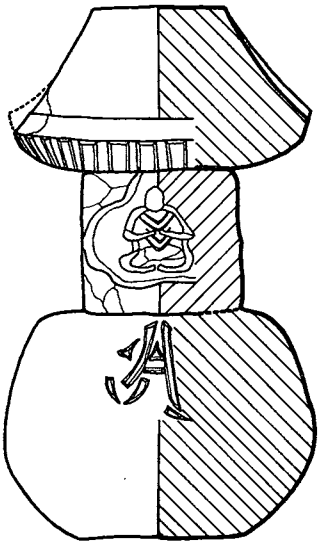
1．坊屋敷



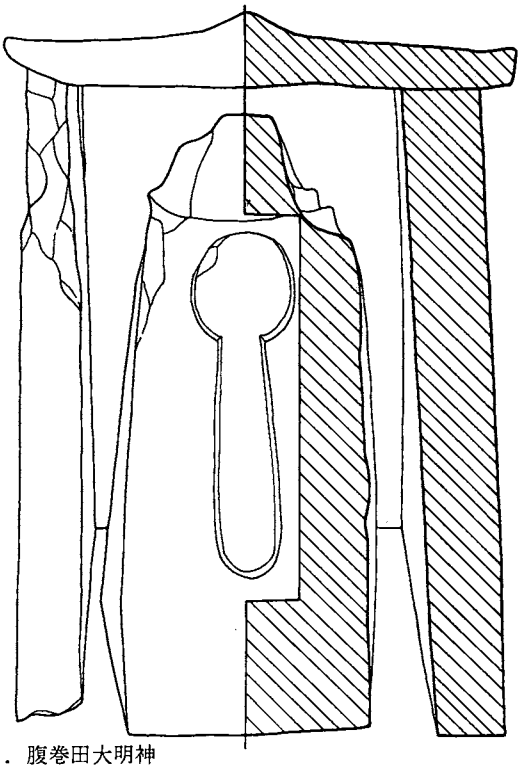
2．坊屋敷四方仏



3．山口五輪塔



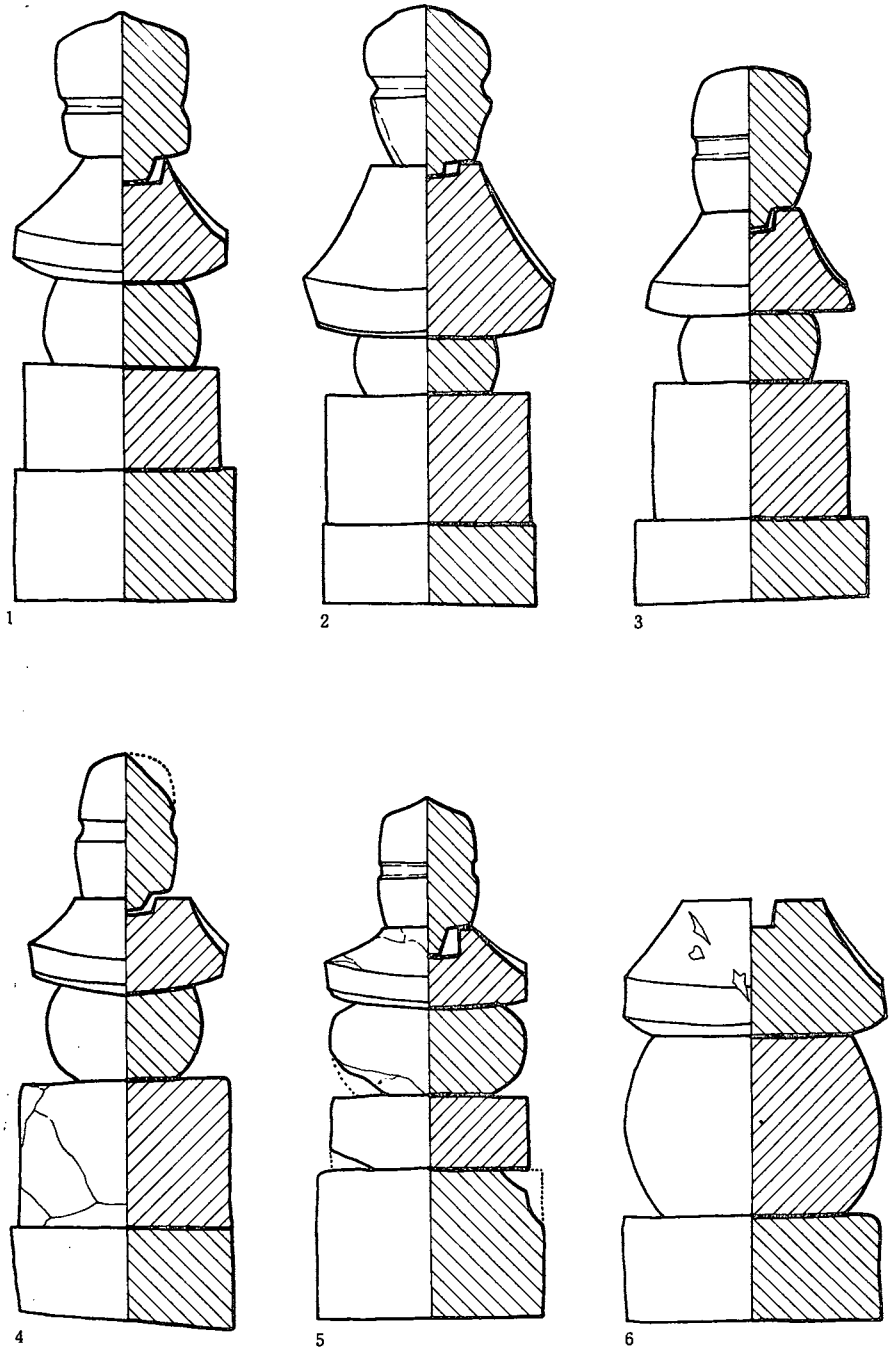
4．山口四方仏



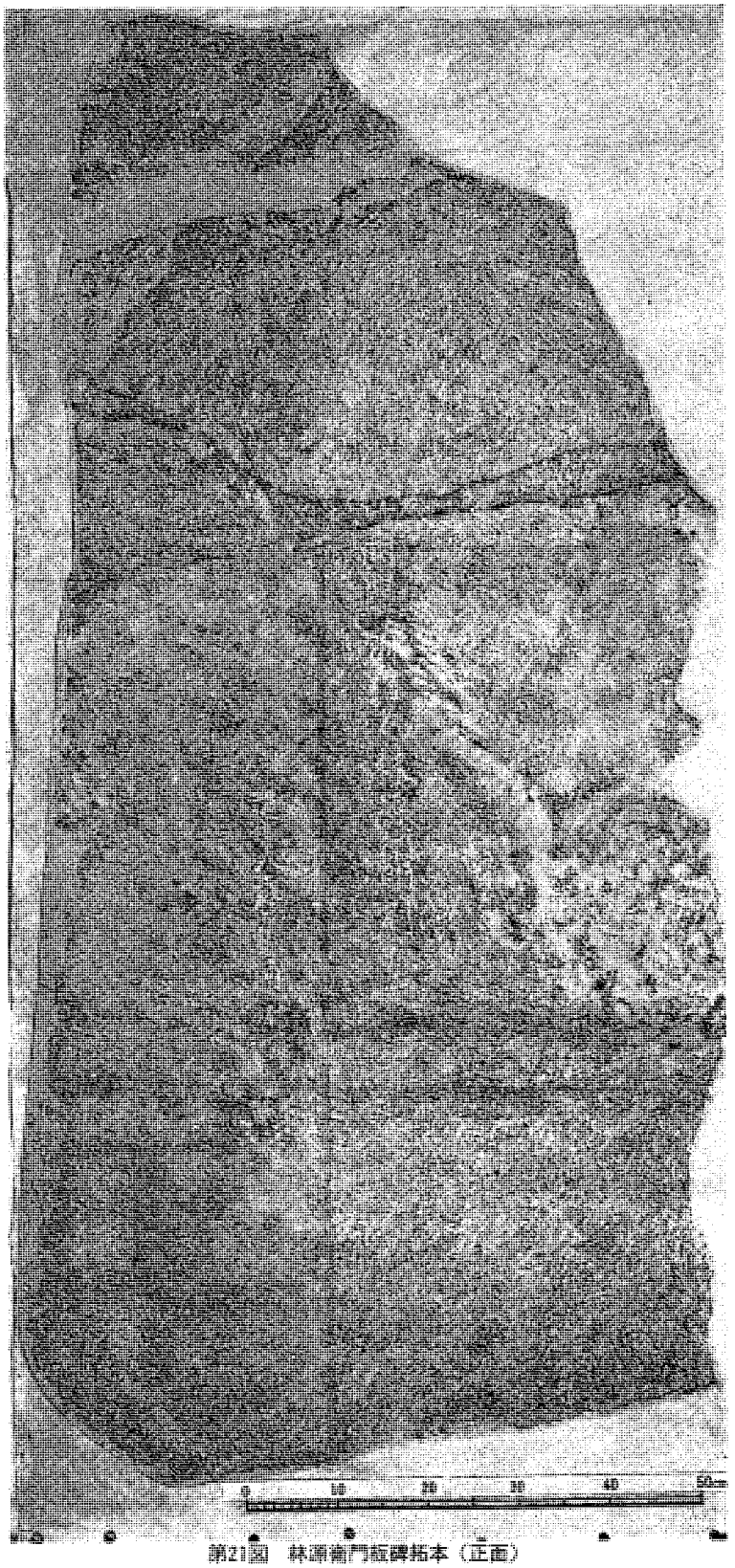
5．腹巻田大明神

0　50m

第19図　四方仏、五輪塔実測図

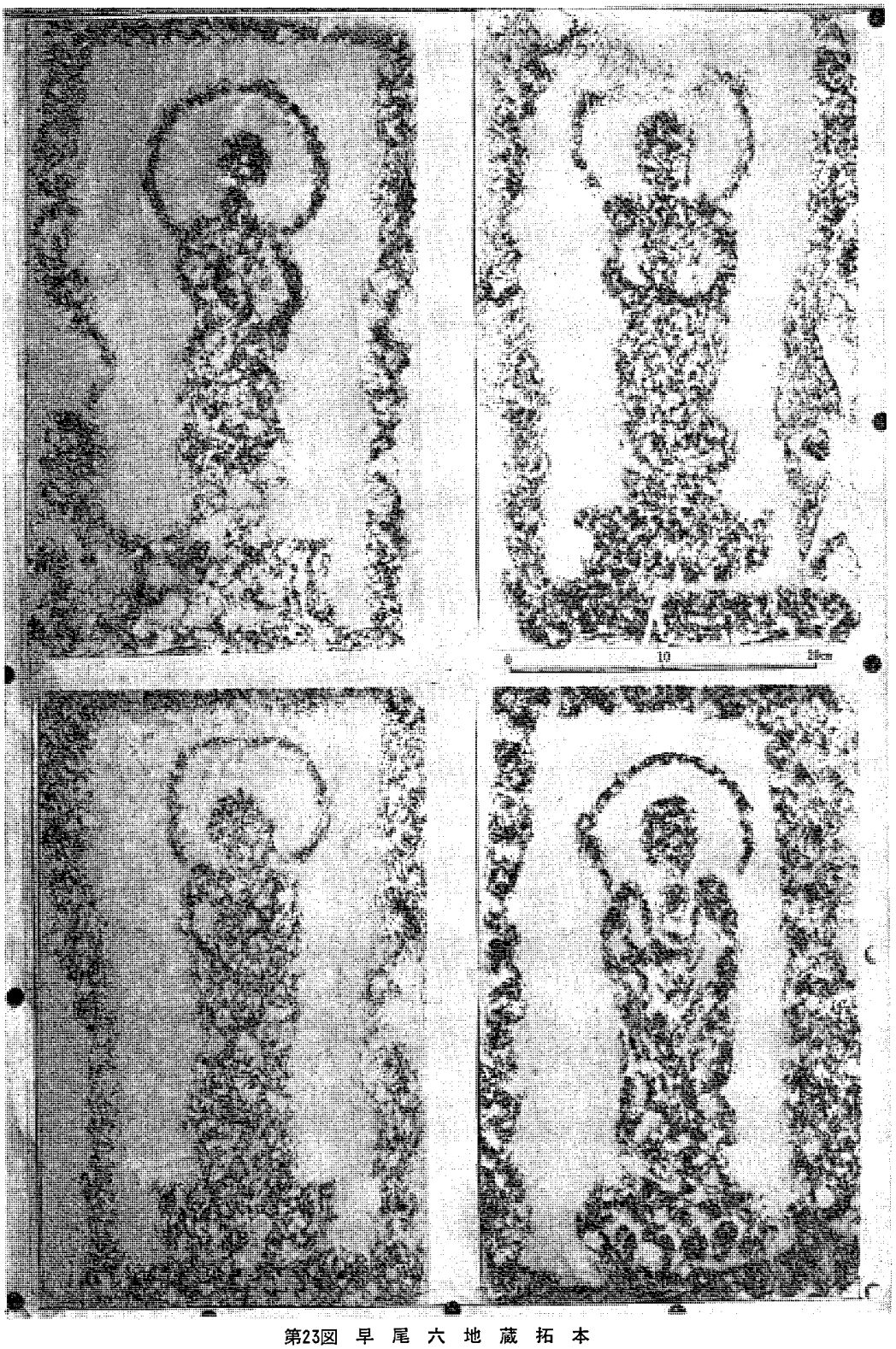


第20図　五　輪　塔　実　測　図

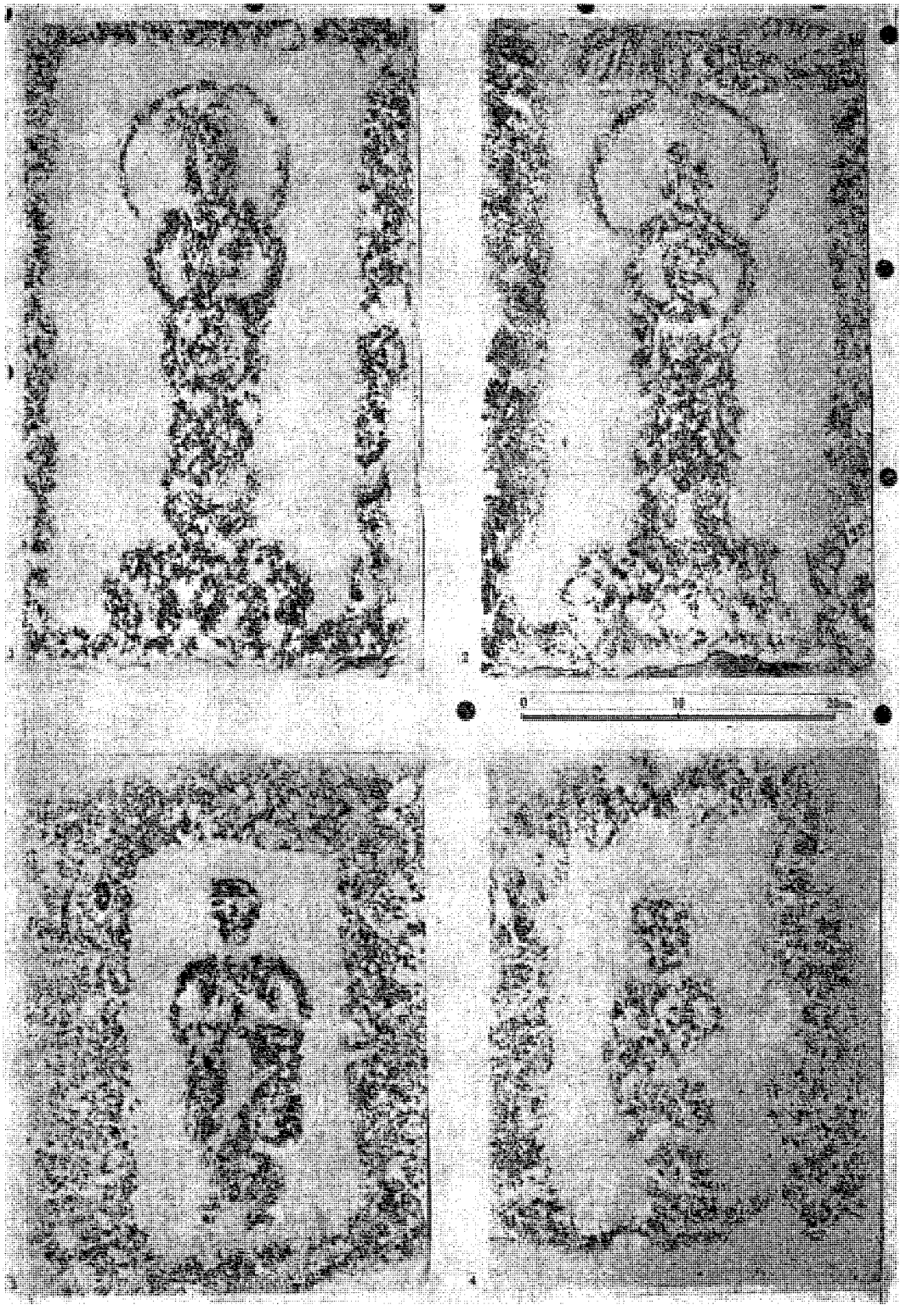


第21図　林源衙門版碑拓本（正面）

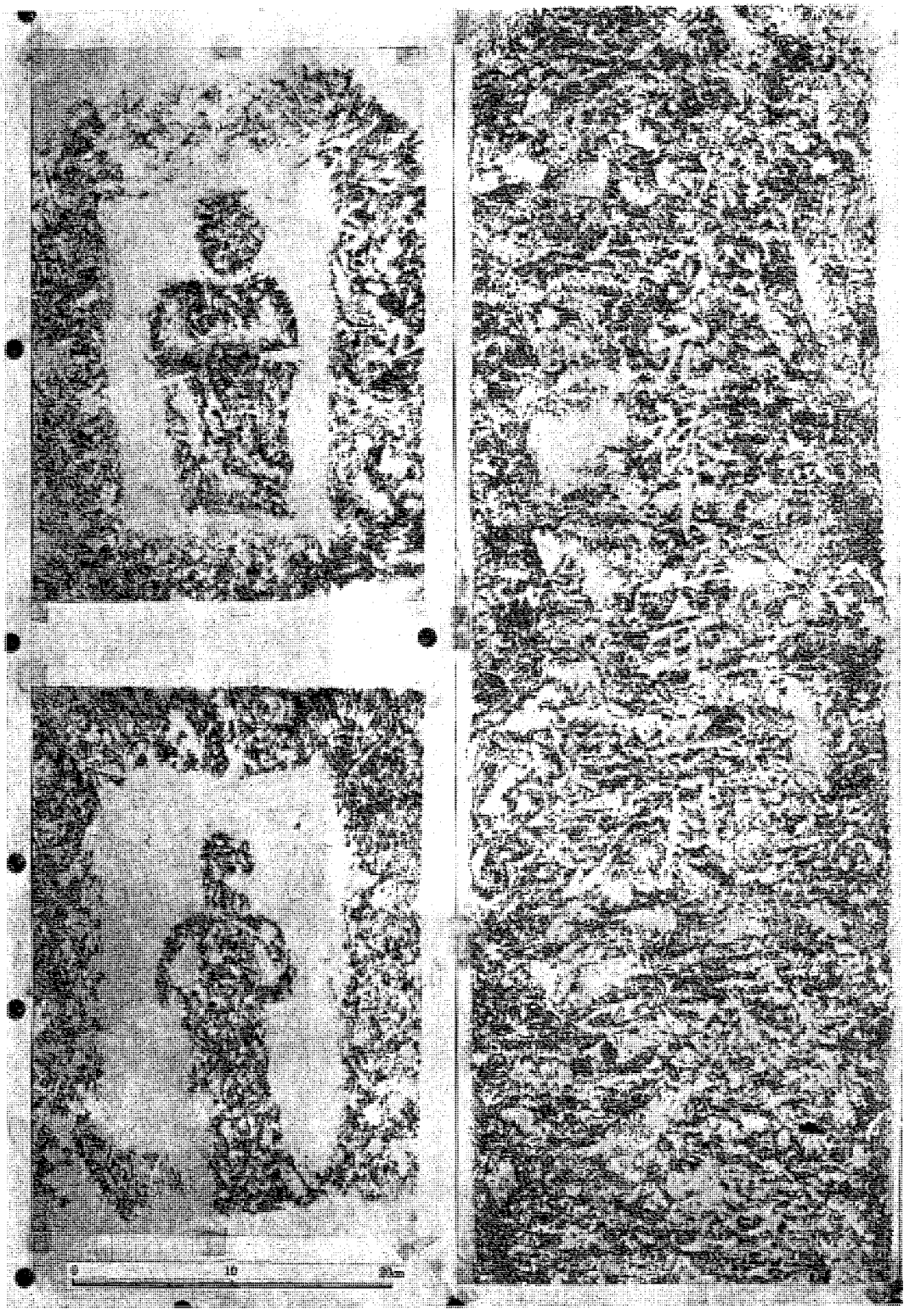
第22図　林源衛門板碑拓本（背面）



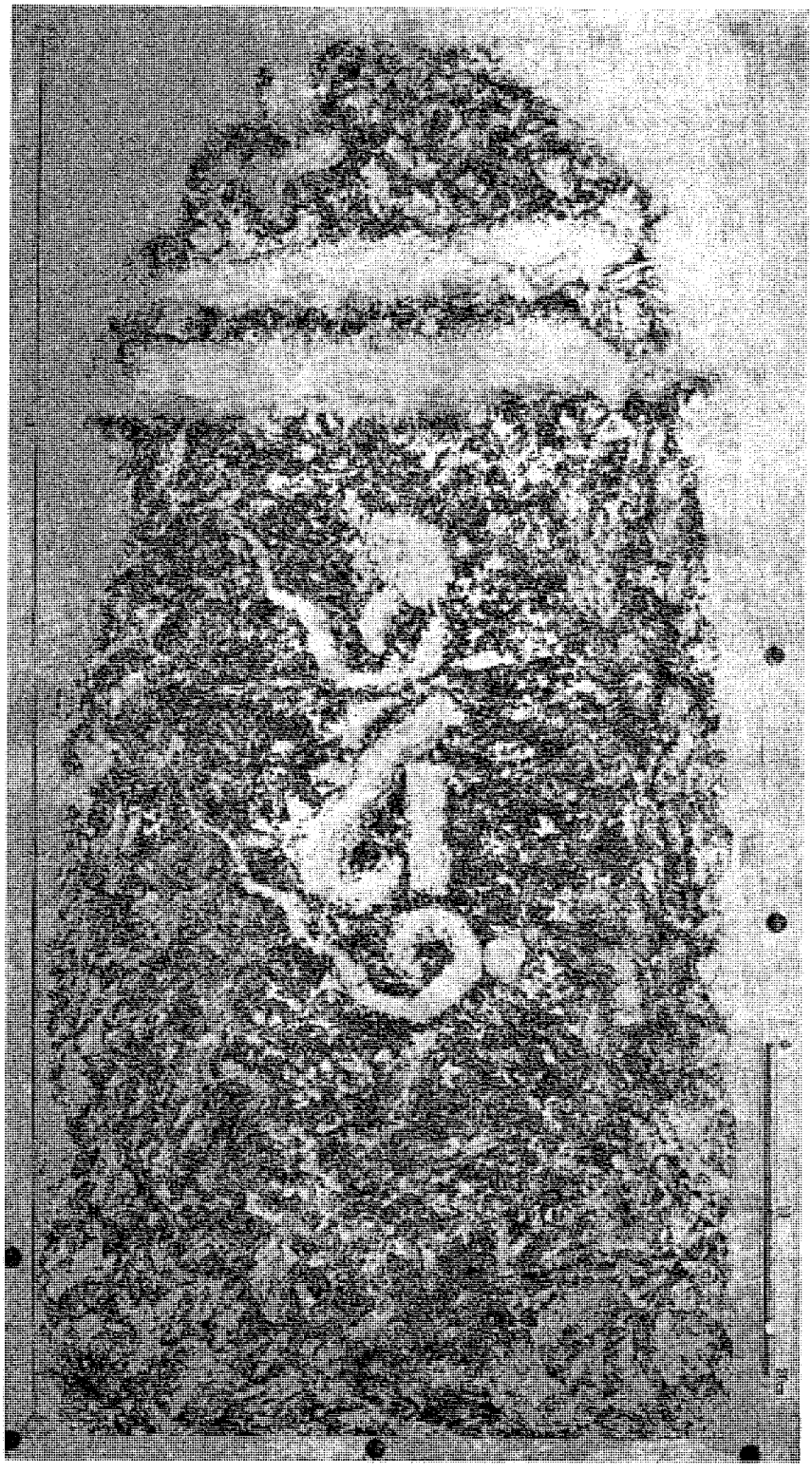
第23図　早　尾　六　地　蔵　拓　本



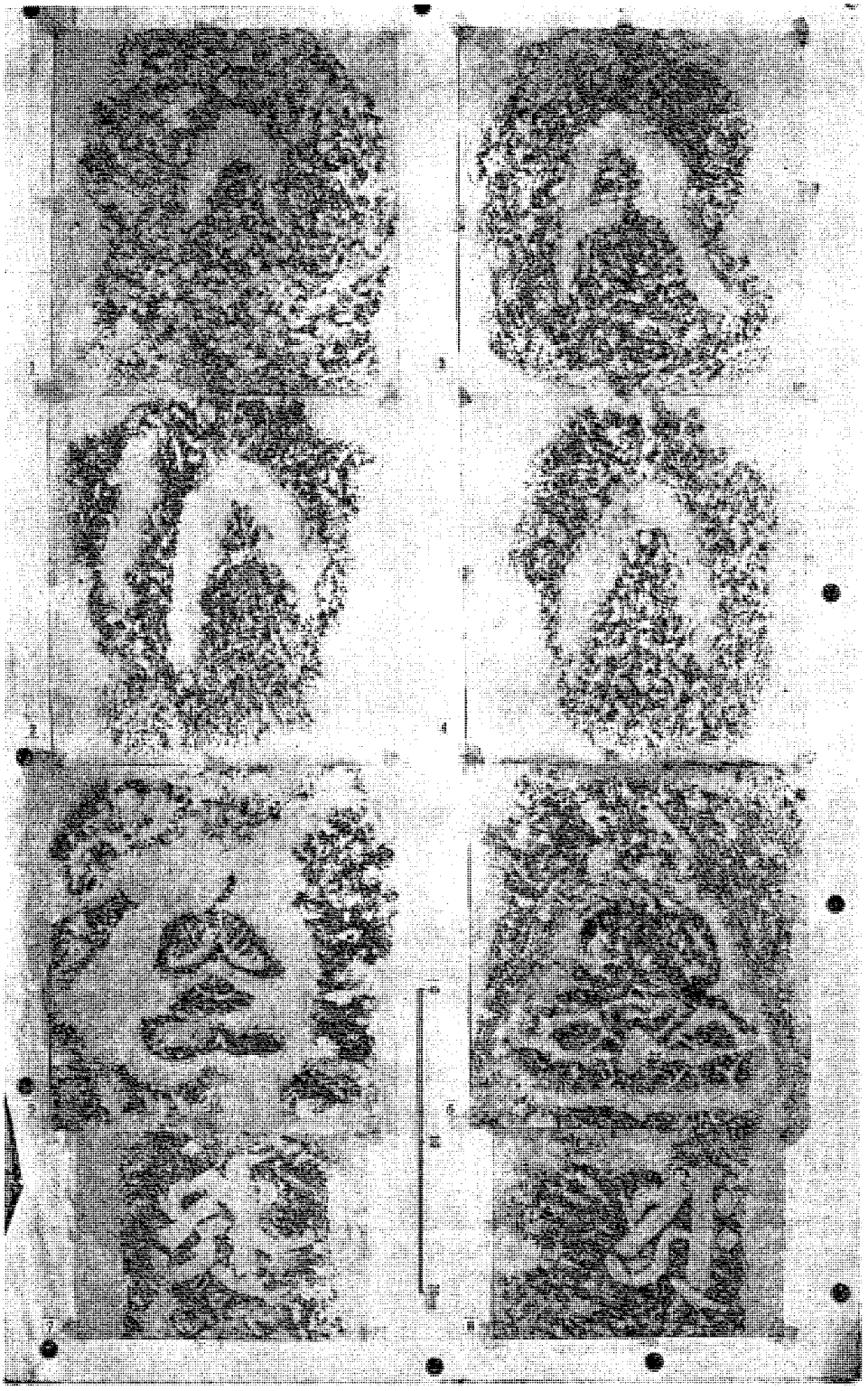
第24図　早尾六地蔵、今寺四方仏拓本（早尾１・２、今寺３・４）



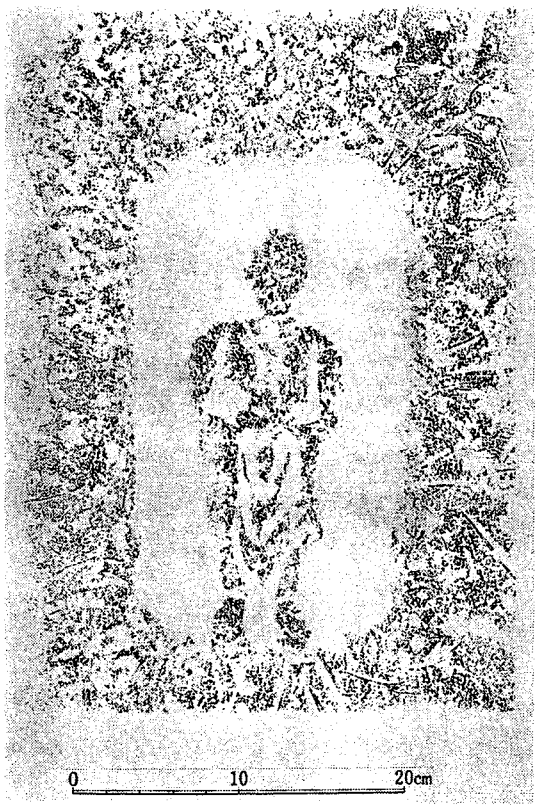
第25図　今　寺　四　面　仏　拓　本

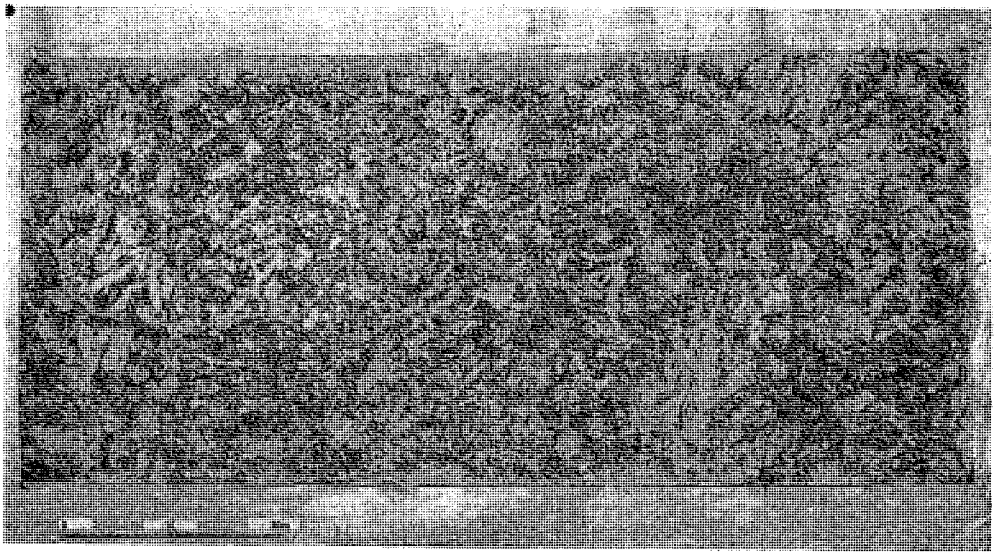


第26図　早　尾　大　日　如　来　拓　本



第27図　坊屋敷、山口四面仏拓本（坊屋敷１～４、山口５～８）





第28図　坊　屋　敷　四　面　仏　拓　本

Ⅲ

関外目遺跡 他

付1 関外目遺跡他

1. 関外目(せきほかめ)遺跡 (玉名郡南関町関外目)

本遺跡は大津山の西麓を南北に走る県道(南関一瀬高)の西側畑中にある。昭和41年九州縦貫自動車道文化財分布調査の際発見されたもので、石器片及び土師器片が採取されている。今回の調査は既に荒地化している道路予定地に、2箇所に試掘坑を設定し、南側を1×6mの第1試掘坑、北側を1×5mの第2試掘坑とした。

土層は各試掘坑とも違いはなく、第1層2～30cmの耕作土で第2試掘坑の方が若干深めであった。赤褐色強粘質土であり、その中から文化遺物の発見はなかった。試掘の結果土層層序の上から遺物包含層がなかった。いつの時代か地山のみ残して削平されたものと考えられる。しかし、今回の調査の際試掘坑周辺から円盤形石器と石鏃各1を採集した。円盤形石器は直径約5cm、厚み約1cmの粘板岩質のもので、縄文後晩期のものと思われる。また、石鏃は長さ約1.9cmでくり込みは深い。以上のように周辺から文化遺物が採集されることは、何らかの遺跡が所在したであろうことは確められるが、今回の発掘により包含層は既に失われていて、遺構として発見される可能性は極めて薄いものと思われる。 (平岡勝昭)

2. 本坂北経塚 (玉名郡南関町小原字今宿)

俗に地元では「藤藪ン塚」といっている。径約5m、高さ約1.5mの円墳の形態をしているが、調査の結果は古墳ではなく、供養的な意味をもつ塚ではないかと推測する。

塚は地山(第5層)を約30～40cm掘り下げ、その上に盛土(第Ⅰ、Ⅱ層)をしたものである。塚に直結する遺物はないが、第Ⅱ層下面より瓦器質の破片(2片)を検出したので、おそらく中世以降の盛土であろう。

なおこの塚の南約250mに塚があるが、盛土の上面から多量の一字一石の河原石を検出した。 (隈)

3. 桑水宝塔 (玉名郡南関町本坂)

水田の中にある湧水の横に建てられていたが、調査に着手した時はすでに東宮橋へ移転されていた。「クワノミズさん」(神水)として桑水集落の信仰対象となっているもので、毎年元旦に祭りをするとのことである。ばらばらの宝塔をよせあつめて作られている。台石に「大正

10年4月桑水氏子中」の銘がある。塔身に蓮花座と梵字が刻まれている。蓮花座と梵字はヤゲン掘りで、書体もしっかりしており、鎌倉から南北朝頃と思われる。ばらばらのものを組合せてあること、製作年代に違いがあること、湧水（神水）と宝塔とが結びつきにくいこと等から考えると、別の所にあった宝塔の残骸を大正10年に集めてきて、祀ったものであろう。ただし、大正10年銘のある台石はその時新しく作られたものかもしれない。もちろん、湧水に対する信仰はそれ以前からあったものであろう。（緒方勉）

4. 桑水洞穴（玉名郡南関町桑水）

本洞穴は昭和42年九州縦貫自動車道文化財分布調査の折発見され、洞穴遺跡の可能性があると報告されたものである。

阿蘇泥溶岩の崖下にあるこの洞穴は、洞穴の形体、及び台地上部に存在する縄文期遺跡等から考慮して格好の洞穴遺跡と考えられた。したがって、ここの調査では洞穴の立地条件を明らかにするための地形測量をすすめると共に、遺物包含層又は遺構を検出するため洞穴から前庭部にむかって基盤層に達する深土の試掘坑を設けることにした。

この洞穴は入口の幅約4.5m、奥壁までの距離は約48m、入口の高さ約2.3mを有する。試掘坑は長さ8m、（洞穴内2.3m）、深さ約2m、幅1.5mのものを設けた。

この試掘坑掘開では、相当ひどい湧水と共に洞穴内では落土に悩まされた。このため前庭部発掘による土層状況等も検討のうえ、洞穴内最深部まで試掘坑を延長することはとり止めた。

試掘の結果については、洞穴内の表土層の中から奈良期の燈明皿の破片かと考えられる土師器糸切底の破片が出た他、人工遺物は検出されなかった。洞穴及び前庭部基盤層の上に推積している土壌については土層の変化は認められるが、これも人為的なものでなく、この土地を構成している阿蘇泥溶岩の風化土及び剝離した岩の自然堆積と考えられた。このような洞穴の生成の原因は明らかでないが、今回の調査によって、この洞穴では人為的な遺構が殆んどないことが確認された。（杉村）

5. 牧野横穴（玉名郡菊水町江田牧野）

牧野横穴群は地元民の話では数十基あったとのことだったが、石切りのために大半が埋没して調査不可能であった。

かなりの量の石屑が堆積しているので人力ではとても無理のようである。従って工事と平行すれば、記録だけはとどめることができるのではないかと考える。

実測した牧野横穴12号（1～11は工事に直接関係しない）は、戦時中防空壕に使用したためかなり変形、拡張されている。復原数値は長さ約2.5m最大幅2.4mでやや縦に長く、床面から

天井までの高さ約1.7～1.8mである。天井部には軒を表わすとみられる掘りこみが認められる。（高木正文）

6. 駄の原A・B遺跡（鹿本郡鹿央町西駄原）

事前調査の際、Aでは縄文晩期土器片、Bでは中世遺物がわずかではあるが表採によって得られた。今回中心部と推測される部分に試掘坑を設定して調査した。調査は昭和45年2月9日～3月8日の間、延べ6日間の期間に、試坑抗（2m×1m）をAで10坑、Bで12坑設けて発掘した。その結果、A、B両遺跡とも包含層が完全に破壊され、表採による遺物は破壊された包含層からの移動した遺物であることがわかった。層序の状態は、Ⅰ層表土（耕作土）Ⅱ層撹乱層（Ⅲ層と耕作土の混合）、Ⅲ層黒色土、Ⅳ層栗色土、Ⅴ層赤土（地山）の順になっている。遺物はⅢ層とⅣ層の上面に認められるが、きわめて少ない。文化期は表採の結果と変らずAが縄文晩期と中世である。（隈、杉村彰一）

付2　横　山　古　墳

1.　横山古墳（鹿本郡植木町有泉横山）

この古墳は、九州縦貫自動車道建設予定地にかかる文化財の予備踏査の際、原口、古財氏等により新しく発見されたものである。

県教育委員会においては直ちに現地を調査し、保存について数回の文化財専門委員会を開き検討してきたが、諸事情のため、ついに記録、移転保存の止むなきに至り、緊急発掘調査を実施する計画を立て、県縦貫自動車道文化財調査団に調査を依頼した。

調査担当者

坂本経堯　原口長之　乙益重隆　緒方勉　古財誠也　高野啓一　平岡勝昭　佐藤伸二　上野辰男　桑原憲彰

調査は、昭和44年8月23日から9月3日にかけての第1次調査を皮切りに同年中に第2次、第3次の調査を実施した。調査の詳細については目下準備中であり、本報告はその概報である。

2.　地形と環境

〔1〕位置　熊本県鹿本郡植木町大字有泉小字横山842（所有者日本道路公団及び　角田ツク氏）「1：50000　NI—52—11—7　たまな」図幅において図幅の東端から6.4cm、北端から20.5cmの雑木林の中に横山古墳が立地している。

〔2〕地形と文化的環境　阿蘇外輪山の西麓に続いて展開する台地を肥後台地とよび、その主体部をなすのが合志原、黒石原、植木台地地域で大体において100m～40mの標高をもつ火山性洪積台地であるが、植木台地面に飛石のように散在する小丘群の間のやや平面をなした山地内に横たわるのが横山古墳である。なお、横山古墳の西方には壮大な横穴式複室巨石墳の「鬼のいわや」古墳と円墳三基があり、岩野山には横穴式複室墳の露出がある。

横山古墳の南東、石川山には、41年、果樹園造成のため緊急調査を実施した9基の古墳（石川山古墳群）が点在する。この石川山の東方合志原は、縄文時代から古墳時代に及ぶ豊かな古代文化の集積地である。

また今回の調査期間中に、横山古墳の周辺で当古墳と同時期の住居址、また時代は下ると思われるが年代不明の蔵骨器、及び大字塚園に前方後円墳1基が発見された。

3. 遺跡と遺物

〔1〕 墳丘および施設

この古墳は、原口氏らの予備測量調査によると全長38.5m、前方部19.5m、後方部直径29m、前方部高さ3m、後円部高さ4.5mを有する小型の前方後円墳である。

墳裾は、前方部北側が削られている以外は、あまり変形は認められない。ただし、後円部墳頂は、天井石が落下し石室が埋没しており、本来の盛土の高さは、これよりさらに上まわるであろう。

墳丘は、山の自然の起伏の高地の部分をうまく利用しわずかの盛土で構築されている。石室と比べるとその規模も小さく、後期古墳の特色を備える。盛土の部分には版築が認められる。

玄室は、後円部封土のほぼ中心に設けられ羨道部は西側封土端に口を開いている。玄室はすでに古く盗掘にあい、玄室南壁は破壊され天井石は殆んど床面に接し斜に落ち込んでいた。

後円部には列石遺構が存在する。この列石は玄室の中央部を中心として半径9mの一重の円を描くが、羨道の部分、および前方部と後円部の接続点では切断される。列石は後円部に密で前方部寄りに疎である。佐賀県勇猛山4号墳や7号墳にみられるものと同意義を持つ遺構であると思われる。

その他墳丘には、葺石、埴輪等は認められなかった。また周溝についても後円部の東西両墳裾に2本のトレンチを入れ追求したが、確認できなかった。

〔2〕 羨道部とその施設

本古墳における羨道部の方向は、古墳の主軸方向にほぼ直角をなし、南に開口している。羨道部奥行約6m、幅1.1m、天井までの高さ1.55mを有する。

羨道部における側壁構築の手法は、玄門より約3.3mのところまでは床面に巨大な板石をたてて腰とし、その上部は割石を内にわずかに持ち送りにして積みあげている。羨道前端部には腰石を使用せず下部よりの割石の小口積で、天井はない。また羨門よりおよそ3mのところに、二次、三次的遺構と推定される閉塞遺構が認められた。

安山岩質の板石を立てて閉塞し、板石の外側から数十個の石灰岩の乱れ積みによる補強がなされていた。この閉塞遺構下部には、10～15cmの厚さに小石と白粘土がつめられているのが確認された。

なお、この閉塞遺構付近から羨道部は、北の方向に曲がりはじめ、入口周辺では中心部より1mあまりのゆがみを生じている。

〔3〕 石室および石屋形

石室は、石灰岩を主とし、一部に安山岩を交えて構築し割石小口積の横穴式単室墳である。玄室における側壁構築の手法は、下部より割石をゆるやかに持ち送りに積み、天井部がやや狭くなったところで1枚の巨石を持ってふさぎ天井とする。割石の乱れ積みは粗雑である。

天井はすでに落下し、床面近く斜めに埋没していたが、復原すれば、石室内の高さは床面より３ｍ以上を有していたことがわかる。

南側壁の大半は盗掘者によって破壊され、下段の割石数個がわずかにその名残りを留めているにすぎない。

他の部分の積み方に比べると玄室角の部分の石組にはとくに考慮が払われており、内部に傾斜する四方の石壁を巧みにきめている。

3.8ｍ×3.8ｍの隅丸のほぼ正方形の床面を持つ玄室は三区からなり、割石を敷きつめた中央墓道をはさんで、左右に屍床があり玄室奥壁に沿って石屋形が存在する。

石屋形の石材は凝灰岩および安山岩よりなるが、石の切り方および組み方は極めて粗雑で、とくに石屋形奥壁など、１枚石のみでは不足する部分を後方から安山岩質の板石でおぎなったり、北側壁を外から切り石で支えたり工作をしているのが注目される。凝灰岩の１枚石よりなる屋蓋のみは丁寧な加工により偏平楕円形をなし、石材の削平も比較的整斉である。

石室を構成する石材は、側壁の場合、周辺に産出する石灰岩の割石がその殆んどを占めているが、なかには他の墳墓の石材を転用したと思われる丹塗りの安山岩も数十個もまじって使用されている。石屋形には凝灰石、安山岩が用いられていた。

床面は、すべて安山岩の敷石が施されていたと思われるが、完全に残っているのは北側屍床と墓道のみで、南側屍床、石屋形奥床は盗掘の際破壊されたものか、一部石材が残存しているに過ぎない。墓道敷石下は白粘土が張られていた。敷石には一部丹の施されているものがある。

〔4〕装飾文様

本古墳の装飾は大別して全面に丹を施した単彩色部と幾何学文様に分けられる。

前者としては、石屋形の屋蓋裏、玄門近くの羨道上に架した巨石の下面、床敷石、墓道割石、側壁の一部に認められる。とくに屍床、墓道敷石には丹の彩色の有るものと無いもの、裏面に彩色の施されているものなど煩雑に混じり合って敷石を形成しているが、他の古墳からの転用の結果かも知れない。考慮の余地がある。

後者としては、石屋形軒縁、石屋形左右袖石、墓道を区切る南北の二屍床の石障、および南側壁沿いの石障、天井石等に施されている。

石屋形軒縁の場合、浅い線でふち取った三角形連続文が横ならびに走っている。もともと赤青白の三色を連続して塗り分けていたと思われるが、剝落がはげしく現在では赤色しか識別できない。石屋形左袖石には、中心にさかさまの状態の双脚輪状文が描かれ周囲の余白は赤青白の三角文によって埋められている。同系の文様は熊本県の国指定史跡釜尾古墳や福岡県に２、３例認められているものである。同袖石の小口部にも三角形連続文が施されているが、彩色の順は赤青白の循環を繰り返している。

一方、右袖石は重圏円文、三角文、蕨手文等から構成される。やはり左袖石と同様描象的図

形で、重圏円文の場合も先の三角文と同様、中心から赤青白の循環を繰り返す。

三角形連続文は先にも述べたように、石屋形正面石障、左右屍床の墓道側石障に施されている。これら三角文の描かれる石障は、各々１枚石ではなく数個の石材が互いに重なり合って構成されているが、石の継ぎ目に関係なく三角文は連続し、色は沈線をもって隣りと区別される。

その他、右屍床の壁側石障には大小の三角文が丹一色で描かれている。連続等の統一性はないが、リズムを感じさせる文様である。褪色がはなはだしい。

石屋形奥壁にも、左下方床面すれすれにわずかながら赤の三角文が識別される。装飾文様のかつての存在を推察せしめるが剝落がはげしく茫洋として判明できぬのは措しい。

天井石にも一部丹の三角文がわずかに認められる。

〔5〕遺物

出土遺物については、その出土場所からみて石室内出土遺物と封土中出土遺物の２つに大別することができよう。

イ．石室内出土遺物

装身具　金環11　勾玉３　管玉２　丸玉小玉類約200

鉄　器　鉄鏃類86　刀子６　金ばり装具４　馬具類（轡２、鐙鞍１、尾錠２、飾金具21）

須恵器　高坏　坏　提瓶　盤　甕　甕

土師器　壷　高坏

その他　砥石

早い時期に盗掘を受け撹乱されており、発掘時の位置が葬送時における原位置とは考え難いが、まとまった遺物が出土したのは石屋形裏、南屍床石障と石壁間隙、および北屍床、墓道等であった。とくに北屍床、参道から多くの副葬品が認められた。

石屋形内床からは、わずかな骨片以外なんらの遺物をも見い出し得ず、破壊のはげしい南側屍床も２、３の遺物の出土を数えるにすぎなかった。

石屋形裏は人のいり込める程度の間隙があるが、ここより多数の鉄鏃が出土した。殆んどが、いわゆる柳葉式とよばれるもので刃先が一定方向に揃っている点から、一括たばねて副葬したもので葬送時の位置を保っていると思われる。奥壁石積の間から獣骨の下顎骨が出土した。

南屍床石障と石壁との間隙から須恵器４個分（大型高坏、高坏、坏、壷）の破片が一括して出土した。

北屍床からは多量の人骨片が出土した。腐蝕がひどいが下顎骨、歯などから少なくとも３体以上の遺体が互いに違いに埋葬されていたものと思われる。とくに、墓道側石隙に沿っては人骨片の密集がはなはだしく追葬の際に人骨を掻きよせた形跡がうかがえた。石屋形よりに、金環８個、小玉170個、管玉１個、羨門側から金環３個が出土した。

墓道からは、鉄鏃、刀子を主とした遺物が出土したが撹乱がはなはだしく、原位置とは認められなかった。石屋形内床、南屍床から盗掘者によってかき出されたものであろうか。

その他、玄門左袖石小口下に高坏2個が置かれていたのが注目された。羨道部からは閉塞石周辺より大小の礫2個、須恵器提瓶、閉塞遺構積み石間隙より馬具の鐙靼1個が出土した。

ロ．石室外出土遺物

須恵、土師を主とする土器類であるが、出土場所は羨道入口左封土中、羨道入口周囲、および羨道入口右墳裾などである。とくに右墳裾の場合は、故意にわられ一括まとめて埋納された形跡がある。出土場所から三つのグループに分けることができる。須恵器の高坏、坏、壷等が多い。

小　　結

以上、本古墳の立地、遺構、遺物の概要について述べたが人手不足と、相次ぐ土木工事による遺跡の破壊、保護対策、緊急調査に追われ遺物、装飾文様、古墳の編年、背後社会等についての考察の余裕を失った。実測図などの整備と共に本報告書において万全を期したい。

事後の経過概要

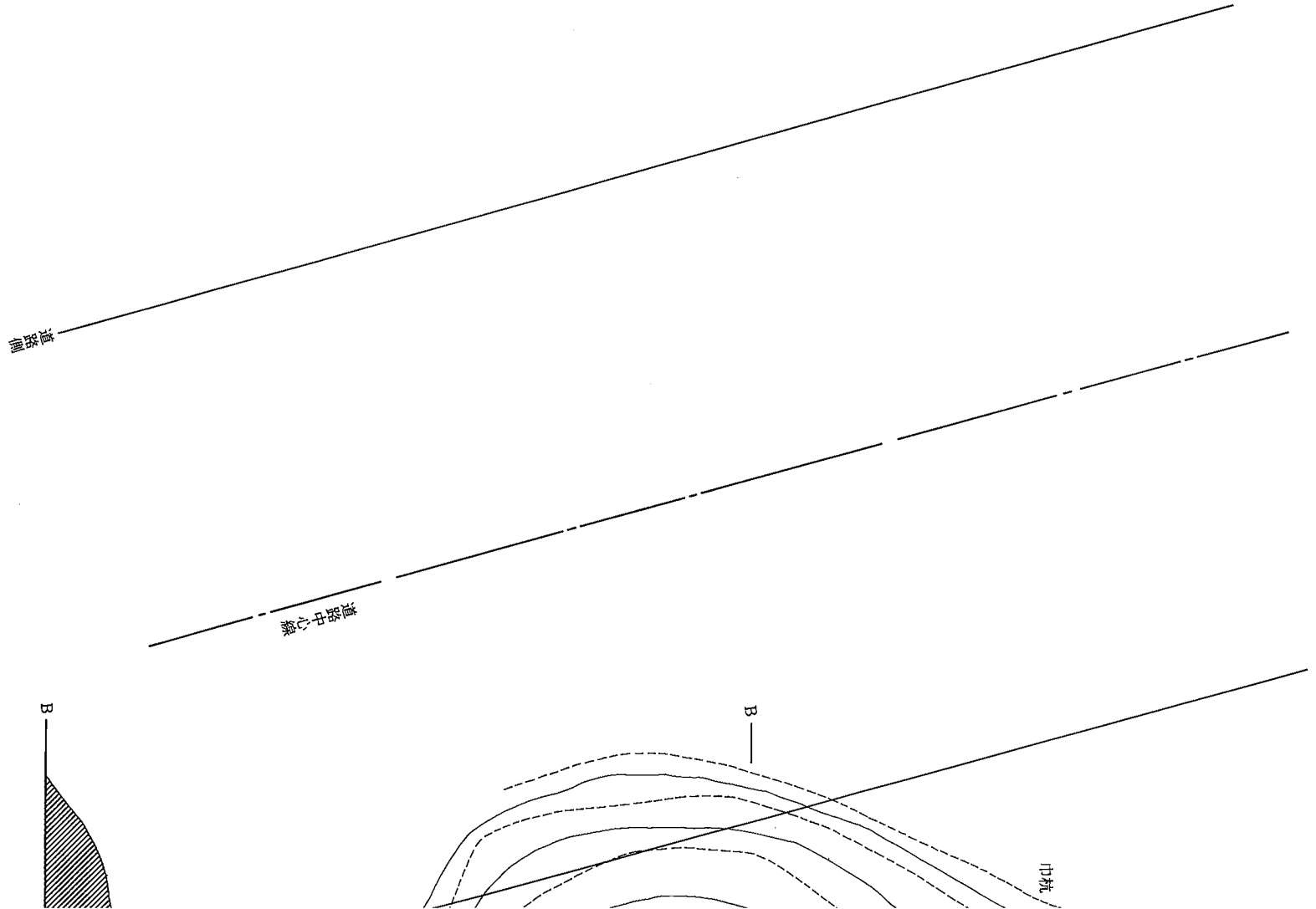
期日に追われ、人手不足に悩みながら、まがりなりにも第3次調査を終了したのは、第1次調査から3カ月も経過した11月も終わりに近づいた頃であった。九州縦貫自動車道、植木―託麻間の工事は進み、山地を開鑿しつくし、当古墳を残すのみとなり、この時点においてはすでに本古墳の運命は記録、移転保存という事態に立ち至らざるを得ない状況にあった。

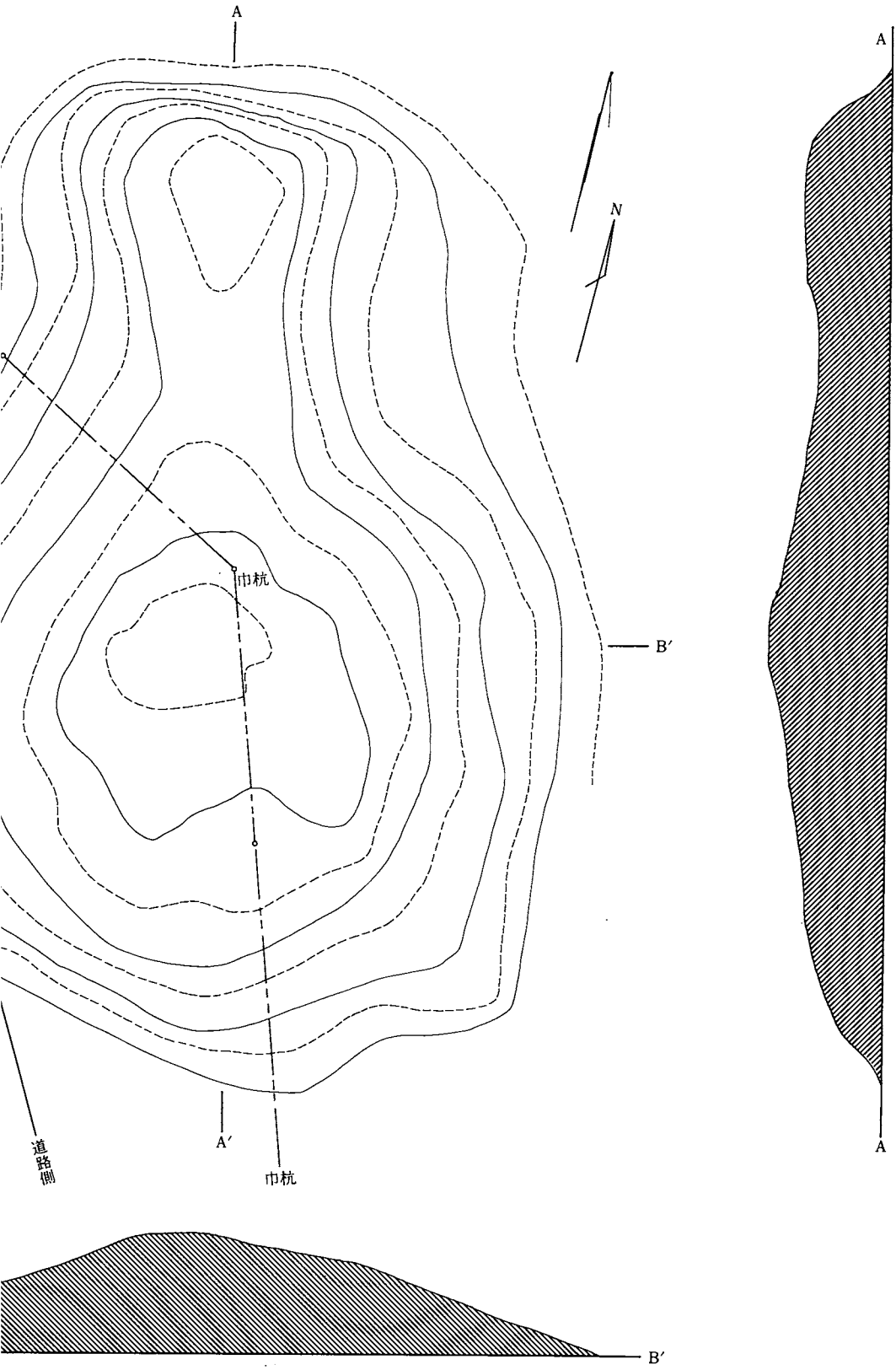
県教委としては、移転保存を前提として、文化庁の文化財調査官の横山浩一氏や東京国立文化財研究所の岩崎友吉氏の来熊をあおぎ、今後の措置に関しての指導助言を受けることにした。

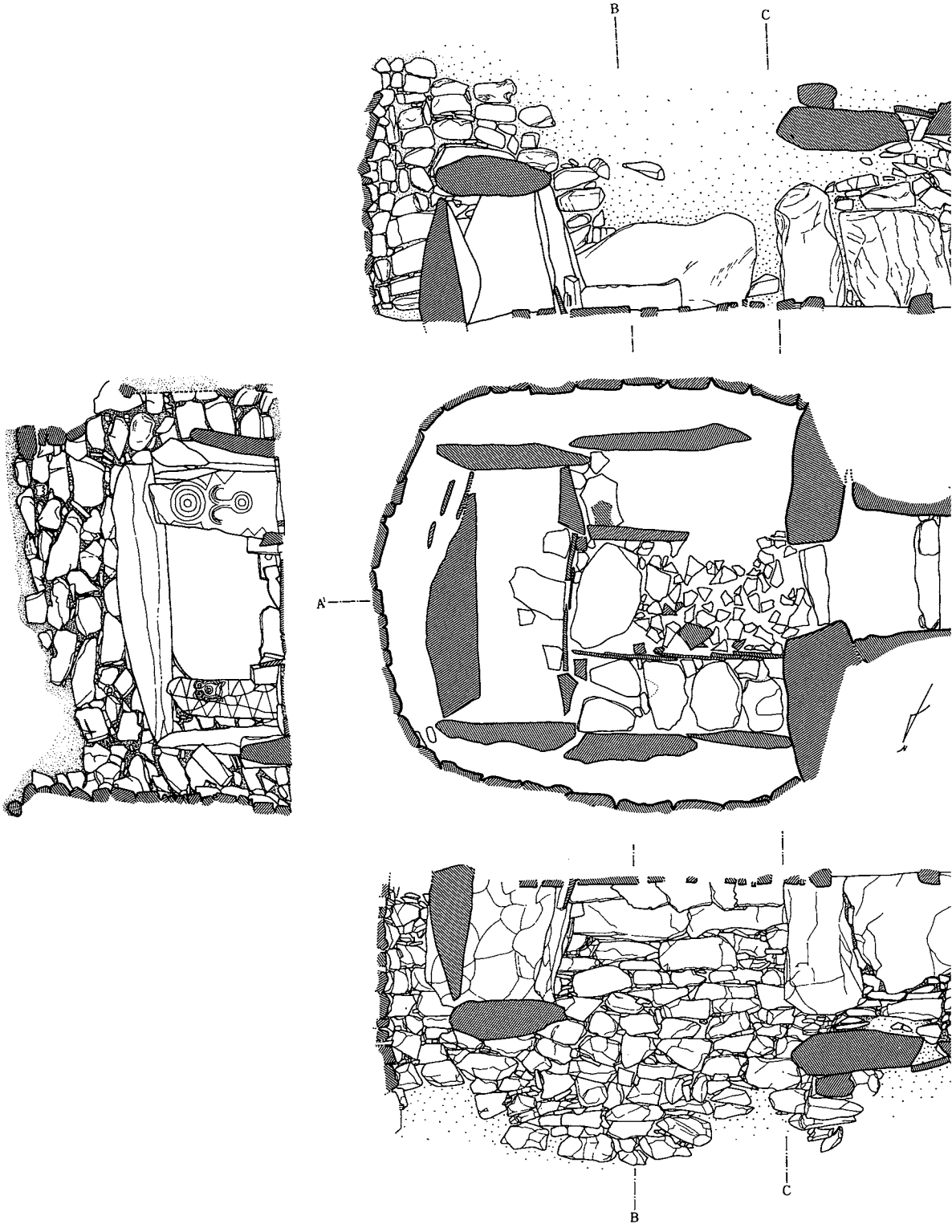
11月25日、岩崎室長が来熊、基礎資料の収集に引き続いて、装飾文様保存についての打合わせを行った。12月9日、岩崎室長、樋口技官が再度来熊、装飾文様の剝落を防ぐための薬品加工と紙張り作業が2日に渡っておこなわれ移転保存への道が一歩前進した。

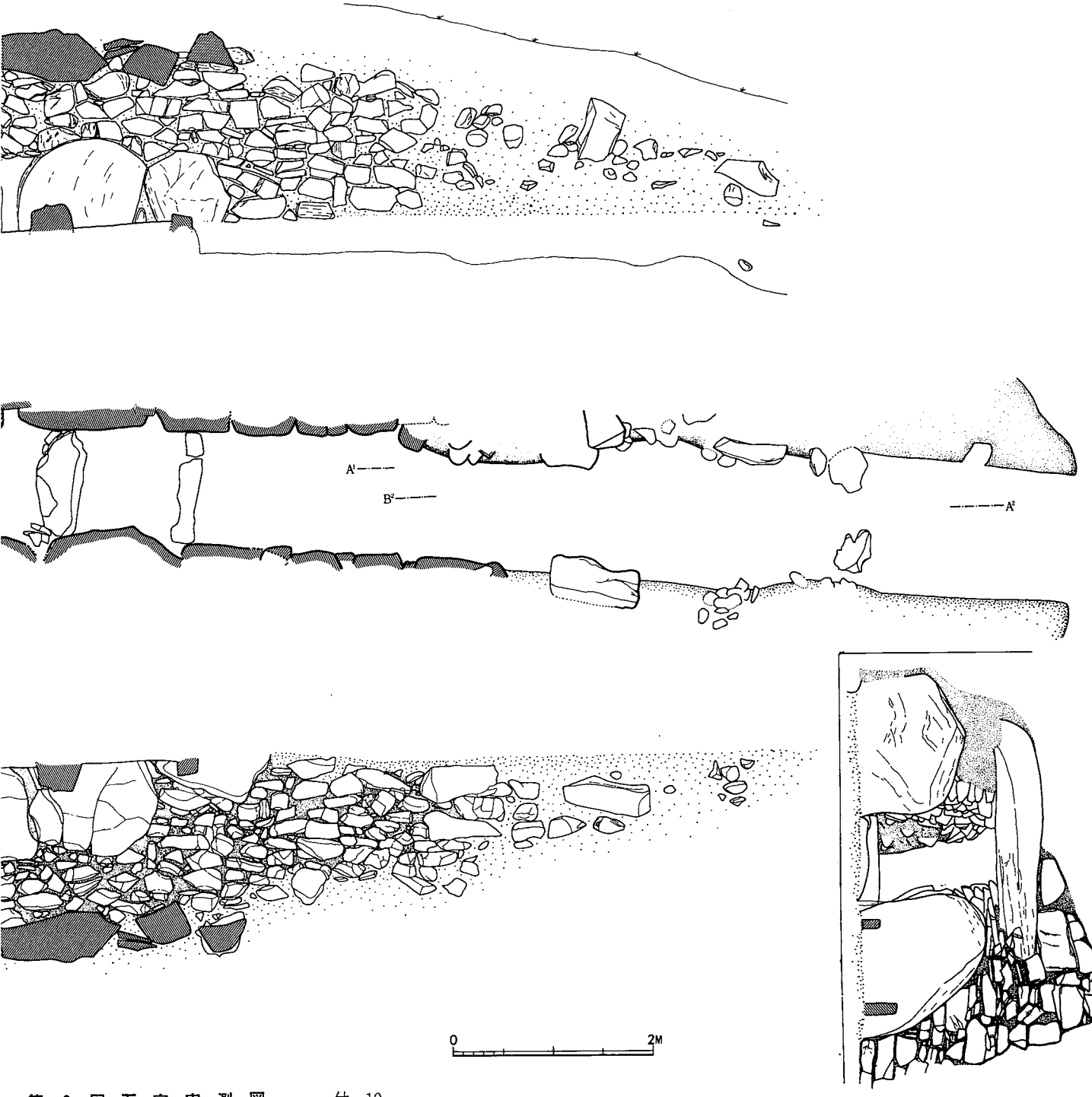
12月11日、装飾石材をエバーソフト包装、羨道部から解体作業を開始、機械力を導入し、同17日には無事解体を終了した。石材はすべて、熊本県立図書館敷地内に新しく建てられた収納庫へ格納され、復原の日を待つことになった。前方後円墳で装飾を持つ古墳は稀少である。

熊本県で横山を加えて6基、福岡県で5基、佐賀県に1基を数えるのみで、九州他県にみられない貴重なものである。復原場所は現在のところ未定であるが、適当な個所を見つけ、早急に復原にこぎつけたい。　　（上野辰男、桑原憲彰）


道路側
道路中心線
B
B
巾杭
(熊本県立第二高校考古学部測


A
N
巾杭
B′
A
A′
巾杭
道路側
A
B′
0
10
20M


B
C
A
C
B



第 2 図 石 室 実 測 図　　付 10

図　　版

清水古墳

遺跡全景（北より）

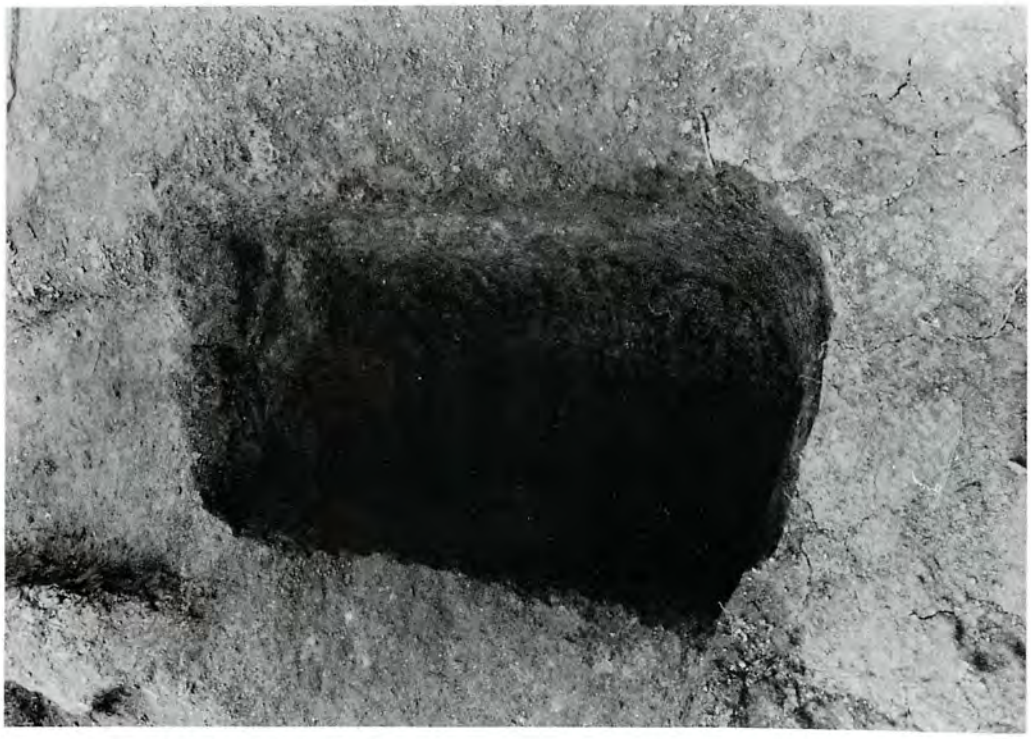
トレンチ

図版　2

ピット群全景（南西側より）

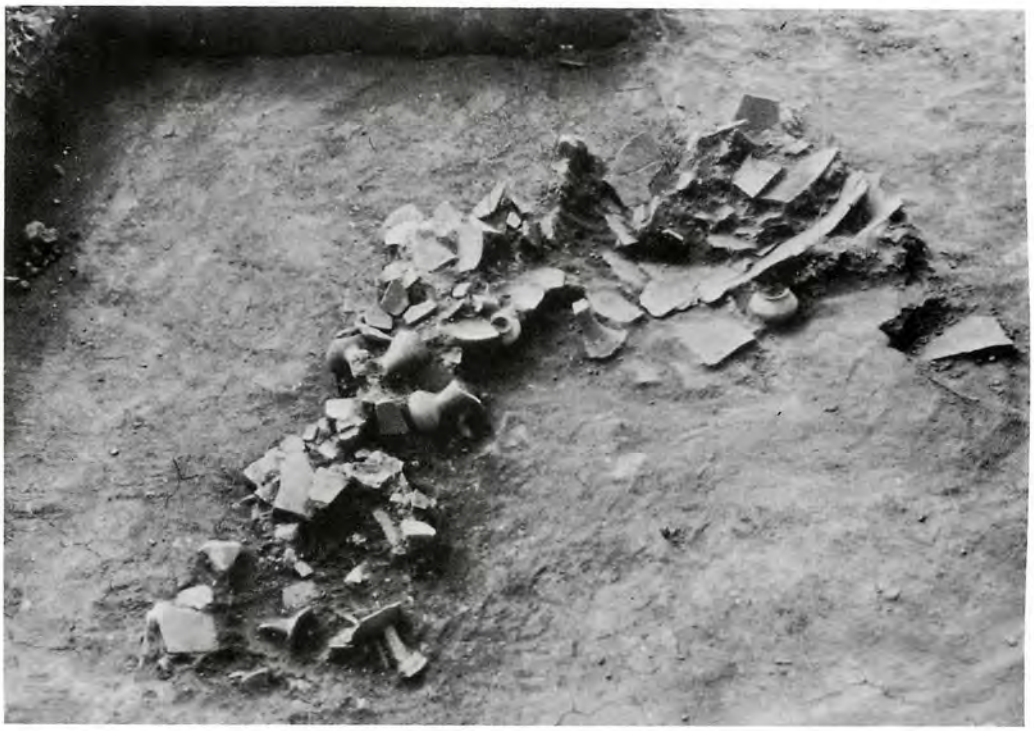
ピット群近景（北東側より）

第5ピット検出状況（北東側より）



第7ピット検出状況（北東側より）

図版　4



土器溜（古墳周溝？）

清水１号古墳（前面）

清水1号古墳（左手が羨門）

玄室内の遺物出土状況

清水１号古墳玄室内遺物出土状況（右屍床）

玄室内遺物出土状況

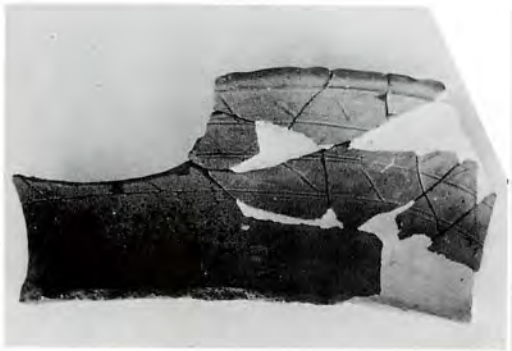
土器溜出土の須恵器

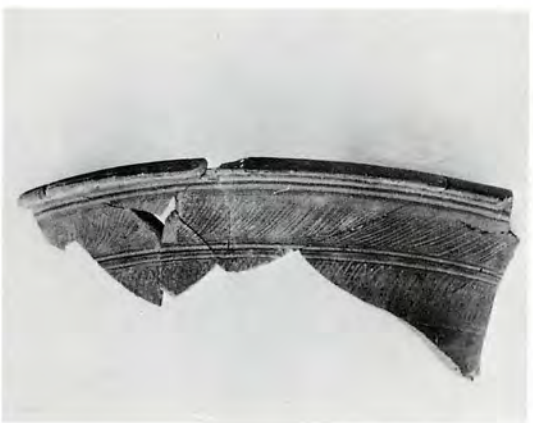
図版　8

土器溜出土の須恵器

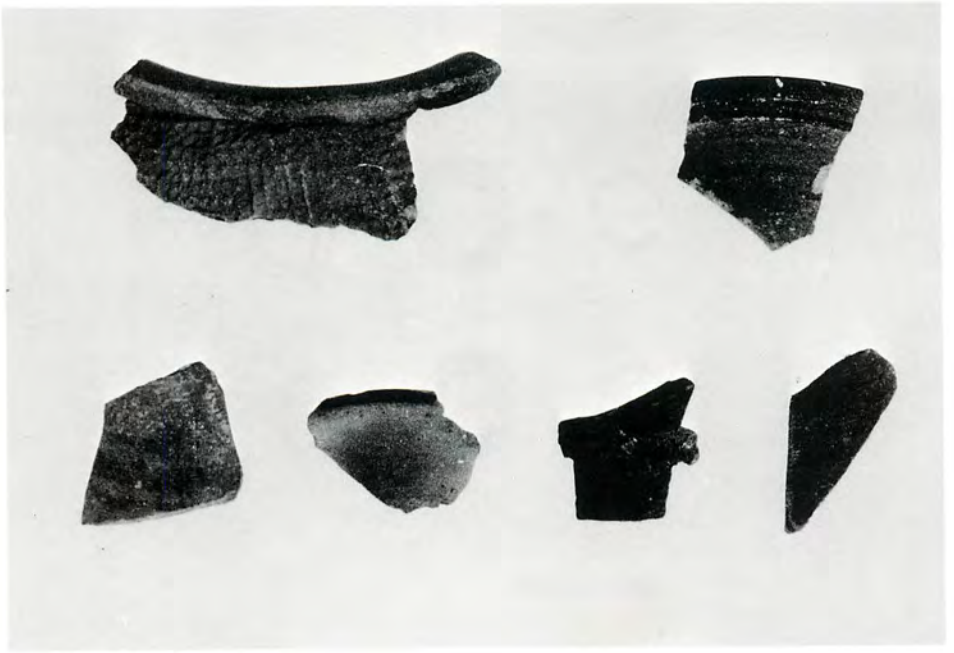
土器溜出土の須恵器

図版　10

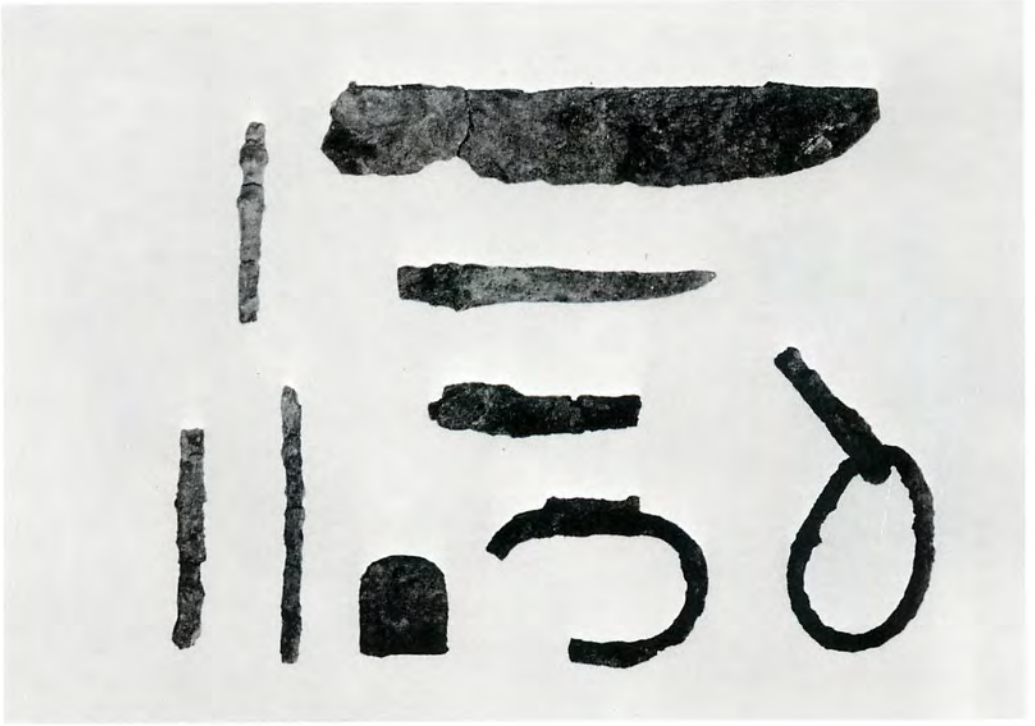




土器溜出土の須恵器

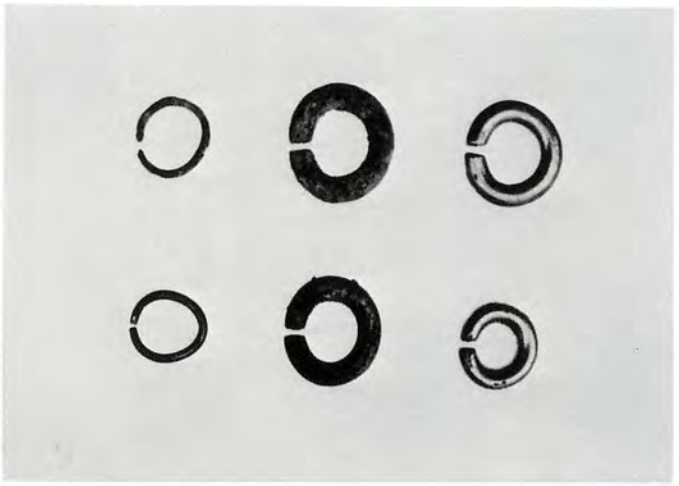


土器溜出土の須恵器



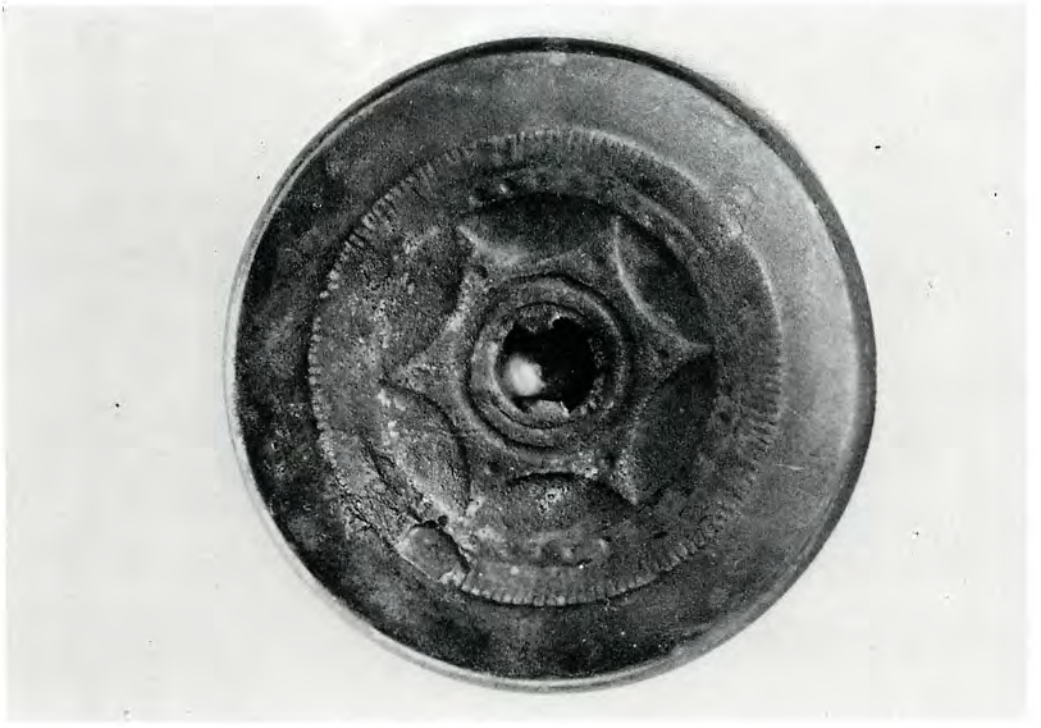
清水１号古墳出土の鉄器

図版　12



清水１号古墳出土の耳飾

清水１号古墳出土のふいご羽口



門前１号墳出土内行花文鏡２面（宮内庁提供）

門前1号墳出土獣首鏡・管玉・勾玉（宮内庁提供）

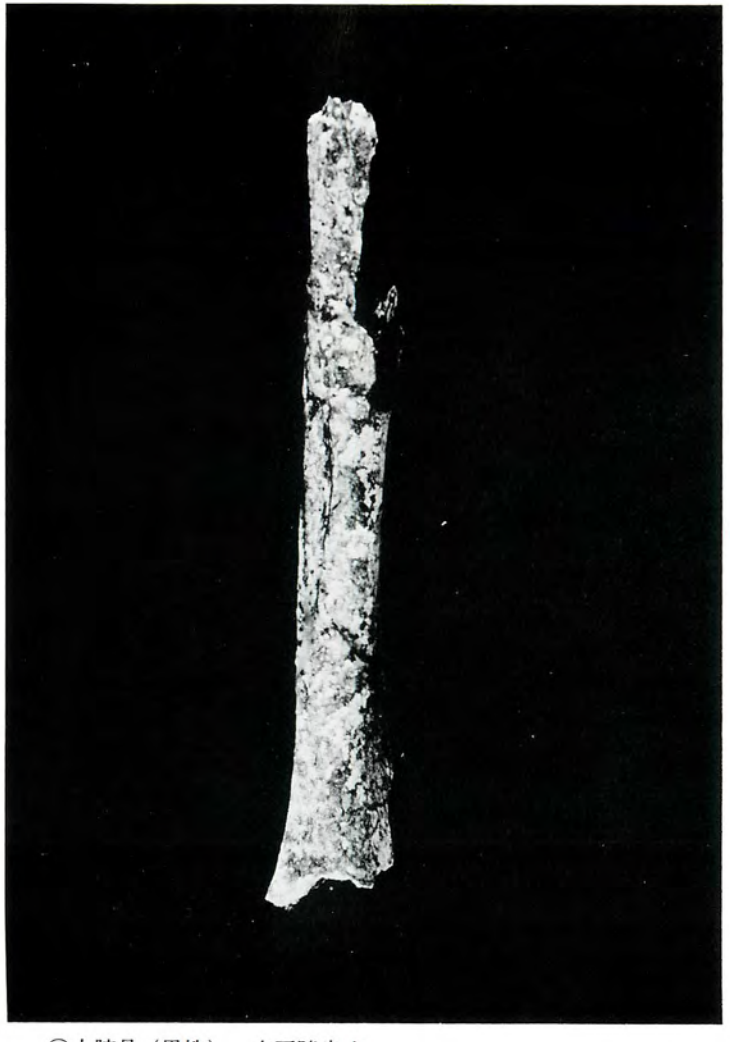
門前古墳装飾石材

図版　16

①頭蓋冠（女性、壮年）　右石障出土

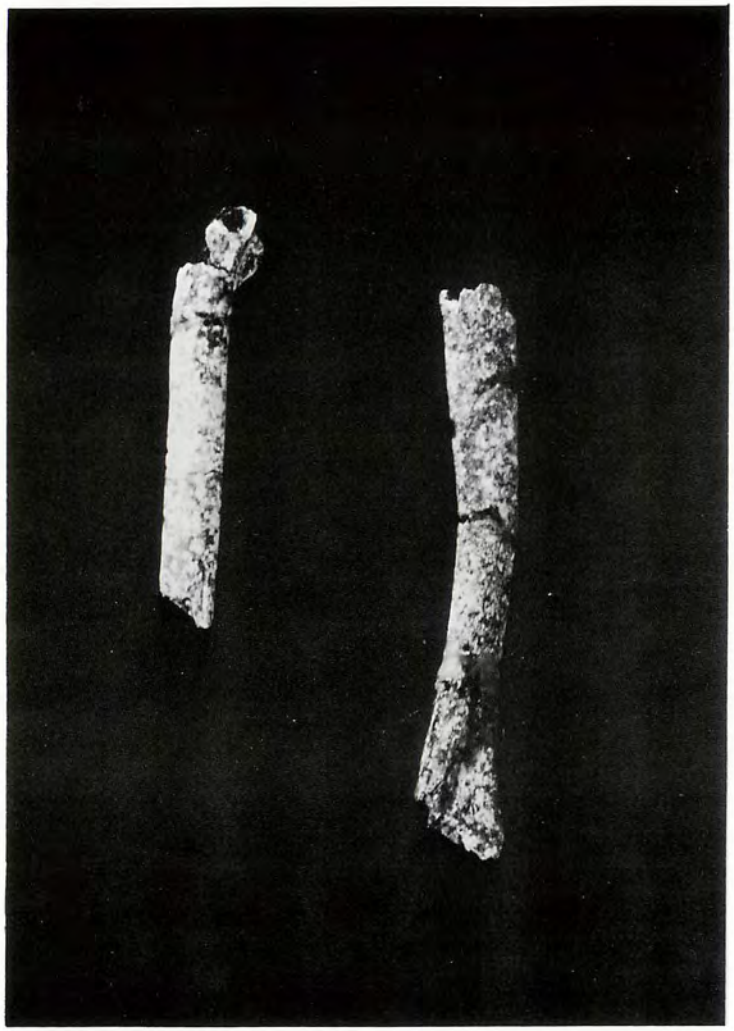
②下顎骨上面（女性、壮年）　右石障出土

③下顎骨前面（女性、壮年）　右石障出土

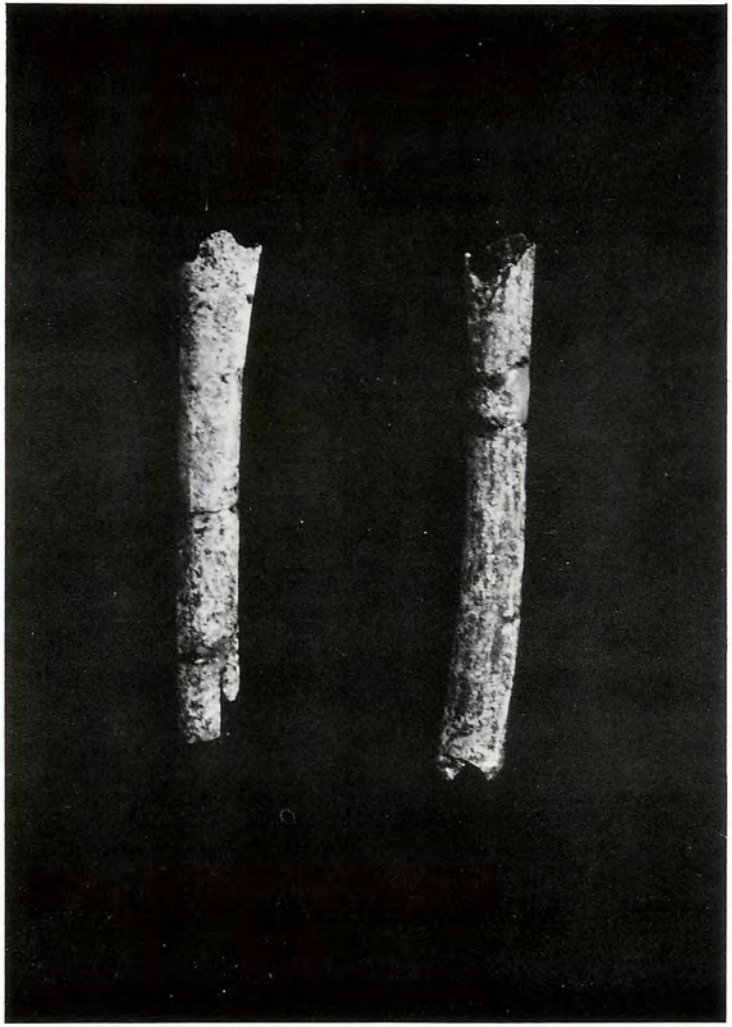


①上腕骨（男性）　右石障出土

②大腿骨（男性）　右石障出土



③大腿骨（女性）　右石障出土



④大腿骨　攪乱部出土

野寺遺跡遠望

1．発掘前の頂部

2．発掘終了後の頂部

3．第Ⅲトレンチ拡張部

野寺遺跡発掘状況

1．第Ⅳトレンチ

2．第Ⅲトレンチ

野寺遺跡発掘状況

図版　22

1．検出状況

2．発掘後

第Ⅱトレンチ検出の焼土

1．焼土中の木炭および木灰の出土状況

2．白磁×$\frac{1}{2}$

3．磁器×$\frac{1}{2}$

4．鉄釘×$\frac{1}{1}$

5．銅片×$\frac{1}{2}$

検出遺物

図版　24

林源衛門墓

林源衛門墓近景（北から）

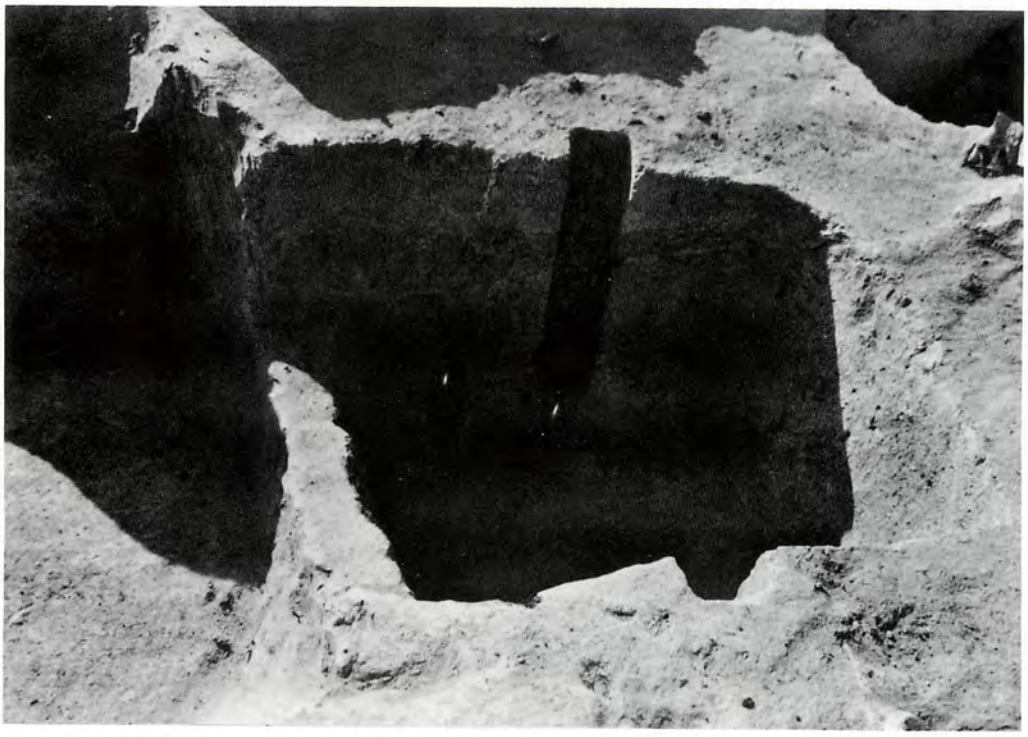
林源衛門墓近景（東から）

林源衛門墓近景

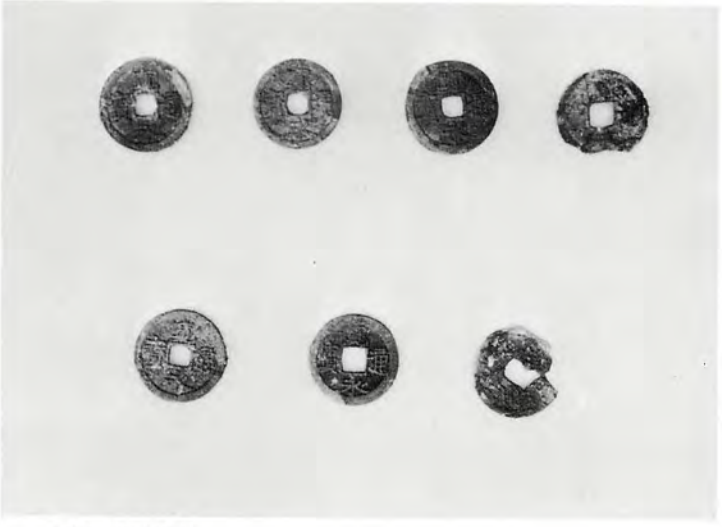
石組と板碑（現状）

板碑

石組と板碑



土壙（東から）



土壙内出土遺物

土壙及び出土遺物

今寺四方仏

早尾六地蔵

林源衛門墓周辺の塔碑

早尾大日如来楚字

早尾大日如来

林源衛門墓周辺の塔碑

腹巻田大明神

河窪眼鏡橋

林源衛門墓周辺の塔碑

坊屋敷四方仏

坊屋敷四方仏

林源衛門墓周辺の塔碑

坊屋敷五輪塔

坊屋敷四面仏

林源衛門墓周辺の塔碑

図版　32

山口四方仏

林源衛門墓周辺の塔碑

今寺十一面観音

今寺観音　毘沙門

林源衛門墓周辺の観音

今宮観音

今宮観音

林源衛門墓周辺の観音

今宮観音

今宮観音　顔面ディテール

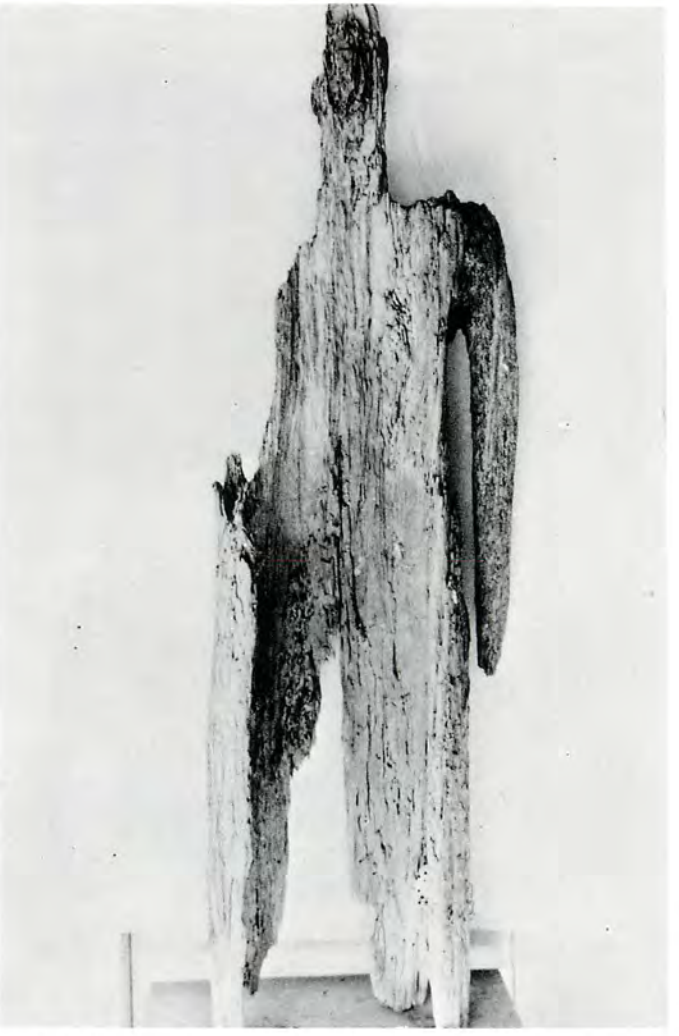
林源衛門墓周辺の観音

今宮観音

今宮観音

林源衛門墓周辺の観音

今宮観音



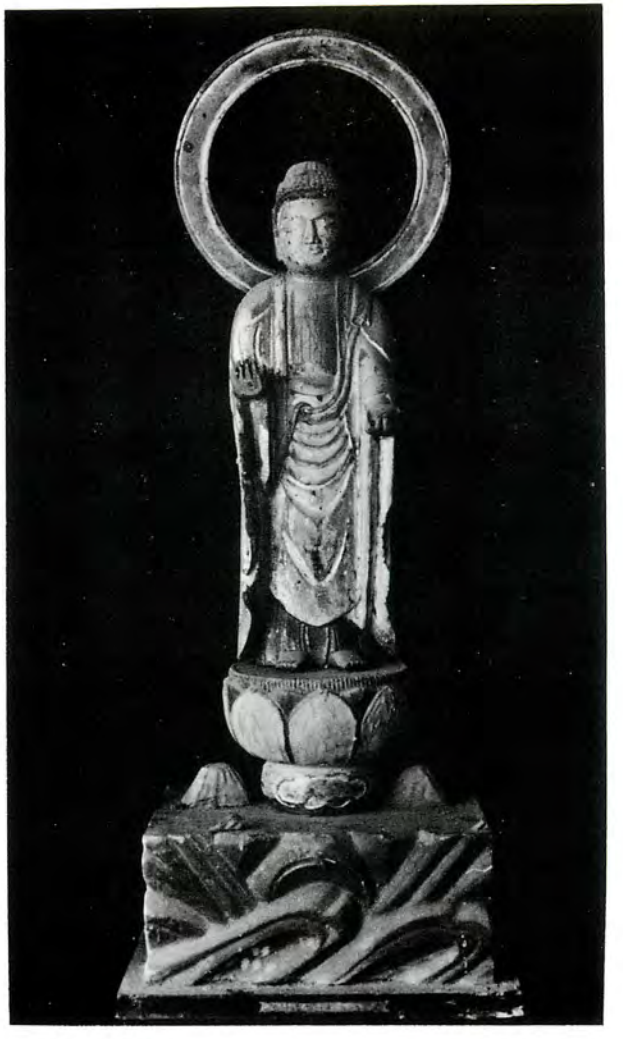
今宮観音

林源衛門墓周辺の観音

大王神社の焼神像

大王神社神像

山口古仏



山口薬師如来

林源衛門墓周辺の古仏

山口薬師如来

椿阿弥陀仏

林源衛門墓周辺の古仏

横山古墳

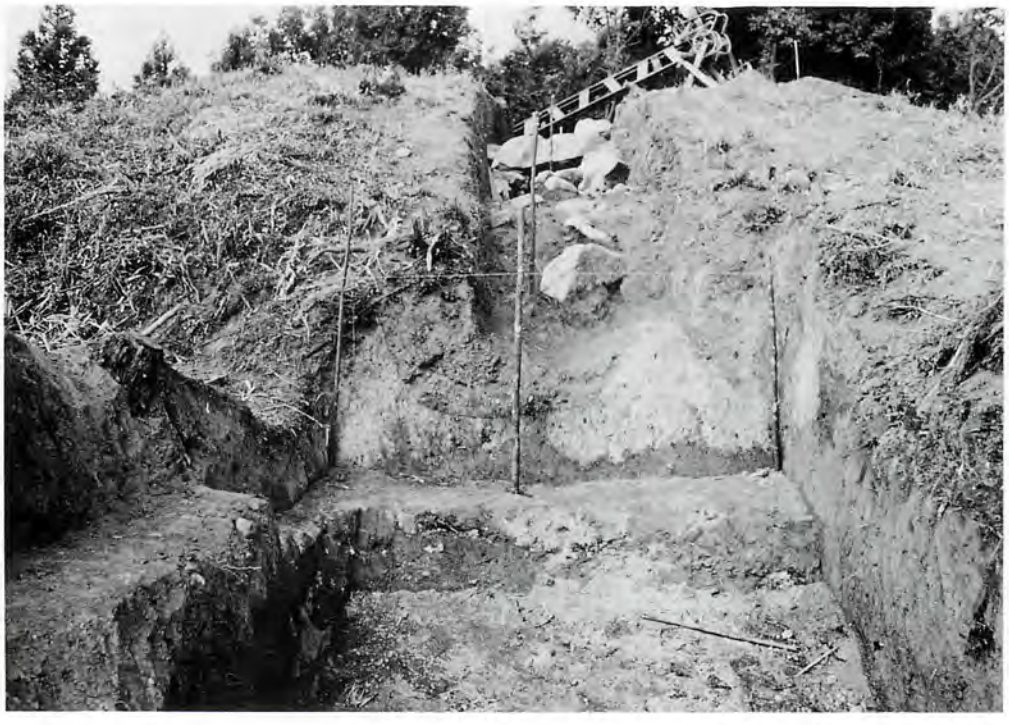
調査前（西南から）

道路完成直後

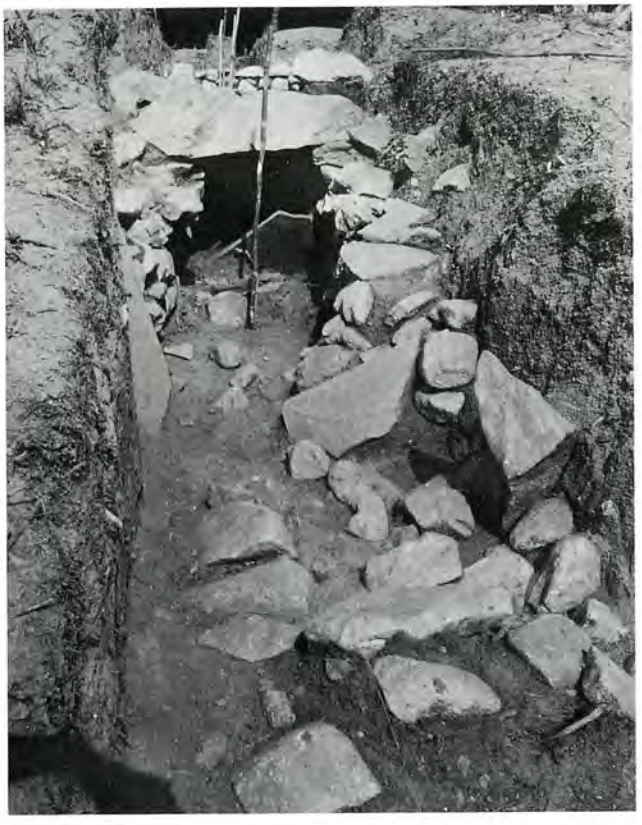
横山古墳景観

図版　42

後円部中央発掘溝



後円部発掘状況

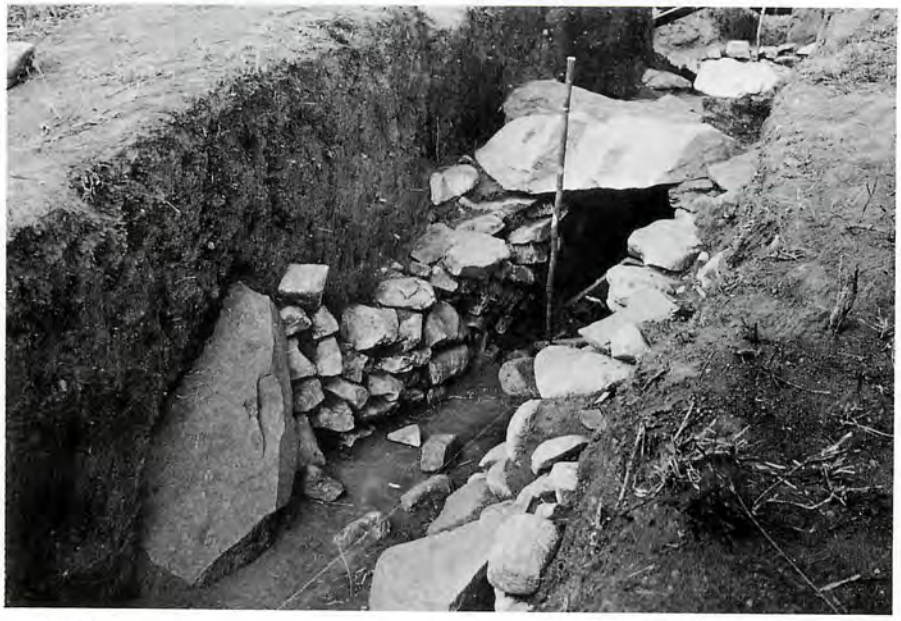


羨道部

石室及び羨道部

図版　44

羨道閉塞状況



羨道部

羨道部状況１

墓道より石室を望む▶

◀ 羨道より墓道を望む

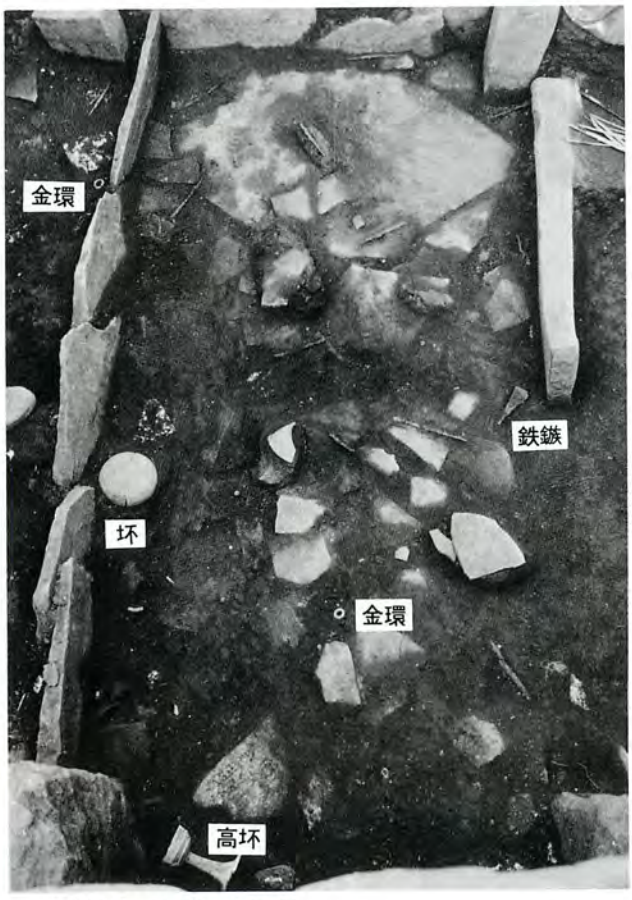
羨道部状況２．

羨道左側壁

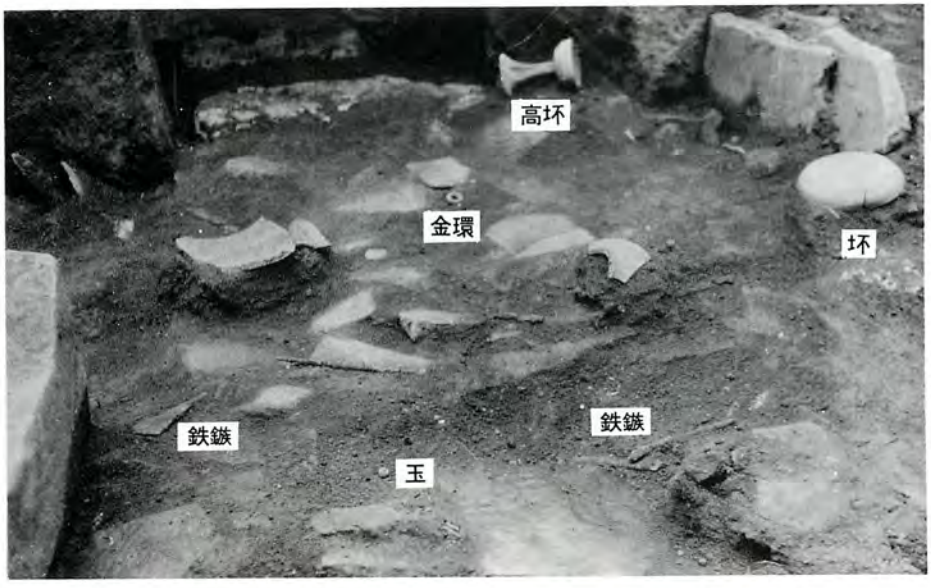
右側壁

羨道正面

羨道部状況３．



中央通路（手前が羨道部）



中央通路

石室内遺物出土状況

奥室

奥壁上から羨道方向

古墳石室１．

右屍床　右側壁石積は失われている

手前が左屍床　先が中央通路

古墳石室２．

奥室正面

左側壁上から（右上の石材は天井石と思われる）

古墳石室３．

石室をとりまく土留め石の列

墳丘の遺物出土状況

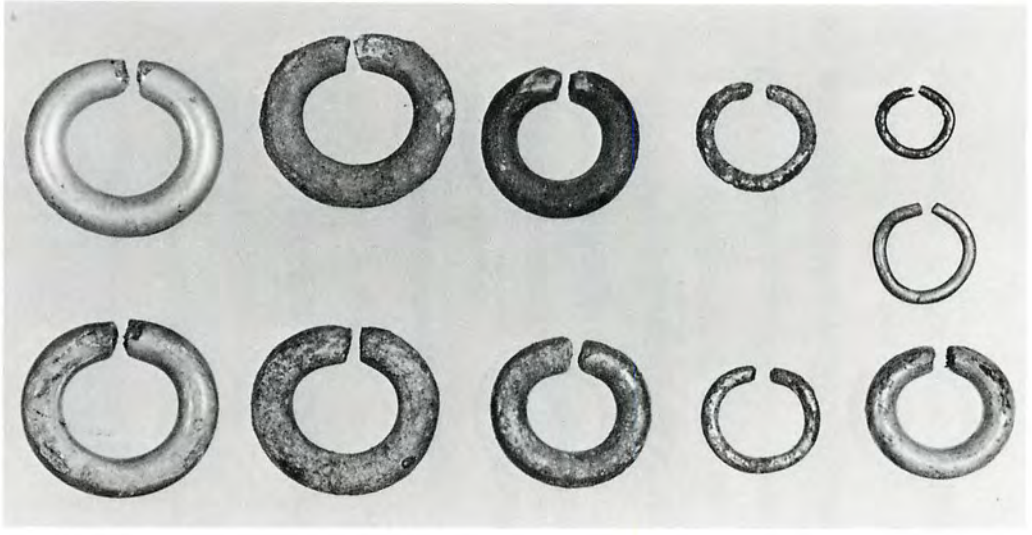
右側壁外側に散乱する石材

墳丘（土留めと遺物出土状況）

図版　52

石室・羨道全景

玉類



金環類

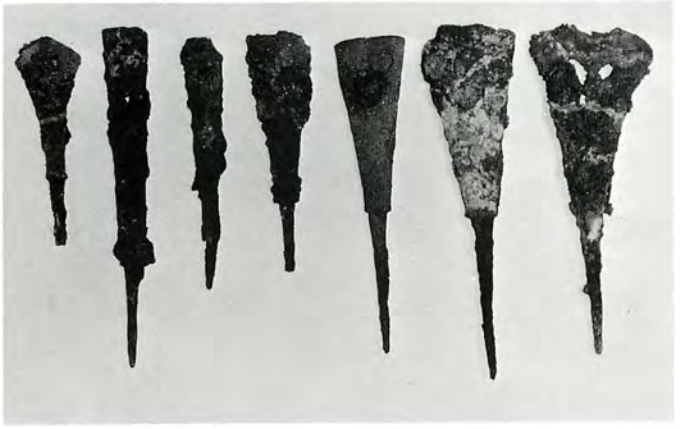
出土遺物（装身具）

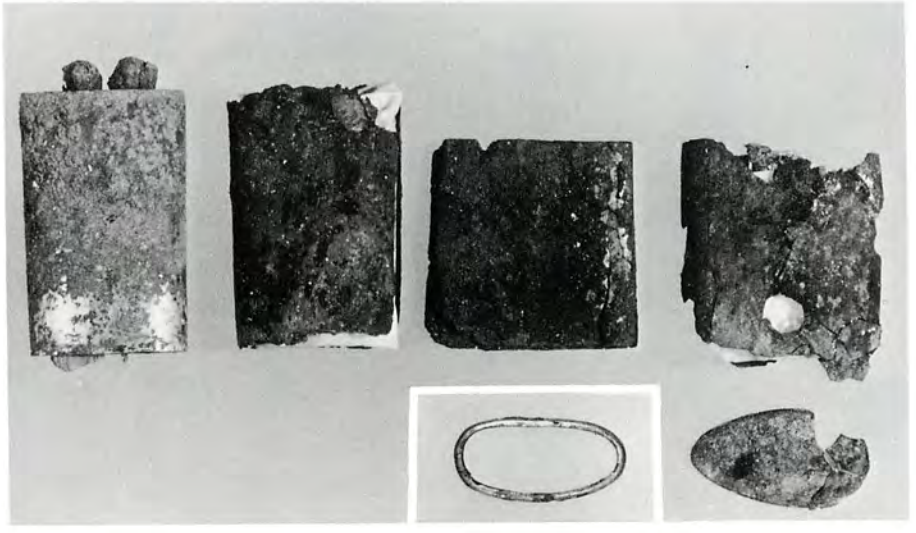
図版　54

鉄　鏃

鉄鏃

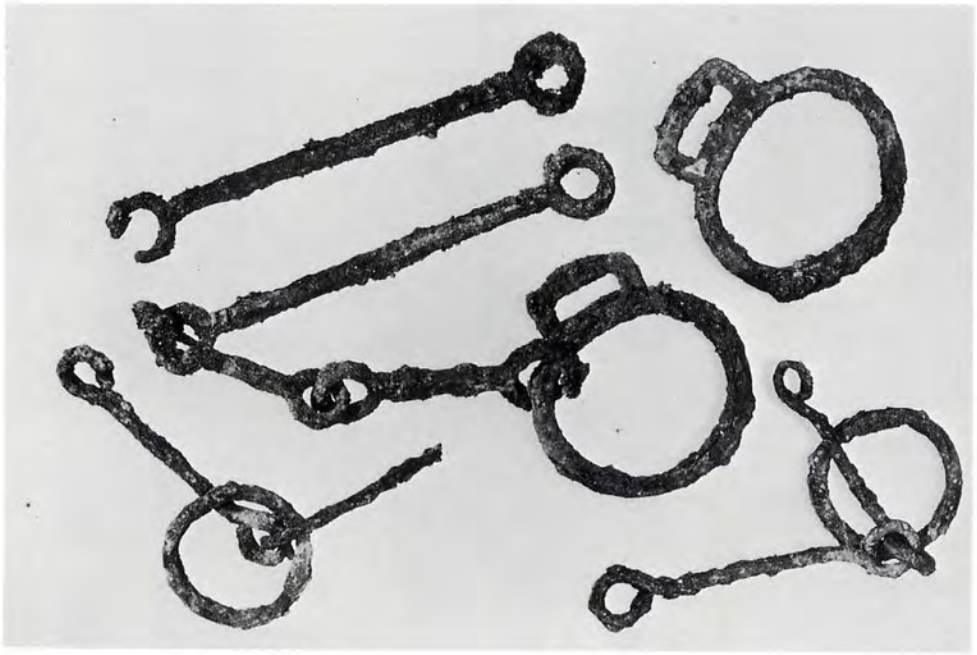
刀子

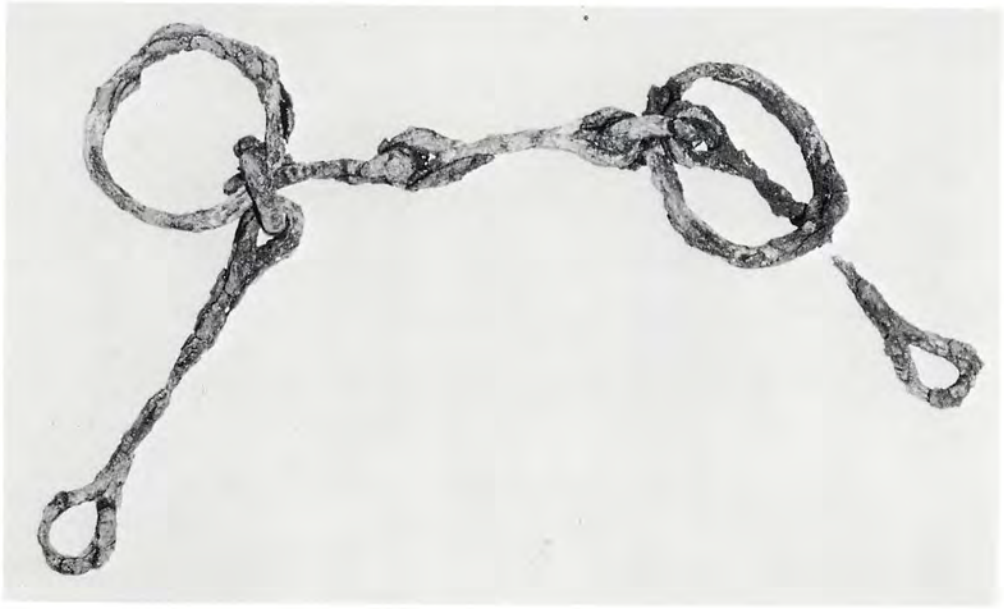




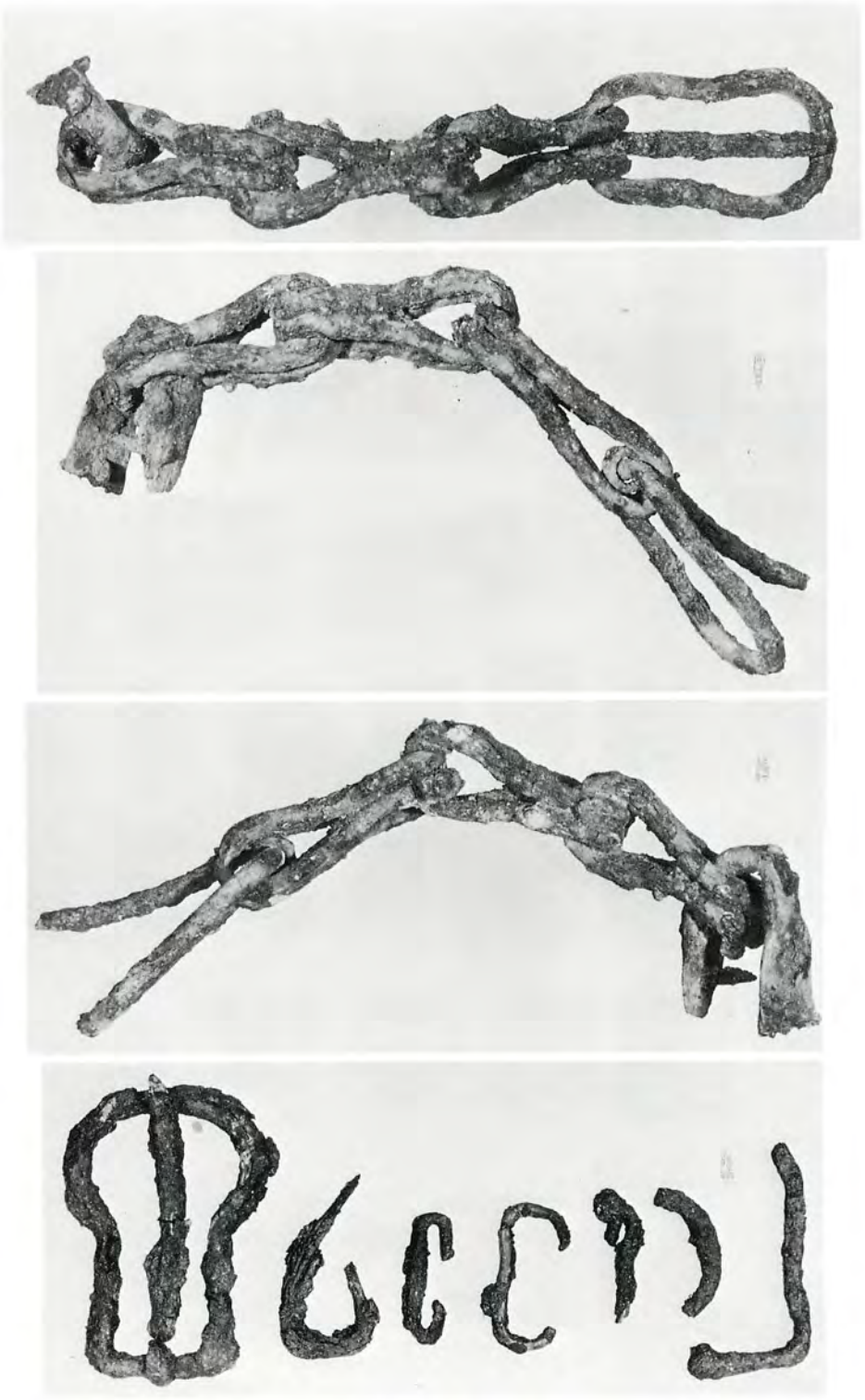
刀装具

鉄鏃・刀子及び刀装具



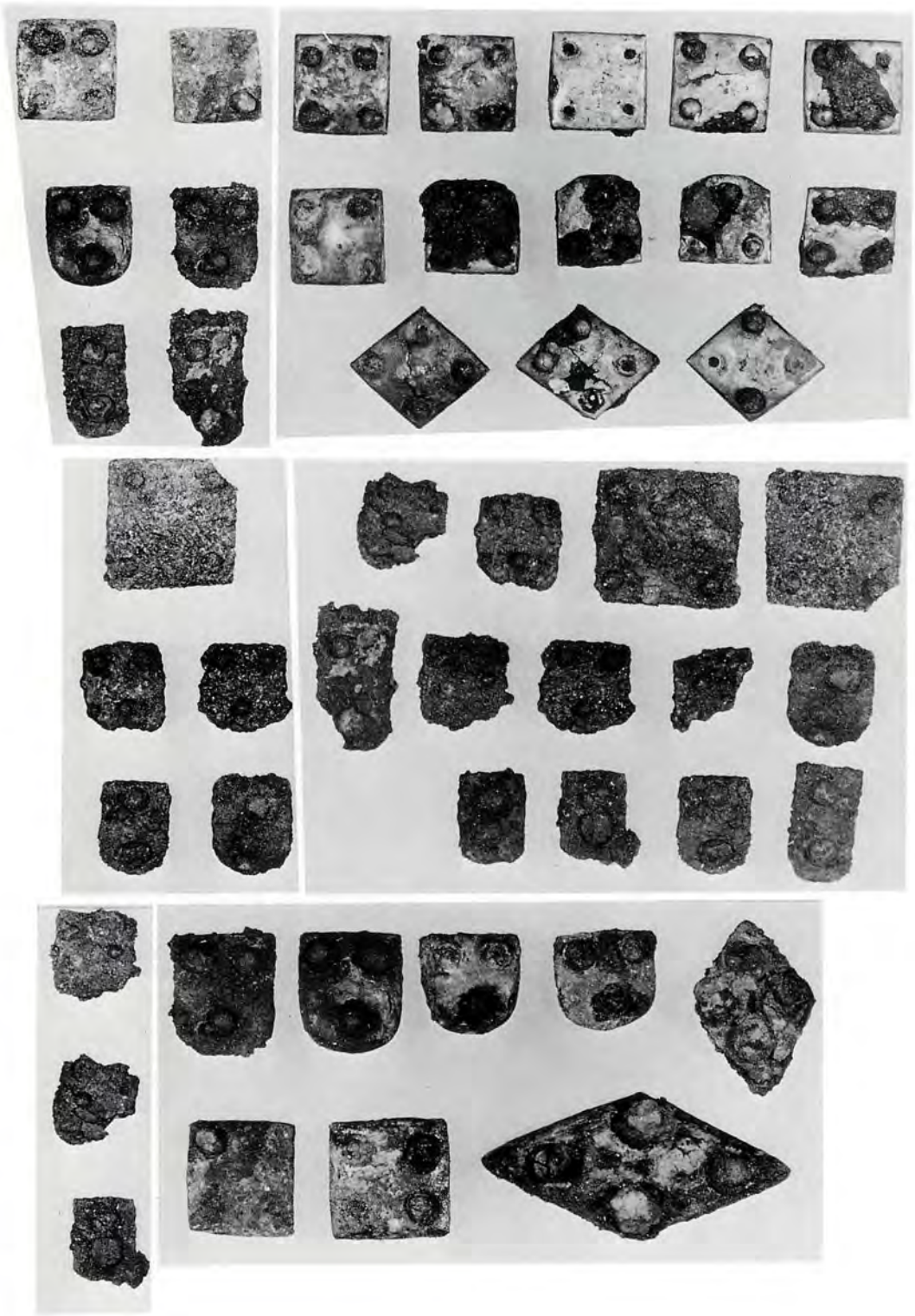


馬具１（轡他）



馬具２（くさり金具他）

図版　58



馬具３（留金具）

須恵器（高坏）

土師(高坏)

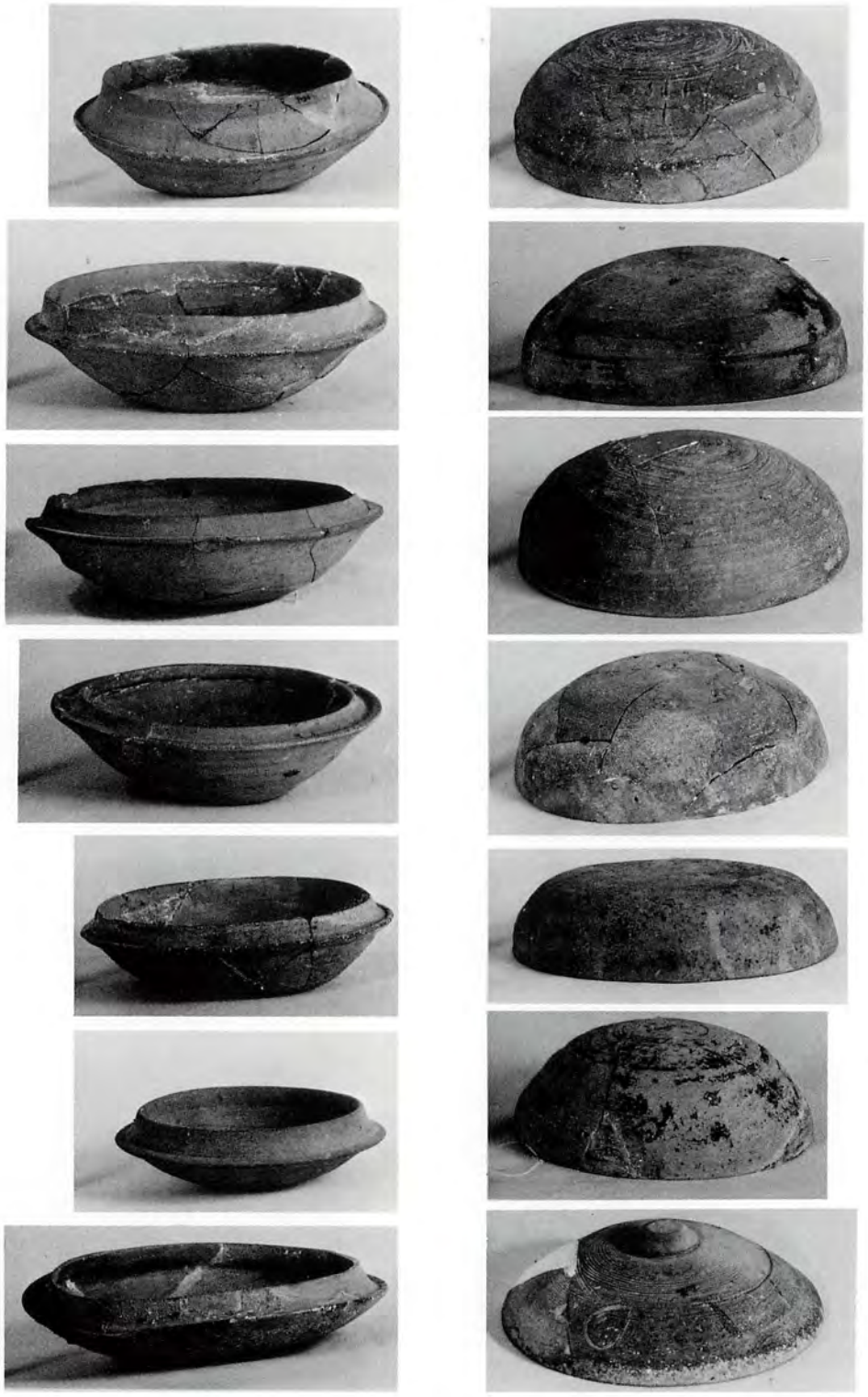
土師(高坏)

須恵器

土師器と須恵器

須恵器

図版　62



須恵器（坏）

横山古墳移転保存工事

道路建設にかかる古墳石室の石材を移転保存し将来復原を図ることにした。とくに装飾石材については色彩の剝落防止のため特別の処理を行った。

装飾文顔料剝落防止のため薬品処理と紙ばり

石屋形撤去前の保存処置１．

表面処理した石材はエバーソフトで包装する

石屋形撤去前の保存処置２．

石材に番号を入れ、図面に記録する

南側道路建設地から望む

古墳石材撤去作業１．

◀作業足場作り

崩壊防止の木枠を組む

装飾石材は筵木材等
で補強し運び出す

古墳石材撤去作業２．

古墳石材撤去作業３．

輸送トラック積込み

古墳石材撤去作業４．

基礎工事をした保存施設に石材を置く

図版　70

◀工事にかからぬ石室基礎
部分は現地に残し埋める

石材撤去後の埋めもどしと道路建設

墳丘の表面整備

石材の上に建てられた保存覆屋

工事後の古墳

古墳石材撤去後の修復と石材移転先の覆屋

発掘後

本坂北経塚

発掘前

桑水宝塔

桑水洞穴遠景

桑水洞穴発掘風景

本坂北経塚・桑水宝塔及び桑水洞穴

熊本県文化財調査報告　第41集

清水古墳群
野寺遺跡
林源衛門墓

昭和55年3月31日

編集　熊本県教育委員会
発行　〒862　熊本市水前寺6丁目18番1号
印刷　凸版印刷株式会社
〒810　福岡市中央区渡辺通2－1－82
電気ビル別館5階
☎（092）771－2161

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 41 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：清水古墳群 野寺遺跡 林源衛門墓
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日